
ソードアート・オンライン～二人目の双剣使い～

蕾姫

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ソードアート・オンライン〜二人目の双剣使い〜

【Nコード】

N3188W

【作者名】

薔姫

【あらすじ】

ある一人の青年、リン。ソードアート・オンライン攻略組きつての敏捷を持つ彼が様々な事件に遭遇したり、仲間とクエストをクリアしたりしに行く

この小説は電撃文庫から出版されている川原礫先生の小説、ソードアート・オンラインの二次創作です。原作小説にオリ主を加えませんでした

現在A L O 編。 処女作ですがよろしくお願ひします！

序章（前書き）

初投稿です。よろしくお願ひします

序章

「っ!!」

赤い光を纏った右手の剣がジェットエンジンのような音を響かせながら、敵>ゴールデン・ウルフ<を貫いた。単発重攻撃技>>ヴォーパル・ストライク<<を食らった>ゴールデン・ウルフ<は、ガラスが砕けちるような音をたてて>ゴールデン・ウルフ<は霧散した

「はぁ…疲れた…」

と言いつつも、二年間で染み付いた癖で周囲の索敵をすると、知り合いの名前とモンスターの反応があったので援護に向かうことにした

「……必要ないかもしれないけど……」

とぼやきつつもその方向に歩いていく

「よう、キリト」と軽く手を振りながら見てみるが返事がない。絶賛死合い中のキリトに答える余裕はない

「……」
もしもの時に備え、右手を剣にかける。しかし、モンスター>リザードマンロード<が放った単発重攻撃技>>フェル・クレセント<をギリギリで避けたキリトは、反撃のソードスキル：水平四連撃ソードスキル>>ホリゾントル・スクエア<<で>リザードマンロード<のHPを0にした

「おい、キリト」

死合いが終わったので、安堵の息を吐くキリトに話しかけた

「よう、リン。奇遇だな」

キリトはリンの呼び掛けに答え、手をあげながら言った

「それは同感だ。帰るところか？帰るところなら飯でも、おごってくれ」

「帰るところだけど、おごらねえよ」

「ま、どうせそうだと思ったがな。キリトはケチだから」

「…その手には乗らないぞ？」

「ちっ…まあいい。帰ろうぜ」

「ああ」

そう言って二人は第74層の主任区に向かって歩きだした

序章（後書き）

どうでしたか？何分初めてなので…

意見等いただけると嬉しいです

キャラ設定(前書き)

オリ主のデータです。無駄にチートにした気がしますw

キャラ設定

本名：鈴木 燐

性別：男

武器：双剣（普段は片手剣）

装備：黒で統一。盾無しの片手剣と色から、黒の剣士キジュに間違えられることもしばしば

性格：初対面はかなり固いが、慣れてくれば軽くなる。かなり頭がキれる、そして毒舌。クラインが大好物（いじりやすいから。BLか？と思った人は…変態ですねw俺もですけど）

システム外スキル等：基本的なのは全て可能。>>スキルコネクト<<はできる。ただし、成功率は八割。キリトは、アーリー&am p;レイト前に燐から教えてもらうという設定。なお>>アームズブレイク<<は不可能

現状報告：キリト、クライン、アスナ等の主要キャラとはすでに顔見知り力はキリトと同じくらい。

備考：両親はもうすでに他界…してるわけではなく、海外を飛び回っておりかなり多忙。両親の性格はかなり厳格で、結城家とは深い関係がある。（明日奈とは面識がない）ちなみに兄弟姉妹はいない。

キャラ設定（後書き）

次から長くなると思います

始まり（前書き）

剣技の名前とかオリキャラの名前とかを募集しています。剣技は、片手剣、ダガー、双剣、戦斧の技名を募集しています。何連続攻撃、また、重攻撃か否かも書いてくれると嬉しいですよ

始まり

「……」

「どうした、キリト？」

「いや…二年前、全てが終わって全てが始まった、あの瞬間を思い出してたのさ」

とキリトは自嘲気味に笑った

「あの時ね…」

二年前、 テスターに選ばれた俺は、運がいいと思っていた。完全ダイブという新世代のゲーム環境下でのVRMMOである>ソードアート・オンライン<を他の人よりも一足早く体験できたのだから

…いや、今、デスゲームと化したのをみると運が悪かったのだろう親によって束縛され、素直に従っていたあの頃の俺は>ソードアーク・オンライン<によってもたらされる解放感に酔っていた。正式サービス開始の2022年11月6日、日曜日。一秒も遅れずログインした。そして、武器や防具をそろえレベル上げをしていたところで、五時半すぎ世界はその有りようを、永久に変えた

突然、鐘のような音が鳴り響き俺の体を、鮮やかなブルーの光の柱が包んだ。そして、気が付くとゲームのスタート地点である>>はじまりの街<<の中央広場にいた。そして、同じようにレポートしてきたのであろう一万人程のプレイヤーの群れがいた。

「…どうなっているんだ？」と俺は考えていた。メニューを開くと驚くことにログアウトの文字が消えていた

「なるほど…この事の説明か、何かか…」
と一人合点し運営アウンスを待った。そして、「あっ…上を見る!」という声が聞こえたので視線を上上げると100メートル上空、第二層の底を、真紅の文字「Warning」と「System Announcement」が浮かび上がり、その後身長二十メートルはあるかという、真紅のフード付きローブを纏った巨大な人の姿が現れた

不意に巨大なローブの右袖が動いた。続いて左袖もゆるゆると掲げられた。直後、低く落ち着いた、よく通る男の声が、遙かな高みから降り注いだ

「プレイヤーの諸君、私の世界へよるこそ。私の名前は茅場晶彦。今やこの世界をコントロールできる唯一の人間だ。プレイヤー諸君は、すでにメインメニューからログアウトボタンが消滅しているこ

とに気付いていると思う。しかしゲームの不具合ではない。繰り返しです。これは不具合ではなく>>ソードアート・オンライン<<本来の仕様である」

「なっ……」

予想の斜め上をいく言葉に流石の凜も絶句した

「諸君は今後、この城の頂を極めるまで、ゲームから自発的にログアウトすることはできない。……また、外部の人間の手による、ナーヴィギアの停止あるいは解除もあり得ない。もしそれが試みられた場合……ナーヴィギアの信号粒子が発する高出力マイクロウェーブが、諸君の脳を破壊し、生命活動を停止させる。より具体的には、十分間の外部電源切断、二時間のネットワーク回線切断、ナーヴィギア本体のロック解除または分解または破壊の試み……以上のいずれかの条件によって脳破壊シーケンスが実行される。この条件は、すでに外部世界では当局およびマスコミを通して告知されている。ちなみに現時点で、プレイヤーの家族友人等が警告を無視してナーヴィギアの強制除装を試みあ例が少なからずあり、その結果……残念ながら、すでに二百十三名のプレイヤーが、アインクラッド及び現実世界からも永久退場している」

親が海外にいて良かったと思った。もし親がいたのなら間違いなく外そうとしていたからな、と場違いにも安堵してしまった

「諸君が、向こう側に置いてきた肉体の心配をする必要はない。現在、あらゆるテレビ、ラジオ、ネットメディアはこの状況を、多数の死者が出ていることも含め、繰り返し報道している。諸君のナーヴィギアが強引に除装される危険はすでに低くなっていると言つてよかろう。今後、諸君の現実の体は、ナーヴィギアを装着したまま二時間の回線切断猶予時間のうちに病院その他の施設へと搬送され、厳重な介護態勢のもとに置かれるはずだ。諸君には、安心して……」

ゲーム攻略に励んでほしい。しかし、十分に留意してもらいたい。諸君にとって、>>ソードアート・オンライン<<は、すでにただのゲームではない。もう一つの現実と言うべき存在だ。……今後、ゲームにおいて、あらゆる蘇生手段は機能しない。ヒットポイントがゼロになった瞬間、諸君のアバターは永久に消滅し、同時に…諸君らの脳は、ナーヴィギアによって破壊される。諸君らがこのゲームから解放される条件は、たった一つ。先に述べたとおり、アインクラッド最上部、第百層まで辿り着き、そこに待つ最終ボスを倒してゲームをクリアすればよい。その瞬間、生き残ったプレイヤー全員が安全にログアウトされることを保証しよう。それでは、最後に、諸君にとってこの世界が唯一の現実であるという証拠を見せよう。諸君のアイテムストレージに、私からのプレゼントが用意してある。確認してくれ給え」それを聞き俺を含む全てのプレイヤーはメニューを開いていた。そして入っていたアイテムは>>手鏡<<…頭の上にハテナマークを浮かべていると、突然全てのプレイヤーを白い光が包み込みそして……

「あの時は本当に驚いたよな」

「あの時っていつだよ」

「>>手鏡<<を見た瞬間だよ。鏡をみたら現実の顔だぜ？」

「あー…あの時か…いきなり隣にいたクラインの顔が不細工になっ
てびっくりしたよ」

「確かにいきなりあの顔はな」

「ひでーな」

「事実じゃねーかつ!？」

何気なく周囲を索敵するとモンスターがひっかかったので警戒をした

「あそこだ」

「>ラグー・ラビット<だ……」

「>ラグー・ラビットの肉<……」

最高級の>ラグー・ラビット<から取れる最高級の美味に設定され
ている>ラグー・ラビットの肉<の味を想像しヨダレがでて
いるキ
リト

「キリト……ヨダレたれてるぞ？」

「おっと……さて、どうやって倒そうか？」
ヨダレを拭いながら言った

「飛び道具は使えるか、キリト？」

>ラグー・ラビット<は逃げ足がとても速いため飛び道具による不意打ちを考えたが自分は飛び道具のスキルをスロットに入れてないため倒せないと判断し、キリトに希望をかける

「ああ…投剣スキルがある…だがスキル練度が低いけどな」

といつつも腰のベルトから投てき用の細いピックを抜き出した。
そして投剣スキルの基本技>>シングルシュート<<のモーションをおこし、投げた。ピックの行く末を見守っているとポリゴンの碎ける音が響き、キリトは思わず左手をぐっと握る。そして、キリトはメニューを開き、アイテム欄をみるとキリトの目に>>ラグー・ラビットの肉<<の文字が飛び込んできた

「ドロップしたか？」

期待を込めた目でキリトを見ると

「あった……」

満面の笑みでグーサインしつつキリトが答えた

「どうする？俺らで食べるか？それとも、売って装備にするか？」
と表面上は冷静に（手が震えていて、満面の笑みだが）キリトに尋ねた

「そつだなあ……リンはどうしたい？」

「食いたい…が、俺は料理スキルの練度が足りないし、今の時間か

ら頼みにいくのもな…だから、売るか？」

「そうだな。よし、エギルんところこうぜ」とキリトは転移クリスタルを手を取った

「よし、じゃあ転移！アルゲート！」

体が青い光の包まれ周囲の景色が消滅していく

「この街、猥雑で好かないんだよな………」
と顔をしかめてリンは言う

「そうか？俺はこんなかんじ結構好きだぜ？」
かつてよく遊びに行っていた電気街に似ているからだろつなと呟く
キリト

「じゃあ、行くうぜ。ついでに冷やかしかな……」

「おい、心の声が出てるぞ？」

苦笑まじりにキリトが突っ込む

「毎度！！また頼むよ兄ちゃん！」
と商談が終わったみたいなのでエギルの店に入って行った

「うっす。相変わらず阿漕な商売してるな」

「よお、ぼったくりやろう……いつか壁に埋め込まれちまえ」
相変わらず毒をはくリン

「よお、キリトとリンか。安く仕入れて安く提供するのがウチのモットーなんでね。それとリン……毎度のことだか酷くねえか？」

悪びれる様子もなくうそぶく

「それが俺だ」

「安く提供するって部分が疑わしいけどなあ……まあいいや、俺たちの買取を頼む」

「キリトとリンはお得意様だしな、あくどい真似はしませんよつ、と……」

言いながらエギルは猪首をのばし、俺の提示したトレードウインドウを覗き込んだ

「おいおい、S級のレアアイテムじゃねえか。>>ラグー・ラビッツの肉<<か、俺も現物を見るのは初めてだぜ……。キリト、リン、おめえら別に金には困ってねえんだろ？自分で食おうとはおもわんのか？」

「思ったが、練度が足りないんでな」

「同じく思ったが……こんなアイテムを扱えるほど料理スキルを上げてる奴なんてそうそう……」

「キリト君、リン君」

とそこで後ろからキリトは女の声で話しかけられた。キリトは左肩に触れたままの相手の手を素早く掴むと、振り向きざまに「シエフ捕獲」と言った

「よお、アスナ久しぶりだな」

と軽く手を上げて挨拶をする「貴様……」とかいう言葉が後ろから聞こえるが気にしないでおこう

「久しぶりね、リン君」

「珍しいな、アスナ。こんなゴミ溜めに顔を出すなんて」

「だな、スキンヘッドのいかついオッサン一人の店によくきたな」
二人がかりで毒を吐かれエギルの顔がピクピクと引きつる。がエギルはアスナに声をかけられると顔をだらしなく緩ませる……現金なやつである

「えっとシェフがどうこうって何？」

「あ、そうだった。お前いま、料理スキルの熟練度どのへん？」

「聞いて驚きなさい、先週に>>完全習得<<したわ」

「「なぬっ!」「」

俺とキリトが同時に驚く。……顔から察するにキリトは（アホか？）
とでも思ってるんだろな……

「ふふっ、リン君が驚くところ初めてみたな」

……しまった。俺のポーカーフェイスが崩れていたみたいだ

「……その腕を見込んで頼みがある」

キリトがアスナを手招きしている。アスナが覗き込んでしばらくすると目を丸くして

「うわっ!?!これ……これ、S級食材!?!」

「取引だ。こいつを料理してくれたら一口食わせてやる」

言い終わらないうちにアスナはキリトの胸ぐらを掴み、そのまま顔を数センチの距離までぐいと寄せると（羨ましい… by作者）

「は・ん・ぶ・ん」

「……俺も食うからなアスナ」
存在を消されていたようなので言うと

「じゃあ三分の一ね……いい？」

アスナの方が身長が低いため自然と上目遣いになる。上目遣いをアスナのような美少女がやると……

「わ……わかった」

「あ……ああ」

破壊力満点ですね。OKするいがいの選択肢がない

「悪いな、そんな訳で取引は中止だと振り向き、エギルに言った

「いや、それはいいけどよ……。なあ、俺達ダチだよな？な？俺にも味見くらい……」

「感想文を八百字以内で書いてきてやるよ」とキリト

「壁に食わせる高級料理があると思うか？いや、ないと俺

「そ、そりゃあないだろ……」

この世の終わりか、といった情けない声を出すエギル……どうでもいい

そのエギルを一瞥しアスナが

「でも、料理はいいけど、どこでするつもりなのよ？」

「うっ……」

「俺の部屋でもいいが、ちょっと汚いかな」

自分の部屋を思い浮かべる

「今回だけ、食材に免じてわたしの部屋を提供してあげなくもないけど」

…とんでもないことをさらりと言ったな

「今日はここから直接>>セルムブルグ<<まで転移するから、護衛はもういいです。お疲れ様」

「ア……アスナ様！こんなスラムに足をお運びになるだけに留まらず、素性の知れぬ奴らをご自宅に伴うなどと、と、とんでもない事ですー！」

（うっわー……>様く付けかよ……）と思いキリトを見ると案の定俺と同じ事を思ったらしく顔をしかめている。この場はアスナが収めたが後々大変なことになるのだが、今は知るよしもなかった

料理とチーム結成と

セルムブルグは、六十一層にある美しい城塞都市だ。そんな都市の
転移門に到着した時にはすっかり陽もくれかかっていた

「うーん、広いし人は少ないし、開放感あるなあ」

「同感だ。なんか気分が落ち着く」

「なら君たちも引つ越せば？」

「金が足りません」

とまたしてもはもる俺達

「仲いいね」

「まあね、一応親友だからな」

その完璧にシンクロした答えにふふつと笑うアスナ

「……そりゃそうと、本当に大丈夫なのか？さっきの……」

「……わたし一人の時に何度か嫌な出来事があったのは確かだけど、
護衛なんて行き過ぎだわ。要らないって言ったんだけど……ギルド
の方針だから、って参謀職たちに押し切られちゃって……」

「まあ、アスナは可愛いからな。そういうこともあるだろう」

「ふふつ、ありがとうリン君」

「まあ、何だ。悩みとか困ったことがあった何でも言ってくれよ？
必ず力になるから」
と真剣な表情でアスナにいう

「うん……リン君は優しいね」

「惚れたか？」

さっきとは一転意地悪な顔になる

「な……なわけないでしょ！」

顔を赤らめてあわてて言う

「まあ、そうだろうな。アスナはキリトのことが好きなんだし」とアスナにしか聞こえないように言う

「な……何で知ってるの!？」

もう、湯気が出そうなほど顔を赤らめてアスナはささやき返した

「俺はそういうのを見破るのが得意なのさ。まあ、さっきも言ったように何でも相談にのるからさ。応援してるよ?」

「あ……ありがとう」

「おい、アスナ、リン、何をこそこそ話してるんだ？」

「なっ、何でもない!ほら、早く行かないと日が暮れちゃうわ」
キリトが首を傾げている……この鈍感野郎め……アスナが可哀想だ

「お……お邪魔します」

「ぶっぞ」

女子の部屋に入るのは、初めてではないが、緊張するものは緊張する。初めて入ったのは朝田さんの部屋だったか……大丈夫かな、朝田さん。対人恐怖症で俺以外とはあまり話そうとしなかったし

「着替えてくるからそのへん適当に座ってて」とアスナは着替えに行った

考え事しているとキリトが話しかけてきた

「なあ……これ、いくらぐらいかかっていると想っ？」

「四千kは下らないをじゃない？」

というときリトは苦笑した

「どうした？」

「いや、俺もそんなくらいは稼いでると思うんだが、無駄遣いをついしちゃってな。それを自省してたのさ」

「ふうん……」

そんな会話をしていると簡素な白いチュニックと膝上丈のスカートに着替えたアスナが奥の部屋から現れた。そしてアスナは俺達に視線を投げ掛け

「君たちはいつまでそんな格好してるのよ」

……忘れてた

アスナはわずから5分で豪華な食卓を整え俺、アスナ、キリトで食卓を囲んだ。ちなみに>>ラグー・ラビットの肉<<は文字どおり煮込み(ラグー)料理のシチューになった

そして俺達は食の誘惑に勝てず、いただきますを言うのももどかしくスプーンを使ってそれを頬張った

俺はうまいものは人を無口にするという言葉を完全に理解した気がする。俺達三人は一言もしゃべらずシチューを完食した

「ああ……いままでがんばって生き残ってよかった……」

俺も同感だった。キリトも満足したって顔をしている

「不思議ね……。なんだか、この世界で生まれて今までずっとくらししてきたみたいな、そんな気がする」

「……俺も最近、あつちの世界のことをまるで思い出さない日がある。俺だけじゃないな……この頃は、クリアだ脱出だって血眼になる奴が少なくなった」

「攻略のペース自体おちてるわ。今最前線で戦ってるプレイヤーなんて、五百人もいないでしょう。危険度のせいだけじゃない……みんな、馴染んできてる。この世界に……」

「俺は元から帰りたいとは思ってない。俺は現実世界よりもこのバーチャルの世界の方が居心地がいいんだ。現実世界とバーチャルの違いなんて多少の誤差しかないだろう？現にこうやって食事したり、匂いをかいだり、足で外を歩いたり……現実逃避って言われるかもしれない。でも、俺は総合的に考えてこっちの、バーチャルの世界の方で生活していきたいと思っている」

「俺もほとんどリンと同じ考えだ。バーチャルとリアルの違いは、情報量の多寡だけ……」

「わたしは帰りたい」

アスナは俺達に微笑みを見せると続けて言った

「だって、あつちでやり残したこと、いっぱいあるから」
その言葉に俺たちは素直に頷いていた。

「詩乃救ってやりたいからな……」
その言葉は空に消えていった

「そつえば、君たちはギルドに入る気はないの？」

「「え……」」

「ベータ出身者が集団に馴染まないのは解ってる。でもね、七十層を越えたあたりから、モンスターのアルゴリズムにイレギュラー性が増してきているような気がするんだ」
それは、俺も感じていたがしかし……

「ソロだと、想定外の事態に対処できないことがあるわ。いつでも緊急脱出できるわけじゃないのよ。パーティーを組んでいれば安全性がずいぶん違う」

「安全マージンは十分取ってるよ。忠告は有り難く頂いておけど……ギルドはちょっとな」

「同感だ。ギルドみたいになからわーわー言われたり阿呆らしい命令を絶対に聞かないといけないなんて性に合わん」

「…なら、しばらくわたしと組みなさい。ボス攻略パーティーの編集責任者として、君たちが噂ほど強い人なのか確かめたいと思ってたところだし。今週のラッキーカラー黒だし」

「な、なんだそりゃ！」

「断る！」

「お前…ギルドはどうするんだよ」

「うちは別にレベル上げノルマとかないし」

「じゃ、じゃああの護衛の二人は」

「置いてくるし」

「なるほど……キリトとの仲をつ！？」

「それ以上は言わないで」

そこには目のハイライトが消えた阿修羅がいた

「……はい」

俺はそう答えるしかなかった

「じゃあ、明日朝9時、七十四層のゲートの前で待ってるわ」

「了解……」

一人暮らしの女性の部屋にいつまでも居座るといろいろ（主に倫理的な問題で）まずいので食事を終えるとすぐに暇を告げた

「……今のこの状態、この世界が、本当に茅場晶彦の作りたかったものなのかな……」

俺達三人はそれに答えることはできなかった

料理とチーム結成と（後書き）

はい、見ての通りヒロインはシノンこと朝田詩乃です
明日奈について二番目に好きなキャラでもあります

まだ出てくるのは当分先になると思いますけどね

現実世界の話を入れるか、過去の話を入れるか悩んでいます。サチと
かとはさすがに絡めない……リズとシリカは出します

次回、初めてのちゃんとした戦闘描写になります。上手く書けるか
分かりませんが、よろしくお願いします

憎悪のデュエルと冒険の始まり

次の日の朝9時、俺達は七十四層のゲート前にいた

「よお、キリトいい朝だな」　ちなみに天気は薄曇り

「どこがだよ。嫌な天気じゃねえか」
とキリトが不機嫌そうに言った

「どうした？眠いのか？」

「その通りだよ！　たく眠いっていうのにアスナはすぐこないし……」

「確かにな……」

と時計を見ると9時10分になっていた。10分遅刻している。と
その時何度目かの青いレポート光が発生し……

「きゃああああ！よ、避けてっ！」

「うわああああ！？」

とキリトが押し倒された。押し倒した人をよくみるとアスナだった。
なんてギャルゲ？　って思ったがとりあえずアスナを起こそうと手を
伸ばしたが……

「や、やー！！」

といきなり悲鳴が上がったので手を引つ込める

そしてアスナはキリトを殴り後ろにペタリと座り込んだ。顔は最大
級の感情エフェクトで耳まで真っ赤に染まり、両腕は胸の前でかた

く交差され……

ここまで考えて俺は状況を把握した

「……キリト」

と冷ややかな目でキリトを見る

「ごっ、誤解だ！事故だ、事故！」

あたふたしながら弁解する。……ギャルゲはエロゲにランクアップしたみたいだ

「や……やあ、おはようアスナ」

右手を閉じたり開いたりしながら……って変態か、キリト？

とそう思ったその時、再びゲートが青く光、アスナがはつとしたようにキリトの後ろに隠れた

光が消えると見覚えのある顔の男がいた。彼の名前は……たしか、クラディールだったか？

ゲートから出たクラディールは、俺、キリト、アスナをみたあと、神経質そうに口を開いた

「ア……アスナ様、勝手なことをされては困ります……！」

ヒステリック気味に甲高い声を上げた。キリトを見ると諦めの表情をしている

「さあ、アスナ様、ギルド本部まで戻りましょう」

「嫌よ、今日は活動日じゃないわよ！……だいたい、アンタなんて朝から家の前に張り込んでるのよ！？」

「ふふ、どうせかななこともあるつかと思ひまして、私1ヶ月前からずっとセルムブルグで早朝より監視の任務についておりました」

「ストーカーだな。そして、変態だな。しかも粘着質でしつこく、もつとも質の悪いタイプだな……そうか、クラディール。君はアスナの事が好きなのか。だが残念だな。アスナはキリ……言わないで！……ごほん。好きな人がいるみたいだから早々に諦めた方がいいぞ？諦めが悪いのは流行らないからな」
アスナが途中で顔を真っ赤にして遮った

「貴様ア……言わせて置けば！」

こちらアスナに負けず劣らず顔が真っ赤である。理由は正反対だが

「はいはい。悪いな、お前さんのトコの副団長は、今日は貸切りなんだ。アスナの安全は俺らが責任を持つよ。別に今日ボス戦をやるうって訳じゃない。本部にはあんた一人で行ってくれ」

「ふ……ふざけるな！！貴様らのような雑魚プレイヤーにアスナ様の護衛が務まるかあ！！わ……私は栄光ある……御託はいい。雑魚ほどよく吠えるって言うしな」

「そうだな。それに、あんたよりはマトモに務まるよ」

「ガキイ……そ、そこまででかい口を叩くからには、それを証明する覚悟があるんだろっな……」

クラディールは、震える右手でウィンドウを呼び出し素早く操作した。そして、キリトが俺とアスナに目配せをしてきた……おそらくデユエルを申し込まれたな

「……いいのか？ギルドで問題にならないか……？」

とキリトはアスナに尋ねると

「大丈夫。団長にはわたしから報告すると許可ができる」

「短気だねえ……」

「う……うるさい！！このガキを倒したら次はお前だ！！覚悟をしておけよ……」

「人を切る覚悟か？そんなもん、このゲームが始まったときから覚悟してるよ」

「ガキイ……」

顔面蒼白なり睨んできた……挑発にのるとは……こいつ、かなり弱いな

「早く始めないのか？」

デュエルを受諾したらしいキリトがクラディールに言った

「くっ、まずは貴様から後悔させてやる」

俺に口喧嘩で勝てないとさとしたのかキリトの方に意識を集中させるクラディール

「ご覧くださいアスナ様！私以外に護衛が務まる者など居ないことを証明しますぞ！」

叫びつつ腰から華麗な装飾が施してある両手剣を引き抜く。対してキリトも背から片手剣を抜く。そしてデュエルは始まった

まず動いたのはキリト。下段の受身気配を見せていたが予想に反し上段の片手剣突進技>>ソニックリープ<<で仕掛けた。対してクラディールはキリトとは一瞬遅く両手用大剣の上段ダツシユ技、>>アバランシユ<<を放とうとした。だか放たれる一瞬前にキリトの剣がクラディールの大剣に衝突した。そして……

クラディールの大剣は折れ、半分が空中ですれ違い着地したキリトとクラディールの中間の石畳につきたった。そして、ポリゴンとなつて砕け散った
すげえ、いまの狙ったのか、などの声が聞こえる。これがキリトの得意とするシステム外スキル>>アームズブレイク<<だ。まさに神技である

「武器を替えて仕切りなおすなら付き合っけど……もういいんじゃないかな」

とキリトが言うとクラディールは「アイ・リザイン」と言った。なんで日本語で言わなかったのだろうか？負けたってのに相変わらず

プライドの高いやつだ。そしてギャラリーに向かって

「見世物じゃねえぞ！散れ！散れ！」

「貴様……殺す……絶対に殺すぞ……」

その言葉に俺はキレた

「殺すって言葉を簡単に使うんじゃないやねえ……人を殺すってのはな……例えゲームの中だとしてもな、軽いもんじゃねえんだぞ。あいつだってなあ、罪悪感で押しつぶされそうになってんだよ！！殺すっていうのはなあ。相手の残りの人生を全て背負うぐらいの覚悟を持つて言えよ！！」

「リン……」

「……」

クラディールは何も言わず憎悪の目で俺とキリトを睨んだ

「クラディール、血盟騎士団副団長として命じます。本日をもって護衛役を解任。別命あるまでギルド本部にて待機。以上」

「……なん……なんだと……この……」

かろうじてそれだけが聞こえた。そしてマントの内側から転移結晶を掴み出し、それを掲げ「転移……グランサム」と言った消えて言った

「……ごめんなさい、嫌なことに巻き込んでやって」

「いや……俺はいいけど……」

「俺もかまわない。それより攻略に行くんじゃないのか？」

「そうなんだけど……リン……さっきの言葉って……」

「気にするな。一人の知り合いのことだよ」

「……いつか話してもらおうよ」

「了解」

と苦笑する

「じゃあ、行こうか。前衛よろしく」

「いや、ちょっと、前衛は普通交代だろう！」

「二人いるんだから交代でできるじゃない」

「アスナもやれよ」

文句を言いながらも、アスナを追いかけた

憎悪のデュエルと冒険の始まり（後書き）

え？主人公が目立ってないって？すみません。まだ、キリトくんがメインキャラになると思います……とりあえずオリジナルパートにならないと目立ちません

感想や、レビューをよろしくお願いします。技名も募集中です

あとこの小説をお気に入り登録してくれた方々。感謝感激です。これからもよろしく願います

輝く目の悪魔と二対の双剣（前書き）

最長です……二つにわけべきだった……

途中なのはネタあり……タグ付けないといけないのか？

輝く目の悪魔と二対の双剣

「それにしても君たち、いつつも同じ格好だねえ」

「い、いいんだよ。服にかける金があったら、少しでも旨い物をだなあ……………」

「俺は単純に黒が好きだしそれに隠蔽能力も高いしなっ!？」
索敵を使うとプレイヤーの反応があった

「どうしたの？」

「アスナ……………」

キリトがマップを出し、可視モードにしてアスナに見せる

「多い……………」

十二個のプレイヤーを示す緑の光を見てアスナは呟いた

「それにこの並び方…………おそろく>>軍<<だな」

「一応確認しよう。そのへんに隠れてやり過ぎそう」

「あ……………」

うん、その服装はいかにも隠密行動に向かないな

「どうしよ、わたし着替え持ってないよ」

「ちよつと失敬」

キリトが自分のレザーコートの前を開くと、右隣にうずくまるアス

ナの体を包み込んだ。というか

「仲いいなおまえら……」

「っつ!？」

顔を真っ赤にする二人

「そっ、それより来るよ!」とアスナはささやいて指を唇の前に立てた。顔を赤らめながら

姿を現したのは予想通り>>軍<<のメンバーだった。前衛に片手剣持ちが六人。後衛に巨大な斧槍持ちが六人

「……あの噂、本当だったんだ……」

「噂?」

「うん、ギルドの例会で聞いたんだけど、>>軍<<が方針変更して上層エリアに出てくるらしいって。もともとはあそこもクリアを目指す集団だったのよね。でも二十五層攻略の時大きな被害が出てから、クリアよりも組織強化って感じになって、前線に来なくなっただじゃない。それで、最近内部に不満が出てるらしいの。……で、前みたいに大人数で迷宮に入って混乱するよりも、少数精鋭部隊を送って、その戦果でクリアの意志を示すっていう方針になったみたい。その第一陣がそろそろ現れるだろうって報告だった」

成る程。それで最近見なかった>>軍<<がな……だが

「実質プロバガンダなのか。でも、だからっていきなり未踏破層に来て大丈夫なのか……?レベルはそこそこありそうだったけどな」

「俺は大丈夫じゃないと思う。最前線つてのは、数値的パラメータの他に経験とそれなりの度胸がいる。>>軍<<みたいに大人数で安全な狩場にしか行かないような奴らが、いきなり最前線で安全も何もかもが不透明な場所で満足に戦えるとは思えない」

「そうだな……まあ、連中も危なくなったら脱出するだろ。俺たちも急ごうぜ。中でかち合わなきゃいいけど」
キリトは立ち上がり言った

「もうすぐ冬だねえ……。わたしも上着買おっかな。」
その時にはもう>>軍<<の連中の姿は見えなかった。俺は背中
の剣にそっと触れ、その存在を確かめた

はい、今絶賛戦闘中の俺たちです。正直俺はいらなと思います。
敵は>>デモニツシュ・サーバント<<。骸骨である。アスナは放
たれた>>バーチカル・スクエア<<を全て避けると八連続攻撃>
>スター・スプラッシュ<<で反撃した。そして、アスナがブレイ
クポイントを作るとキリトが斬り掛かった。キリトが放ったのは先
程>>デモニツシュ・サーバント<<も使っていた>>バーチカル・
スクエア<<だ。敵の反撃を剣で弾いたキリトは>>メテオブレイ
ク<<を放った。その七連撃を終えると骸骨は乾いた音を立てて崩
れ落ちた。∴俺？何もしてないよ。主人公なのに

四回モンスターと遭遇したのだが……俺が戦ったのは一回だけだった。何故ならアスナとキリトのバトルマニア組が近くにいるからだ。敵が出てくると二人で突っ込んでいき、あっという間に倒してしたうからだ。閑話休題

しばらく歩いていくと徐々にだがオブジェクトが重くなってきた。それにマップデータの空白もあとわずか。そろそろボスのお出ましまろう。とうとうついた回廊のつきあたりには、灰青色の巨大な二枚扉が待ち受けていた

「……これって、やっぱり……」

「多分そうだろうな……ボスの部屋だ」

アスナがギョツとキリトのコートの袖を掴んだ。……胸焼けがする

「どうする……？覗くだけ覗いてみる？」

「……ボスモンスターはその守護する部屋からは絶対にでない。ドアを開けるだけなら多分……だ、大丈夫……じゃないかな……」

「言い切れよ……まあ転移アイテムを使えば大丈夫だろうがな」

「了解。アスナも」

「うん」

「いいな……開けるぞ……」

かなりのスピードで扉は開いた。中に目を向けると完全な暗闇。そこにいるものに死をイメージさせるような冷たく濃密な闇がそこにはあった

次の瞬間、二つの炎が灯りそれは部屋の中央まで真っ直ぐ向かい最後に大きな火柱が吹き上がった。アスナがキリトの右腕にしがみついているが、それをネタに弄る余裕は俺にはない。なぜなら火柱の後ろから筋骨隆々で体色は青くねじれた太い角、それに山羊の顔。数々のRPGでお馴染みの姿。すなわち悪魔である。実際この目で見ると心の底から恐怖が沸き起こってくる。>>The Gleameyes<<、輝く目それがそいつの名前だった。そいつは右手に持った巨大な剣をかざして、こっちに向かって地響きを立てつつ猛烈なスピードで突進してきた

「やー、逃げた逃げた」

ここは安全エリアに指定されている広い部屋。向かってきた悪魔を見て俺たちはここまで逃げてきたのだ

「こんなに一生懸命走ったのすつごい久しぶりだよ。まあ、わたしよりキリト君の方が凄かったけどね！」

「……リ、リンの方が」

「索敵してたの俺だけだったろ？」

「ぐっ……」

キリトは何も言えなくなりアスナはそんなキリトを見てくすくす笑っている。そして急に真顔になり

「……あれは苦労しそうだね……」

「そうだな。パツと見、武装は大型剣ひとつだけど特殊攻撃アリだろっな」

「あの姿から察するに、物理攻撃力が高そうだな。特殊攻撃っていつでも動きを少し止めるとか、補助的なもの。一応人形だから死角からの攻撃に弱いはずだ。だから……」

「前衛に堅い人を集めてどんどんスイッチして行くしかないね」
俺の言葉を引き継ぐアスナ

「盾装備の奴が十人は欲しいな……。まあ当面は少しずつちよっかい出して傾向と対策って奴を練るしかなさそうだ」

馬鹿……盾ってフレーズなんて出したりしたら

「盾装備、ねえ」

ほら、言わんこっちゃない

「な、なんだよ」

「君たち、なんか隠してるでしょ」

「いきなり何を……」

「だっておかしいもの。普通、片手剣の最大のメリットって盾持てることじゃない。でも、キリト君とリン君が盾持ってることみたくはない。わたしの場合は細剣のスピードが落ちるからだし、スタイル優先で持たないって人もいるけど、君たちの場合はどっちでもないよね。……あやしいなあ」

キリトが冷や汗をかいている。俺？なるべく秘密にしておきたいけど、アスナにならかまわないから普通です。まあここは助け船を出してやりますか

「アスナ、そのへんにしておけ。それにスキルの詮索はマナー違反だ。誰にでも秘密はあるものだ」

「秘密の塊のような人が……まあ、いいわ」

秘密の塊とはなんだ。ミステリアスと言ってくれ

「わ、もう三時だ。遅くなっちゃったけど、お昼にしましょうか」

「なにっ。て、手作りですか」

キリト、やかましい

「愛妻弁当ねえ……よかつたなキリト。俺は向こうに行ってるから二人で仲良く食べてるといい」

「あつ、愛妻！？まだ、結婚してないよ」とアスナ……自爆したな

「まだつて？」

「……」

あつ、顔を真つ赤にしてしゃべらなくなった。ついでにキリトも真つ赤になりながらフリーズしてるし

「そつ、それより早く食わせてくれ、アスナ」……逃げたな

アスナはバスケットから大きな紙包みを三つ取出し、一つを俺にくれた。大口を開けてかぶりつくとなんとも懐かしいってまでまで、これはマクナルドのハンバーガー！？

「おまえ、この味、どうやって……」

「俺も知りたいな」

「一年の修行と研鑽の成果よ。アインクラッドで手に入る約百種類の調味料が味覚再生エンジンに与えるパラメーターをざくざくんぶ解析して、これを作ったの」

「アスナ……少しでいい。分けてくれないか？」

「うん、いいよ」

ありがたい。料理のレパートリーが広がる

そんな食事も終わり……デザート（キリトの肩にアスナが自分の肩を触れさせ、寄り添っている光景）をいただいていると不意にプレイヤーの一団がやってきた。あ……デザートタイムが終了した

「おお、キリト、リン！しばらくだな」

話しかけてきたのはクライン。弄りやすく、面白いやつだ。命の恩人でもあるが俺が助けたことも多々あるから立場は五分五分である。そして、アスナを見て固まり、自己紹介を始めた。しかも二十四歳独身とか言いだしやがった。クラインに向けて笑顔を見せてやると、ビクツとした。……失礼な。弄るネタができたから笑ってやったのに……

等という心温まる？コミュニケーションをとっていると

「キリト君、>>軍<<よ!」

>>軍<<は俺たちとは反対側の端で座りこむと唯一座り込まなかつたリーダーらしき人物がこっちに近づいてきた

「私はアインクラッド解放軍所属、コーバッツ中佐だ」

…中佐とかない

「キリト、ソロだ」

俺たちを代表してキリトが答える

「君らはもうこの先も攻略しているのか？」

「……ああ。ボス部屋の手前まではマッピングしてある」

「うむ、ではそのマップデータを提供して貰いたい」

……こいつはよほどめでたいやつかゴミだな

「な………て………提供しろだ!?!?てめえエ、マッピングする苦勞が解って言ってるのか!?!」

クラインの言葉はここにいる全員の言葉を代弁したものだ

「我々は君ら一般プレイヤーの解放の為に戦っている!諸君が協力するのは当然の義務である!」

……斬るか？と剣を抜きかけていた俺をキリトが止めた

「どうせ街に戻ったら公開しようと思っていたデータだ、構わないさ」

「おいおい、そりゃあ人が好すぎるぜキリト」

「そうだぞ、キリト。こんなゴミ野郎に渡すデータなんてない」

ゴミ野郎の部分で片方の眉がぴくりと動くが、襲い掛かって来なかった。もし、襲い掛かってきたのなら正当な理由で戦闘不能にできたのだが

コーバツツはキリトの送信を受けると部下を連れて迷宮に入っていた

「……大丈夫なのかよあの連中……」

「いくらなんでもぶつつけ本番でボスに挑んだりしないと思うけど……」

「……一応様子だけでも見に行くか……？」

その時、俺は嫌な予感を感じていた。だからキリトの問いにすぐ首肯していた

安全エリアを出て三十分。俺たちはボス部屋に続く長い回廊を進んでいた

「ひょっとしてもうアイテムで帰っちゃまったんじゃない？」

「あり得ない。あのゴミがそんなすぐに帰るとは思えないし……だとすると……」

その不安は現実となった。微かに聞こえるそれはまさに悲鳴だった。それを聞いた次の瞬間俺たちは全力で走りだしていた。

「おい！大丈夫か！」
キリトが半身を扉の中にいれ叫ぶ

俺は中にいる人数を数える……二人足りない

「二人いない！」

「なにっ」

とその時一人が斬馬刀の横腹で薙ぎ払われ、HPを赤い危険域に落とすにつれ床に激しく転がった

「何をしている！早く転移アイテムを使え！！」
とキリトが叫ぶが男は絶望したような顔で

「だめだ……！く……クリスタルが使えない！！」

「なっ……」

離脱ができない今、姿が見えないということは

「何を言うか……ッ！！我々解放軍に撤退の二文字は有り得ない！
！戦え！！戦うんだ！！」

「馬鹿野郎……！！」

人が二人も死んでるというのにあの野郎はっ！

「おい、どうなってるんだ！！」

追い付いたクラインたちに簡単に事態を伝える

「な……何とかできないのかよ……」

「無理だ……離脱ができないこの空間でこの人数で飛び込むのは自
殺行為だ……」

俺は強く手を握りしめる。現実ならば血がでてるだろう。俺は……
無力だ……

そうしているうちに体制を立て直したらしいコーバツ達

「全員……突撃……」

二人はHPを限界まで減らして床に倒れている。残る八人を横列に
並べコーバツが剣をかざして突進を始めた

「やめろ……っ！！」

八人同時攻撃なんて常識はずれにも程がある行為。そうこうしてる
うちに白い息を吹きかけられ動きが鈍ったところを悪魔の巨大な剣
にコーバツがすくい上げられ、HPが全損し、アバターを四散さ
せた

「だめ……だめよ……もう……」
キリトはアスナの腕に手を伸ばすが、アスナは掴まれるより早く飛び出した

「だめーッ!」

「アスナッ!」

キリトも飛び出し、俺も続こうとしたがクラインに止められた

「なぜ、止める!」

「このままだと、全滅しちゃう。おまえだけでも生きろ!」

「……親友を見捨てるくらいなら死んだ方がマシだ。それに……」
そこで俺は言葉を切り、メニューを操作する

「俺たちは死なない。生き残るために行くんだ!」

新たな重みが腰に加わったのを感じ、駆け出す

「全く、どいつもお人好しだな……」

俺に追いつつつクラインが言う

「何だかんだ言いながらお前もついてきてるじゃねえか」

「まあな。親友を見捨てるほど俺は腐っちゃいないってことさ」

「じゃあ、行こうぜ。生き残るためにな」

「キリトっ！スイッチ！」

一撃を受け黄色域に落ちていたキリトに叫び。キリトの前に滑りこみ俺は二本の剣を腰から抜いた

「はああああ！」

俺は気合いをあげ悪魔の剣を右手の剣で弾き左手の剣で切った

「グオオオオオ！」

悪魔が反撃の一撃を放ってきたが俺は剣をクロスし受けとめる……
が、俺はスピード重視の剣士だ。筋力はあまり高くない。結果

「くそっ、重すぎる!!」

受け止めきれず徐々に剣が下がってくる。コースは直撃つまりクリティカル。このまま食らえばHPが0になるのは必至だ。だがあきらめない。降りてきた剣があと数ミリになったところでクラインの刀が悪魔の剣を弾きかえした

「次はこの俺様だ!!」

クラインはそう叫んで悪魔と対峙する

俺は回復ポーションを飲みながら後ろを振り向く。そこには二本の剣を背中に背負ったキリトがいた。アイコンタクトをとる。キリトが頷いた

「行くぞっ!!」

クラインをはじめとする>>風林火山<<の面々とアスナが必死に支えているフィールドに俺とキリトは飛び込んだ

「キリト！弱点は脇腹だ！キリトは右、俺は左だ！」

「わかった！！！」

「スイッチチ！！！」

俺たちは悪魔の前に飛びだし、そして懐に潜りこんだ。悪魔の剣の縦振りをキリトが剣をクロスし弾き返し、バランスを崩させた

「うおおおおああ！！！」

俺たちの隠し玉。エクストラスキル>>二刀流<<だ。その上位剣技>>スターバースト・ストリーム<<全十六回攻撃をキリトが放った。俺は、左手の剣で四連続剣技>>バーチカル・スクエア<<を放った。最後の四つ目の斬撃が放たれる瞬間意識から左手の剣を外し、右手の剣に意識を集中させる。そして右手で五連続剣技>>クレセント・スラッシュ<<さらに最後の切り上げをまた意識を外し、左手に集中。七連続剣技の大技>>イービル・ソウル<<悪魔の魂の名をもつ技を悪魔に打ち込む。皮肉な物だと口の端をあげつつ右手に意識を集中させる。ここまでの攻防でHPは俺、キリト、悪魔共に、赤い危険域に落ちていた。悪魔は剣を横に振り雑払おうとしている。キリトも>>スターバースト・ストリーム<<の最後の攻撃を放とうとしている。最後の攻撃単発重攻撃>>ヴォーパル・

ストライク<<を放った

「はあああああああ！」

悪魔は硬直し次の瞬間砕けちった。俺もキリトもそれを喜ぶ気力もなかった。HPは僅か数ドットを残しそこで止まった。俺もキリトもどちらともなく崩れ落ち座り込んだ。俺は残った力を使い>>ハイ・ポジション<<を飲んだ

「キリト君！キリト君ってば！！！」

アスナがキリトに呼び掛けているが返事がない。屍のよ（ry。あつ、起きた。そしてアスナに抱きつかれた

「バカッ……！！二人とも無茶して……！！」

……返す言葉もございません

「まあ、生きてたんだからよしとしたら？」

と言ったら睨まれた……さっきのボスより怖い……管理局の白い悪魔のごとく

「生き残った軍の連中の回復は済ませたが、コーバッツとあと二人死んだ……」

「……そうか。ボス攻略で犠牲者が出たのは、六十七層以来だな……」

「こんなの攻略なんて言わない。ただの自殺だ。一人でならまだ許せるがこんだけの人数を巻き込みやがって……」
と吐き捨てる

「そりゃあそうと、オメエラ何だったんだよさっきのは!？」

「エクストラスキルだよ>>二刀流<<」

キリトは多少躊躇したようだが俺が目で合図すると観念したように俺と同時に言った。おお……というざわめきが聞こえた

「俺のは邪道だがな」

「あれは何だったんだ？」
とキリト

「システム外スキル>>スキルコネクト<<だよ」

「方法は？」

「すまん……また今度。とりあえず俺は休みたい」

「まあ、そうだろうな。だが水臭えなキリト、リン。そんなすげえウラワザ黙ってるなんてよう」

「スキルの出し方がわかってれば隠したりしないさ。でもさっぱり心当たりがないんだ」

クラインは俺の方を見てくるが俺も同じと頷く

「……こんなレアスキル持ってるなんて知られたら、しつこく聞かれたり……いろいろあるだろう、その……」

クラインは頷く

「ネットゲーマーは嫉妬深いからな。オレは人間ができてるからともかく、妬み嫉みはそりゃああるだろうな」
いろいろ突っ込みたいが今日はもう疲れた

「それに……」

とキリトとアスナが抱き合っているのをみて続ける

「……まあ、苦労も修行のうちと思って頑張りたまえ、若者よ」

「勝手なことを……」

クラインが軍の方へ行っている間俺はキリトたちに話しかけた
「キリト……俺は抜ける。ピンチになったら駆け付けるからな」

「リン君、これからどうするの？」

「前線を離れてのんびりするさ。 >>二刀流<<のこともばれたし、前線にいるとうるさそうだ。七十五層のボス攻略のときは行くからその時かピンチのときにまた」

「うん、わかった。死なないでね」

「前線でもないのに死ぬかっつうの。 ……じゃあな」
クラインにも一言かけ俺はその場を立ち去った

輝く目の悪魔と二対の双剣（後書き）

はい。ようやくオリジナルパートです

早くGGOに行ってシノンが書きたいです

感想ください……駄文ですけど

素材集めと二人の少女

七十四層での死闘のあと迷宮区を抜けるとき、運悪く>>ゴブリンロード<<と鉢合わせしてしまった。こいつの持っている武器は毎回違うので対処の方法も変わってくるのだが、今回の>>ゴブリンロード<<が持っているのはダガー。一発の威力はそう大したことはないが連続で素早く連撃に適した武器だ。俺はここでミスをおかした。ボス戦のあとで頭がうまく働いていなかったため相手の武器の情報を一つ見逃していたのだ。ダガーの背にギザギザがついていてそのダガーは>>ブレイク・ダガー<<と呼ばれていることに

先制攻撃は俺、六連撃>>クレセント・スラッシュ<<を放った。が三発目、左上からの切り下げを>>ゴブリンロード<<はダガーの背で受け止め、そのままひねった。すると甲高い金属音をたて俺の剣が砕けちった

「なっ!?!」

驚きつつも下がり、メニューを呼び出し新たな剣を装備。そして、>>ヴォーパル・ストライク<<を放ち>>ゴブリンロード<<を葬った

「ちっ……」

>>ブレイク・ダガー<<の特殊能力を忘れていた自分に舌打ちをした。>>ブレイク・ダガー<<は一定値まで耐久値が下がった武器を一割の確率で破壊する能力がある。先程のボス戦で耐久値が減っていたようだ

「はぁ……… 転移クリスタルをケチったのがまずかったか………」
今さら後悔しても遅い。新しい武器を調達しなくては

「アスナが言ってた武器屋に行くか……」
そういつてリンは転移をした

アスナから以前聞いていた四十八層主住区>>リンダース<<にある鍛冶屋、>>リズベット武具店<<。その扉をくぐると「いらっしやいませ！」という元気な声が聞こえた。本当に武器屋か？と思えるほど童顔。ピンクの髪にダークブルーの大きめな瞳、小作りな鼻と口……もう一度思う。本当に武器屋か？

「あの……」

「ん？」

「キリトですか？」

「そんなに似てますか？キリトの奴と」

「何となく……顔が見えなかったので……ごめんなさいっ」

「いや……いいよ。よく間違われるんだ」

黒い装備に盾無しの片手剣……よく>>黒の剣士<<キリトと間違

えて決闘を挑まれるんだが……

「えっと、武器をお探しですか？」

「あつ、はい。片手剣を」

「片手剣はこちらの棚ですね」

既成武器の見本が陳列されているケースを示された

「オーダーメイドをお願いしたいんだけど」

「オーダーメイドになりますと多少お高くなってしまっんですけど

……」

「予算とかは気にしなくていいから今作れる最高の剣を作って欲しいんだ」

仮にも攻略組だからな

「……ぷっ……あははは」

とリズベットはいきなり笑い出した

「え、えっと？」

「ごめんなさい。あまりにもセリフがキリトと全く同じで」

「キリトとって……それより武器をお願いしますリズベットさん」

「あたしはリズでいいよ」

「わかりましたリズさん」

「……固いなあ」

「癖なんですよ。慣れてくれば軽くなるんで」

苦笑混じりに言う

「わかりました。あたしは軽くいきますんで。友達の友達は友達
てね」

「これからもよろしくお願いします、リズさん」

「で、どんなのがいいの？」

「スピードタイプの片手剣です」

「ふーん……あんたぐらいのレベルのはないわ……素材取りしない
と」

「えっと、言われれば取りにいきますよ？」

俺の剣だ。妥協はしたくない

「……よし、じゃあ行きましょうか」

「へ？リズさん。どこへ？」

予想外の答えに啞然とする俺。一緒に行くって言ってるみたいだけど……

「素材取りよ。素材取り。一緒に行くわよ」……やっぱり

五十二層、ここは、洞窟が多い階層。トラップが多少多いが、サブダンジョンが多く中層プレイヤーに人気の場所である

「リズさん、レベルはどれくらいですか？」

「五十五つてところかな」

「……大丈夫なんですか？」

階の数字が適正レベルであるが、デスゲームと化したアインクラッドでは、安全マージンは階の数字+10が常識である。つまりこの場合の適正レベルは六十二。五十五では足りないのだ

「リンが守ってくれるんでしょ」

ウインクをしながら言った……悪女か

「今、失礼なこと考えたでしょ」

「イイエ、ソナナコトハゴザイマセン」

「片言になってるよ……」俺は笑って誤魔化す

五十二層のゲートを通った俺たちは、とりあえず金属素材採集のクエストフラグを立てに行った

「ここに来るのも久しぶりだな……」

「来たことあるんだ」

「一応攻略組だからね」

「へー。キリトとアスナは元気ですか？」

「元気だよ。二人ともうぶだから……ふふっ」
おっとにやけが止まらない

「むっ……」

リズムが少しむっとした顔をしている

「もしかして、リズムもキリトのことが好きなのか？」

「うん……」

顔を真っ赤にしてうつむいたよ。素直に認めちゃったし

「アスナとキリトはもうすぐゴールインすると思うけど頑張りなよ」

「当たり前。略奪愛なんてのもそそるし」

……完璧悪女だ。ふふふとか笑ってるし

「ごほん。日が暮れる前に行こうか。フラグ立てに」

「んで、何でここにいるんだ。シリカ？」

俺の前には肩に小さな竜ビョナをのせたダガー使いのシリカがいる

「それはごっちのセリフですよ、リンさん」

「俺は金属素材目当てだ。剣が折れたんでな」

「それは大変でしたね……隣にいるのは誰ですか？もしかして……コレですか？」

小指を立てるシリカ

「違って。シリカのライバルだよ」

「ちょ、ちよっとリンー！」

何も聞こえせんつと

「ふーん……まあ、よろしくね。私はダガー使いでビーストテイマーのシリカ。でこの子はピナ」
「きゅーとピナが鳴く」

「えっと、鍛冶屋でメイス使いのリズベットです。はじめまして」

「じゃあ、シリカ俺たちは行くから」

その場を去ろうとするとシリカに腕を掴まれた

「私も行きます」

「……わかった」

両手に花ではない。キリトに惚れている女子二人を引き連れ俺は迷宮区に向けて歩みを進めた

素材集めと二人の少女（後書き）

キャラが変わってませんでしたかね？

技名、モンスター名など募集中です。あとリンの新しい剣の名前とかも

リン「よろしくな」

リズ「武器の名前は勝手に決めるなんてできないんだけど……」

蕾姫「この小説の神たる私に不可能はないっ（キリッ）」

リン「……」

リズ「……」

蕾姫「なんだその痛い子を見るような目は……見るなあ、そんな目で俺を見るなあ！」

リン「古い……そのネタわかる人あまりいないと思うが？」

蕾姫「大丈夫だ。問題ない」

リン「馬鹿はほっというてこんな駄文を読んでくれてありがとうございませす」

蕾姫「これからも>>ソードアート・オンライン<<二人目の双剣使い<<<をよろしく願います」

迷宮と新たな剣と（前書き）

剣の名前を出して下さった>>>00フリーダム<<<様ありがとうございます
ございます。使わせてもらいました。ではどうぞ

迷宮と新たな剣と

迷宮区に入るといきなりモンスターたちの熱烈な歓迎を受けた。大きなコウモリは>>キラーバット<<。素早さ以外の能力は低いが群れる上に吸血によるHP回復とかなりやつかないなモンスターだ。飛行タイプのためリズベットのメイスはあまり効果を発揮しないため自然と俺とシリカが頑張ることになる

「はあっ！」

「やあっ！」

俺とシリカの気合いが洞窟に響き渡る。俺のレベルや、武器の威力によりソードスキルに頼らずとも俺は倒せる。シリカは発動スピードが速く剣のスピードも速いダガー系三連続剣技>>ソニック・テアー<<を連発し、一匹ずつしとめている。時折ピナが泡をはき噛み付こうとした>>キラーバット<<をひるませる。そこにリズベットがメイスを振り下ろし、しとめている

程なくして>>キラーバット<<の群れは全滅した。軽くハイタッチを交わす。その後もモンスターと出会うが何の問題もなく倒す

「えっと、この先みたいですよ」

「……簡単すぎないか？このレベルなら金属素材は山ほど手に入るだろ」

「何でもクイズ形式みたいですよ。レベルが高すぎて誰も答えられなかったみたいです」

「ふうん……まあ、行くか」

中に入るとかなり広がった。そしてその部屋の奥には人間の頭、獅子の体。ギリシア神話に登場し、古代エジプトでは支配者の象徴とされた伝説上の生き物、その名は……

「スフィinks……」

「汝、我がなぞ掛けに挑戦するのか？」

「当たり前だ。そのために来たんだからな」

「では、第一問だ」

「あるものは恐怖し、あるものは自ら得ようとする。だが皆に平等にすぐに訪れる。さてこれはなんだ？」

「……”死”かな？」

とシリカは顔色を青くしてつぶやいた

「すぐ来たら嫌だよ」

とリズベット

「答えは”未来”だ」

「……ふむ、正解だ」

「そっか、確かに”未来”ならすぐ来るもんね」

「では、次の問いだ」

「最も欲深い生物はなんだと思う？」

「……人間」

だってね、人は下らないことで争ったり奪いあったりする。だが……

「では、次の問いだ」

「汝にとって正義とはなんだ？」

「決まってる。自分が正しいと信じることを貫くことだ」

「それが例え犯罪だとしてもか？」

「悪いことだが事情があったとしたら、百パーセント悪だと言えるのか？逆に百パーセント善だという行動があるのか？自分が正しいと信じればそれは自分にとっての正義になる。正義ってのは個人の考えによって簡単に作れる曖昧なものだ」

「ふむ、合格だ。先に進むといい」

スフィックスは脇に退くとそこに座り込んだ

「じゃあ、行くか。シリカ、リス」

「うん」

「よし」

スフィングスの部屋の奥には階段があり、それを登りきると、祭壇
がありその上に真っ黒な金属素材があった

「これが……」

「スピード系最高級のインゴット……」

そのインゴットは全体に鈍い光沢があり重量感を示している

「じゃあ、帰ろう」

と俺たちは踵を返しその場を後にした

「じゃあ、作るね」
そのインゴットを炉で熱し何度も叩く。規定の回数叩くだけだがその表情は真剣だ。しばらくするとそのインゴットは光を放ち姿を剣へと変えた

刃の色は漆黒。全てを吸い込んでしまいそうなほど深い黒。とても美しい剣だった

リズはその剣を両手で持ち、指を伸ばしてクリックした

「えーと、名前は>>フリーダム・ブレイド<<ね。あたしが初耳ってことは、今のところ情報屋名鑑に載ってない剣だと思っわ……どうぞ試してみて」

「ふむ……」
二三振ってみる

「振りやすくて、ほどよい軽さ……いい剣だな」
自由を名に含む剣だった。この世界に来て両親からの束縛から解放され、自由を手に入れたその自由を象徴しているような気がした

「リンさん」

その時、シリカが話しかけてきた

「リンさんがさっき使っていた剣もこの剣も同じぐらいの性能だと思っんですけど、何で二本もいるんですか？」

「それは俺が>>双剣使い<<だからだよ」

「そ、それって!?!」

「ああ、ユニークスキルだよ」

あ、目が点になってる

「キリトと同じね」

ほう、キリトのことも知ってたか

「キ、キリトさんですか!?!」

シリカ……弄るネタをありがとう

「つと」

なんて考えていると視界の端が点滅しているのに気が付いた。どうやらメールが来たようだ

「すまん……ちょっと用事ができた」

なんだか嫌な予感がする

「何かあつたんですか？」

硬直から解放されたシリカが聞いてきた

「すまん……一刻の猶予もないんだ」

俺は転移クリスタルを取り出しながら言った

「じゃあ、また……転移>>ラフ・タウン<<！」

と俺は五十五層の主住区に転移した。嫌な予感を肌で感じながら

ちなみにさっきのメールはアスナからで「キリト君が隊の訓練で五十五層に行くみたいなの。チームメンバーにクラディールがいるの。私は副隊長だから行けないし……何か嫌な予感がするから急いで来てくれないかな」と書いてあった

迷宮と新たな剣と（後書き）

蕾姫「クラデイルめエ……あいつ嫌いだ」

リン「それは俺も同感だ」

蕾姫「どうやって惨殺してくれよう……ふふふふ」

リン「……壊れたか」

蕾姫「試験のストレス、全てぶつけてくれようぞ」

リン「あ、試験だったんだ。この小説を書いてたじゃん。いいのか？試験勉強そっちのけで。もう高2だろ？」

蕾姫「……多少はやってるから見逃して……」

リン「まあ、俺はいいけどな」

蕾姫「……とりあえず感想&技名を出して欲しいです。お願いします」

愛と狂気と（前書き）

1日空いてしまってますみませんっ！忙しいです。最近……

ソードアート・オンラインの世界に入れたらとよく思います

ちなみにようやくアクセルワールドを読み始めました 遅い

愛と狂気と

五十五層の主任区>>ラフ・タウン<<に転移した俺はそこにはアスナが座っていた

「リン君……お願い。嫌な予感がするの」

「俺もだ。じゃあ行ってくる。アスナも一応準備しとけ」

といいつつ索敵スキルの上位派生追跡スキルを使いキリトたちを追って全力で走りだした

植物の少ない乾いた荒野を俺は全力で走る。すると>>ファイア・リザード<<が現れた。名前の通り炎を使うトカゲのようなモンスターで、攻撃を受けると火傷のペナルティを負うやつかいなモンスターだ。それが三匹

「くっ……邪魔だっ!!」

かわすのは不可能と判断し、すぐに右手の剣で>>ヴォーパル・ストライク<<を放ち一匹倒す。ソードスキルなしでも倒せるが時間がない。二匹目の突進攻撃を硬直がとけた右手の剣で、その勢いそのまま突き刺す。続く三匹目の爪による切り裂きは、右手の剣で二匹目を突いていた関係で腕を伸ばし切っており弾くことができない。やむおえず、体をひねってかわそうとするがかわし切れず左手を引っ掻かれた。火傷によって与えられる鈍い痛みを堪えつつ引き戻した右手の剣で再び>>ヴォーパル・ストライク<<を放ち倒す。火傷はしばらくすれば治るが今は待つてられない。そのまま走りだす

その後も、運が悪いのか数多くのモンスターとエンカウトしてしまった

「時間をかなり食ったな……」

その後ろからアスナが凄い勢いで走ってきた

「リン君!」

「アスナ、どうして……」

アスナに並走しつつ俺は尋ねる

「ゴドフリーさんが……キリト君と一緒にパーティーだった人の反応が消えたの!だから……」
なるほど。聞けばアスナはずっとマップをモニターしていたらしい。反応が消失したということは

「クラディールか……」

野生のモンスターか、犯罪者の仕業かとも思つかもしれないがこんな最前線でもないようなところでキリトや血盟騎士団員三人が遅れをとると思えない。クラディールはキリトに恨みを持ってるとし、一番可能性が高いだろう

俺とアスナが到着したときはキリトの体に鈍い色の剣が振り下ろされたところだった。キリトはその剣の刃を握り必死であらがつているが、その刃は無情にもしつかりと着実にキリトの体に迫っている。このままでは間に合わない。アスナは既に全力であろう。ならば…
…アスナより速い俺が何とかする。何とかしてみせる！

「う、うおおおおお！」

俺は次の一步のときおもいつきり地面を蹴った。その結果……ソードアート・オンラインでおそらく最速の俺の全力の走り。音すらも振り切った気がした。そして、剣を出す暇がなかった俺はそのまま、クラディールの剣とキリトの体の間に左手を滑り込ませることに成功した

「なっ、なんだあ」

クラディールは驚きの声を上げるが、俺は左手に刺さった剣ごとク

ラディールの体を吹き飛ばした。そして、少し遅れて到着したアスナがさらに空高くクラディールを吹き飛ばした

「……間に合った……間に合ったよ……神様……間に合った……」
そう言つてアスナは崩れおちるようにひざまずいてキリトに尋ねた

「生きてる……生きてるよねキリト君……」

「……ああ……生きてるよ……」

「ギリギリだな……危ない」

と俺はキリトの口にハイポーションを突っ込む

「……リン君……ここは……私にやらせて……」

「すまんができない。親友が殺されかけたんだ。我慢できるわけないだろ」

「……わかった……。キリト君、待っててね。すぐ終わらせるからアスナはすつくと立ち上がると、腰から細剣を抜きクラディールの方へ歩き出す。俺もアスナの横に並び歩きだす。もちろん刺された左手ではなく右手に剣をしっかりと握って

「あ、アスナ様……ど、どうしてここに……。い、いや、これは、訓練、そう、訓練でちよつと事故が……」

言い切れなかった。いや、最後まで言わせなかった。もはや言い訳もできない状況にまだ、言い訳を言う見苦しさに我慢できなかった。剣閃は二本。俺と全く同じタイミングでアスナも剣を振ったのだ

「ぶあつー!!」
クラディールが当たった場所、口を片手で押さえて仰け反る。奇跡的に当たった場所も一緒だ

「このガキどもお……調子に乗りやがって……。ケツ、ちようどいいや、どうせオメエラもすぐに殺ってやるうと……」

そのクラディールの台詞も中断を余儀なくされた。アスナと俺が剣を構えるや攻撃を開始したからだ。クラディールも必死に応戦するが、アインクラッド最強クラス二人による連携攻撃だ。敵に対して一人ずつ攻撃するのがセオリーではあるが、アスナと俺の剣は一人が二本の剣を扱ってるかのようにクラディールを切り裂いた

「わ、解った!! わかったよ!! 俺が悪かった!!」

とHPが黄色から赤い危険域に突入するとクラディールは剣を投げ出しこっ喚いた

「も、もうギルドは辞める! あんたらの前にも二度と現われねえよ!! だから……」

「それで済むと思ってるのか? 二人の命を奪い俺の親友に殺すと言ったお前を俺は許すことができないんだが?」

アスナも同じことを思ったようで右腕の剣が振り上げられクラディールを殺そうとした

「ひいひいっ! 死に、死にたくねえーっ!!」

アスナの剣の切っ先が停まった。アスナの体がぶるぶると激しく震えている。おそらくアスナはこの世界でプレイヤーを殺していないそれは幸せなことだが、反面致命的な弱点でもある。まずいと思っただけは遅かった。怒りのあまり停止していた思考を取り戻した時にはすでに全てが終わっていた。はっ、と気付くとアスナの手から

レイピアが弾かれ、キリトが右手でアスナを庇っていた。そしてクラディールの第三撃が放たれようとした

「いい加減にしろおおー!!」

動いたのは俺。クラディールが放った大剣を左手で受け、痛みがはしるのにも構わず、右手の剣を突き出した。その一撃はクラディールのHPの残り全てをくらい尽くした

「この……人殺し野郎が」

くくっ、とわらい。クラディールは無数のポリゴンとなって砕け散った

人殺しでも構わない。殺したものは背負わないといけない……だが、大切な人を守るなら……俺は……

「……ごめんね……わたしの……わたしのせいだね……」

悲痛な表情で、震える声をアスナは絞りだしていた。そうか……似てるんだ……詩乃とアスナは……何でも自分一人で抱え込んだりする性格とかが。気がつく俺はアスナの頬をたたいていた

「馬鹿野郎……」

アスナは頬に手をやりながらビクツてなった。キリトは成り行きを見守ってくれている

「おまえのせいじゃねえ。誰のせいでもねえよ。アスナ、おまえのために、俺らは動いたんじゃないよ。自惚れんな。俺らはな……自分のために戦ってるんだよ。理由はいろいろある。キリトは知らないが俺は親友を守るためっていう理由がな。だからそう自分を責めんな。アスナ」

俺はアスナの頬を撫でると「殴って悪かったな」

「ううん、ありがとう……」

「さて……俺は消えるな。後は二人で……」

ニヤリと笑う俺。いろいろ台無しである。赤くなるキリトとアスナ……相変わらずうぶなこって

ちなみに立ち去ろうと歩いていたら、しばらくしてから振り返るとキリトとアスナがキスをしていたな。いきなりで俺は驚いて剣を落としてしまって、落ちた剣が音をたて、弾かれるようにキリトとアスナが離れて、その二人の顔が真っ赤だったのはいい思い出だ

さて……とりあえずあの二人に報告かな？ついでに剣も研いでもらおう。そんなことを考えながら二人のもとから本当に去って行くの

だ
っ
た。

愛と狂気と（後書き）

アンケート

リン「何じゃこれは？」

蕾姫「いや、アンケート取るうかなくなって思っ

リン「どんなの？」

蕾姫「このあとがき。会話式がいいのか、俺だけがしゃべるの
いいのかって感じ」

リン「その心は？」

蕾姫「感想書いてって、グワツ！？」

シノン「うるさい……」

蕾姫「いや、だからってライフル・ウルティマラティオ・ヘカート
IIを向けないでっ。対物だから。条約で禁止されてるから」

リン「かすっただけで騒ぐな駄作者」

蕾姫「普通騒ぐでしょ……」

ジャキツ へカートの弾を装填する音

蕾姫「……」

リン「駄作者が黙ったところで」

シノン「この小説をこれからもよろしく」

蕾姫「俺の立場低い……ちなみに技名とか常に募集してるからよろしくお願いします」

報告と漫談(前書き)

今回は短いですが……

報告と漫談

キリト、アスナとわかれた俺はシリカとリズベットのもとに行った。あらかじめ、メッセージを送っておいたので二人は四十八層主住区
>>リンダース<<にある鍛冶屋、>>リズベット武具店<<で待っていた

「んで？何があつたの？」

俺は今回の事件について簡単に説明した

「なるほど……クラディールとかいうやつ、いやな奴ね」

「大変だつたんですね」

「感想は何でもいいがな。リズ、研いでくれないか？」

「了解。百コルね」

俺が百コル銀貨を指で弾いて渡すと仕事場にリズベットは引っ込んだ

「リンさん」

「ん？」

「キリトさんとアスナさんって……」

「今頃結婚してんじゃない？」

「ぶっ」

乙女にあるまじき音をたて吹き出すシリカ

「ま、あいつらはお似合いだったからな。シリカとリズには悪いが
応援してたからな」

「うっ……」

涙目。小動物みたいで何か癒される。こういう人を見てみると俺は
よく自己嫌悪にかられる。俺みたいな殺人者が普通の生活を送って
いてもいいのかと。殺したことは後悔していない。殺さなければ自
分ないしは大切な人が殺されていた。罪深いことだけどな

「リンさん……顔が怖いです……」

おっと顔に出ていたか

「終わったよ」

タイミングよくリズが出てくる

「何を話してたの？」

「キリトさんとアスナさんが結婚するって」

爆弾発言をどうもありがとう。たぶんが抜けてるし

「ななななななななな」

リズ……壊れたか？なしか言えなくなって……あとシリカをブンブ
ン前後に振るなよ……何か口から出そうになってるし

その後、また説明するはめになり自分のプレイヤーホームに帰った

のは明け方だった

次の日、キリトからメールが届いた。リズの鍛冶屋に来て欲しいんだと……本当に結婚したみたいだな。たぶん

そこに着くとアスナとリズは談笑しており、キリトはその横で苦笑いをしている。俺の姿を見るとキリトが駆け寄ってきた

「よう、リン。こんな朝早くすまないな」

「どうせ結婚報告だろ？行かないわけにはいかないじゃないか」

「はっ……………」

凄く驚いている……………凶星だな

「な、何で知ってるんだ」

「勘」

「……………やられた」

かまかけたら素直に吐いたな……………。そういう会話をしているとアスナがこっちに来た

「リン君、こんにちは」

「よう、アスナ。結婚おめでとう」

「えっ……………」

顔を真っ赤にして固まるアスナ。デジャブを感じる

「アスナ……………もつばれてる」

「あはは……………やっぱりリン君は出し抜けないな。えっと写真とろろ？
みんなだ」

場面変わってリズベット鍛冶屋の中。写真を撮ったあと、話をしている

「アスナ……」

「ん、何？」

「実はな……」

俺はアスナにしか聞こえないようにシリカとリズのことを耳打ちした

「……というわけでライバル多いな」

「大丈夫だよ……たぶん」

「何が大丈夫だって？」

いつの間にかキリトが後ろに回っていた

「むづ……」

アスナがキリトにじと目をしている

「なっ、何だよ」

焦るキリト……鈍感野郎には一生わからないだろうな

「そういえばキリトとリンの出会いってどういふのだったんですか
？」

「一層の最初の森だったか？」

「そうだな。俺がMPKにひっかかって死にかけてたところでこいつ
が来てな。助けてもらったんだよ」

「あの時から、こいつとの腐れ縁が始まったんだ」

「「ふーん……MPKね」「」

……二人とも顔が怖い

「そのプレイヤーの名前は？」

……今は死せるコペルさん。ご冥福を祈ります。魔王二人に追いか
けられても頑張ってください

「もう死んでるから」

「そう……残念」

殺る気でしたよね？

「違う。十分の九殺し」

「心を読まないでください。あと十分の九殺してほぼ死んでるじ
ゃん!？」

「まあ、いいや……で、新居に二十二層のログハウスを買ったんだ
けど……今から行かない？」

「俺はパス。また今度な。じゃあな」

俺はそう言って店を出た

森と謎の少女と

それより何日か後……ん？何やってたかって？レベル上げだよ。描写は書いてもつまらないと思うよ？しいて言うなら、>>デス・ピエロ<<に囲まれてました。攻撃と敏捷は高いけど防御とHPが低いモンスターをずっとほふってました

というわけで今は二十二層のキリトとアスナの家に向かっています

到着するとちようどキリトがアスナを肩車したところだった

「…………お邪魔しました」

「ち、ちよっと」

言葉をかけてきたがしらん。あいつらといると砂糖を口からはきかねん

「リ、リン君」

キリトから降りたらしいアスナが肩を掴んできた

「ナニ？」

「何で片言なのかな？それより今から一緒に森に行かない？」

「俺は馬に蹴られる趣味はないんだが……」

「いやー。今から行くところでな、幽霊を見たって話があったぞ。確かめに行くんだよ。リンも行かないか？」

「ほう……興味深いな」

この世界はプログラムできている。よって幽霊なんて非科学的なものは出る余地はないんだが……まあ見間違いつてこともあるが

「よし、行くうか」

「じゃあ、出発！」

アスナはまたキリトの上に乗っていた。キリトは苦笑している

「やめろ。こっちは恥ずかしいし、砂糖を吐きそうになる」

と言うといかにもしぶしぶといったかんじでアスナは降りてきた

十数分歩いたあとアスナがこんなことを言い出した

「大きい木だねえー。ねえ、この木、のぼれるのかなあ？」

「うーん……」

「システム的には不可能じゃない気がするけどなあ……。試してみる？」

「ううん、それはまた今度の遊びテーマにしよう。……。登ると言え
ばさあ」

「外周にあちこち、支柱みたいになって上層まで続いているところがある
じゃない。あれ……。登ったらどうなるんだろうね」

「あ、俺やったことあるよ」

「ええー!？」

体を傾けキリトの顔を覗きこむっていうか、ピンク色の空気が厚く
て会話に参加できない……

「なんで誘ってくれなかったのよ」

「まだそんなに仲良くなつてなかった頃だつてば」

「なによ、キリト君が避けてたんじゃない」

「ストップ！これ以上ピンク色の空気を出すな！息苦しくてかなわん！」

あ、顔真っ赤

「そついえばキリト。あの時は、俺、見てたぞ？」

「えっ？」

「手足をバタバタさせながら落ちていくのは傑作だったが……命は大切にしゃがれ……」

「はい……」

そんな会話を交わしていると森はどんどん深くなっていった

「ね、その……うわさの場所つて」

「ええと……そろそろだよ。もうあと何分かで着く」

「さっきの話。具体的には？」

「ええと、一週間くらい前、木工職人プレイヤーがこのへんに丸太を拾いに来たんだそうだ。この森で採取できる木材はけっこう質が

いいらしくて、夢中で集めているうちに暗くなっちゃって……慌てて帰ろうと歩き始めたところで、ちよつと離れた木の陰に……ちらりと、白いものが

アスナの顔色が……でも俺はキリトに先を促した

「モンスターかと思って慌てたけど、どうやらそうじゃない。人間、小さい女の子に見えたって言うんだな。長い、黒い髪に、白い服。ゆっくり、木立の向こうを歩いていく。モンスターでなきゃプレイヤード、そう思って視線を合わせたら……カーソルが、出ない」

「ひっ……」

「ほっ……」

面白いじゃねえか

「そんな訳はない。そう思いながら、よしゃあいいのに近づいた。そのうえ声をかけた。そしたら女の子がぴたりと立ち止まって……こつちをゆっくり振り向こうと……」

「も、も、もう、や、やふっ……」

最後のは俺がアスナの口を押さえたから出た音だ。続きが聞きたいからね

「そこでその男は気がついた。女の子の、白い服が月明かりに照らされて、その向こう側の木が透けて見える」

「……」

叫ぼうとしたが俺の押さえられてて声が出せない……何か犯罪っぽい。言っとくが同意の上だぞ。キリトと

「女の子が完全に振り向いたら終わりだ、そう思って男はそりゃあ走ったそうだな。ようやく遠くに村の明かりが見えてきて、ここまでくれば大丈夫、と立ち止まって……ひょいっその後ろを振り返ったら……」

「……っ!？」

「誰もいなかったとき。めでたしめでたし」

ここでアスナを解放してやる。すると今まで叫べなかった分とばかりに拳を振り上げ……そこで静止した

「き……キリト君、り……リン君、あそこ」

俺とキリトの視線がアスナの見ているものを捉える

「う、嘘だろおい……」

「ほう……」

さっきからこれしか言っていない気がするが……とりあえず女の子をじっとみるがカーソルがでない。というわけで近づこうとしたその時、ふらりと少女の体が地面に崩れ落ちた。どさり、という音が耳に届いてくる。おう……質量もあるんだ、と感心したがそれどころではないと気付いた

「あれは……」

目を細めるキリト

「幽霊なんかじゃないぞ!！」

と叫んで走り出したので俺もあとに続く

「ちょ、ちよつとキリト君、リン君！」

幽霊が嫌いなアスナは出遅れたが「もう!!」と言って着いてきた

倒れている少女をキリトが抱き起こしたので俺は少女を観察し始めた

「だ、大丈夫そうなの？」

「うーん……」

俺とキリトは首を傾げる。SAO内では人間の生理的活動はほとんど省略されているため呼吸を感じたり、バイタルをみたりはできない

「でもまあ、消滅してない……ってことは生きてる、ってことだよな。しかしこれは……相当妙だぞ……」

「妙って？」

アスナは気付いてないみたいなので俺から言った

「カーソルがでないんだ」

「あ……」

……まず確認しようぜ

「何かの、バグ、かな？」

「さもなくば、本当に幽霊とか？」

「ひっ……」

かなり少女に顔を近づけていたアスナは俺の言葉を受けて後ろに飛び退いた。そして尻餅をついた

「冗談だ。そんなのあり得ないから安心しろ」

「うっつ〜……」

涙目のアスナ……癒されるわ

「とりあえず、放つてはおけないわ。目を覚ませばいろいろ判ると思う。うちまで連れて帰ろう。……もちろん、リン君もね」

立ち上がってアスナは建設的なことを言った。そして、俺まで巻き込みやがった……。さて明日までに何回砂糖を吐くことになるのやら

アスナのベッドに少女を横にし、毛布をかけておいてキリトとアス

ナは向かいのベッドに。俺は椅子を持ってきてそこに座った

「まず一つだけ確かなのは、こうしてウチまで移動させられたからにはNPCじゃないよな」

「そう……だね」

NPCは存在座標を一定範囲内に固定されているためプレイヤーの意志で移動させることはできないのだ

「それに、何らかのクエストの開始イベントでもない。それなら、接触した時点でクエストログ窓が更新されるはずだしな。……こことは、この子はプレイヤーで、あそこで道に迷っていた……というのが一番あり得ると思う」

「まだ幽霊って可能性も……おう……わかったからその剣を下ろしてくれアスナ」

幽霊説を唱えた瞬間アスナが剣を出し首もとにあててきた。……正直剣が見えなかった……

「続けるぞ？クリスタルを持っていない、あるいは転移の方法を知らないとしたら、ログインしてから今までずっとフィールドに出ないで、>>はじまりの街<<にいたと思うんだ。なんでこんな所まで来たのかは判らないけど、はじまりの街ならこの子を知ってるプレイヤーが……ひょっとしたら親とか、保護者がいるんじゃないかな」

「うん。わたしもそう思う。こんな小さい子が一人でログインするなんて考えられないもん。家族が誰か一緒に来てるはず……無事だと、いいけど」

俺は、そうは思わない。一番可能性があるのはこの子の親がモンスターと相討ちになり死んでしまった場合。二十二層は比較的安全とはいえ森にはモンスターがでる。二つ目は親とここまで来てはぐれた場合。この二つ目はまずない。最初に目撃されたのはかなり前だ。それなのに探しに来ているプレイヤーと出会わなかったのは不自然だ。とここまで考えて不思議に思った。今は確証が持てないが少女がプログラムという可能性だ。それならば全て説明がつくがそれはあまりにも突拍子もない考えだろう

「ね、意識、戻るよね」

「ああ。まだ消えてないってことは、ナーヴギアとの間に信号のやり取りはあるんだ。睡眠状態に近いと思う。だから、きっとそのうち、目を覚ます……はずだよ」

キリトの言葉には願望の色があった

「十歳はいつてないよな……。八歳くらいかな」

「そのくらいだね……。わたしが見た中ではダントツで最年少プレイヤーだよ」

「そうだな。前にビーストタイマーの女の子と知り合ったけど、それでも十三歳くらいだったからなあ」

「ふうん、そんな可愛いお友達がいたんだ」

「小動物みたいで可愛いぞ？アスナ、聞いてくれよキリトのやつ……」

「勘違いされるから言つな！たまにメールのやり取りを……それだけ、何も無いぞ！」

「どうだか。キリト君鈍いから顔を逸らすアスナ。苦笑いの俺

そうして時間は過ぎていく

あれから何種類かの新聞？つばいものに目を通したが、少女を探している人は見つからなかった

「んじゃ、俺は帰るな」

といい立ち上がるうとしたが

「泊まっていけよ」

「泊まっていったね」

……アスナとキリトに呼び止められた

「いや……寝るところないし」

ベッドは二つ。一つは少女が寝ているアスナのベッド。もう一つはキリトのベッド。どこに寝ると？

「俺のベッドで寝ればいいだろが」

「俺……そんな趣味はねえぞ」

「ええっ！？キリト君、実は……」

「なわけないだろ！！俺は椅子で寝るから俺のベッドを使えってことだよ」

「冗談だ。いいよ、俺が椅子で寝るから。幸いこの世界じゃ、椅子で寝ても体が痛くならないからね」

「わかった……じゃあ寝ようか」

居間の明かりを消しキリトとアスナは同じベッドに入ってしまった……えっとブラックコーヒーないかな？目をつむってしばらくして人が動く気配がして目をあけるとアスナが少女を抱きしめ「おやすみ。明日は、目が覚めるといいね……」と言っていた。俺は微笑むと本格的に眠りに落ちた

少女と家族（前書き）

ギャグ半分、真面目半分です

アスナが暴走します。ご注意ください

少女と家族

次の日目が覚めると何やらハミングが聞こえた。不思議に思って目をあけると、少女が目を閉じたまま歌っていた

とりあえず少女に抱きついているアスナを起こそうとしたがどうやらもう起きているようだ。アスナはその顔に驚きの表情を張りつけキリトをたたき起こした

「…………おはよう。どうかした？」

「早く、こっち来て！」

「歌ってる…………！？」

アスナは軽く少女を揺すりながら呼び掛けた

「ね、起きて…………。目を覚まして」

すると少女のまぶたが持ち上がり「あ…………う…………」と声を出した

「…………よかった、目が覚めたのね。自分がどうなったか、解る？」
少女は少し考え、首を横に振った

「そつ…………。お名前は？言える？」

「…………な…………まえ…………。わた…………しの…………なまえ…………」

少女は首を傾げながら

「ゆ……い。ゆい。それが……なまえ……」
と名乗った

「ユイか。いい名だな……なんだよ」
俺がユイに微笑みながら言うときリトとアスナが驚いたような顔をした……

「リン君……意外と子供好き？」

好きで悪いか。小さい子は純粹で可愛いからな……画面の前の人たちの中で、ロリコンとか思ったやつ……一歩前にでて歯あ食い縛れえ……！

「まあ、いいや。わたしはアスナ。この人はキリト。で、あの人はリンよ」

「あ……うな。き……と。り……う」

……りう？……二文字なのに言えないの！？

「ね、ユイちゃん。どうして二十二層にいたの？どこかに、お父さんかお母さんはいないの？」

ユイはしばらく黙り込んだあと、首を左右に振った

「わかん……ない……。なん……にも、わかんない……」

ユイにミルクを与えると俺たちは部屋の隅に移動すると意見交換を始めた

「ね、キリト君。どう思う……?」

「記憶は……ないようだな。でも、それより……あの様子だと、精神に、ダメージが……」

……あり得ない。症状的には言語障害だろう。言語障害とは言語にかかわる機能の運動性または感覚性の障害により、言語による意思の疎通が妨げられた状態をさす。確かにストレスからの感覚麻痺することはあり得るが、ここはバーチャル世界。そんなことがあり得るわけがない。おそらく、データの欠損。それに対し何の訴えもしてこなかったことから考えるに、やはりユイは……

「どうしたの?リン君?」

「いや、何でもない」

今は言わない方がいいな。害を与えるようなことも無さそうだし、しばらく様子見てとこか……っとさっきまで抱き合っていたキリトとアスナがユイの方に移動し始めたから俺も行くか。この時俺は

知らなかった。あんなことになるなんて。今はユイの側によらなければよかったと……（笑）

「やあ、ユイちゃん。……ユイって、呼んでいい？」

カップから顔を上げて頷く

「そうか。じゃあ、ユイも俺のこと、キリトって呼んでくれ」

「き……と」

「キリト、だよ。き、り、と」

「……」

「……き……と」

生糸……

「ちょっと難しかったかな。何でも、言いやすい呼び方でいいよ」「再びユイは考え始めた。やがてユイは顔をゆっくりあげると

「……パパ」

次いでアスナを見上げて、言う

「あつなは……ママ」

アスナは微笑みとともに頷く

「ママ！」

アスナはユイを抱いたまま涙をながし始めた。俺は微笑みながらそれを見ていたが次のユイの言葉で凍り付くことになった

「りうは……にい！」

…何ですと。にいつて兄さんのことだよね？すると何かい？俺はアスナとキリトの……は？同年代の親なんかまっぴらごめんだ。……いや、現実世界の両親よりはずっとマシだな……だあ！何考えてるんだ俺は！？……

ちなみに5分くらい固まっていると、ユイの止めの一撃が

「ダメ……なの……？」

……想像して欲しい。純粋な十歳児それも美少女の部類に入る少女

の涙目プラス上目遣い。……あなたは断れますか？

「いいよ。ユイ」

無理でしょう

ホットミルクを飲み、小さな丸パンを食べると、ユイは再び眠り始めた

「わたし……わたし……」

「ごめんね、わたし、どうしていいのか判らないよ」

「……この子が記憶を取り戻すまで、ずっとここで面倒みたいに思ってるんだろ？気持ちは……解るよ。俺もそうしたい。でもな……」

ジレンマだよな……。そうしたら当分攻略には戻れないし、そのぶんこの子が解放されるのも遅れる……」

「うん……それは、そうだね……」

「とりあえず、できることはしよう」

……無駄だな。もう俺はユイの正体について確信している

「まず、はじまりの街にこの子の親とか兄弟とかがいないか探しにいくんだ。これだけ目立つプレイヤーなら、少なくとも知ってる人間がいると思うし……」

「……」

「……?どうしたの?」

「な、なんでもないよ!」

「どうせ、ユイと別れたくないとか思ってるんだろ?自分とキリトの子供のように思ってるんだろ。もう既に」

アスナは吹き出した

「……そうだけど……」

耳まで赤くなって言った

「そういえばリンはユイの兄貴だったよな?ってことは……」

こんどは俺が吹き出す番だった

「同年代の親なんか認めない！現実世界の両親よりはずっとマシだ
けど……」

ゴニョゴニョ言う俺は不意にアスナに引き寄せられ抱きしめられた

「何か……急にリン君が可愛く見えるようになってきた……」

アインクラッドで五本の指に入るほどの美人に抱きつかれてるとは
嬉しいが……何か嫌だ！キリトに目で助けを求めると苦笑いして目
を逸らされた。「パパ助けて」というとキリトは頭を抱えてゴロゴ
ロし始めた。曰く鳥肌が立ったらしい。まあ当たり前か……

ついでに言うとアスナはママと呼ぶまで放してくれませんでした。
たまに呼んでねとか言ってました……嬉しいのか、甚だ疑問である。
精神的にキツイ1日だった

はじまりの街と軍（前書き）

遅くなりました……orz

はじまりの街と軍

次の日の昼食ごろ、目を覚ましたユイ。辛いもの好きだということを見つけた日の午後。俺たちははじまりの街に行くことにした

なおユイのメニューの仕様は俺の推測を裏付けるものになったとだけ言っておこう

「わあー

ユイが顔を輝かせ、両手を広げて自分の体……より正確に言えば、淡いピンクのセーターを見ていた。すっかり装いを変えたユイは満面の笑みでセーターの生地を頬をこすりつけたりスカートすそを引っ張ったりしている……うん、可愛いな

「さ、じゃあお出かけしようね」

「うん。パパ、だっこ」

「うん。パパ、おんぶ……冗談だから、頭を壁に打ち付けるのはやめるキリト……」

上はユイ、下は俺だ。キリトをパパと呼ぶとキリトが悶えるから面白い。キリトはユイの体を横だきに抱えあげた

「後で、にいも」

……勘弁してくれ……

「アスナ、リン、一応、すぐ武装できるように準備しといてくれ。」

街からは出ないつもりだけど……あそこは>>軍<<のテリトリーだからな……」

「ん……。気を抜かないほうがいいね」

「当たり前だ」

アスナも俺も気を引き締める

第一層>>はじまりの街<<はアインクラッド最大の都市だ。冒険に必要な機能は他のどの街よりも充実しているが、ここにはハイレベルプレイヤーは知りうる限りいない。理由としては>>軍<<の専横や、あの日のことを思い出すからだろう。全てが終わり、そして始まったあの日を……正直俺はその状況を喜んでいた。これで解放された。俺は自由だ、と。確かに自由にはなれた。でも、気付い

た。気づいてしまったんだ。それでは逃げているだけだ。向き合
わなければ本当には解放されないんだと。教えてくれたのは隣にい
る男なのだが……しばらく男、キリトを見てみると首を傾げられた。
何でもないといいながら誤魔化すために答えのわかっている質問を
ユイにした

「ユイ、見覚えのある建物とか、あるか？」

「うー……」

とユイは難しい顔でしばらく街並みを眺めていたが、やがて首を振
った

「わかんない……」

「まあ、はじまりの街はおそろしく広いからな」

キリトはユイの頭を撫でながら言った。……こうしてみると本当の
親子みたいだな

「あちこち歩いてればそのうち何か思い出すかもしれないさ。とり
あえず、中央広場に行ってみようぜ」

「そうだね」

と俺たちは歩きだした

「ねえ、キリト君とリン君」

広場を歩いていると唐突にアスナが話しかけてきた

「「ん？」」

「こっつて今何人くらいいるんだっけ？」

「ヒッキープラス>>軍<<合わせると二千ぐらいじゃないか？」

「ヒッキーって……」

苦笑いのアスナ

「人影があまりないことが気になってるのか？」

「うん」

「そう言われると……。マーケットのほうに集まっているのかな？」

「じゃあ、行ってみるか」

しかし、広場から大通りに入って市場エリアにさしかかっても木の下に座り込んだ男とNPC商人しか見えなかった。その唯一のプレイヤーにアスナが話し掛けた

「あの、すみません」

「なんだよ」

「あの……この近くで、訊ね人の窓口になってるような場所、ありません？」

むっ……アスナを見る目がいやらしい……

「なんだ、あんたよそ者か」

「え、ええ。あの……この子の保護者を探してるんですけど……」

今は俺の腕の中に移ってまどろんでいるユイを指し示すアスナ。すると銀さんに似た死んだ魚のような目をした男は多少目を丸くした

「……迷子かよ。珍しいな。……東七区の川辺りの教会に、ガキのプレイヤーがいっぱい集まって住んでるから、行ってみな」

「あ、ありがとう」

というわけでとりあえず教会に行ってみることにしたがキリトが街路樹になっている黄色い果実を狙っていたが、俺は首根っこをつかんで引きずった「あ、ああ……うまそうなのに……」……知るか！

東七区について川沿いに歩くと道の右手に広がる一際高い尖塔を見つけた。だからそこに向かって歩きだそうとするのだが

「ち、ちょっと待って」

「ん？どうしたの？」

「あ、ううん……。その……。もし、あそこでユイちゃんの保護者が見つかったら、ユイちゃんを……。置いてくるんだよね……。？」

「……………」

ためらうのも無理はない。アスナは本当の子供のように考えていたのだろう

「別れたくないのは俺らも一緒さ」

なっ？とばかりにこっちを見てくるので俺は頷く。例え俺の予想通りだとしても、本当の家族のように思っているから……

「会えなくなるわけじゃない。ユイが記憶を取り戻したら、きっと

また訪ねてきてくれるさ」

「ん……。そうだね」

アスナは小さくうなずくと、ユイに頬をすりよせ歩きだした。俺らもそれに続き歩きだした

「あー、どなたかいらっしゃいませんか？」

アスナの声が誰もいない教会の一室に響きわたるが、誰も出てくる様子はない

「誰もいないのかな……？」

「いや、人がいるよ。右の部屋に三人、左に四人……」

「二階にも何人かな」

「……索敵スキルって、壁の向こうの人数まで解るの？」

「熟練度九百八十からだけどな。便利だからアスナも上げるよ」

「いやよ、修行が地味すぎて発狂しちゃっわよ」

「不意討ちを防ぐためにすぐ役立つんだがな……」

「それはわかっているんだけどね。……それはそうと、何で隠れてるのかな……」

とアスナは入り口で止めていた足を内部にまで進めた

「あの、すみません、人を探してるんですが！」

「……>>軍<<の人じゃ、ないんですか？」

右手のドアがわずかに開き、おそろおそろといった感じで言った

「違いますよ。上の層から来たんです」

やがてドアが開くと黒縁の大きな眼鏡をかけ簡素な濃紺のプレーンドレスを身にまとい小さな短剣を持った女性プレイヤーが姿を現した

「ほんとに……軍の徴税隊じゃないんですね……？」

アスナは微笑むとうなずいて

「ええ、私たちは人を探していて、今日上から来たばかりなんです。軍とは何の関係もないですよ」

「上から！？ってことは本物の剣士なのかよ！？」

甲高い声とともにわらわらと数人の少年少女たちがでてきた

「こら、あんたたち、部屋に隠れてなさいって言ったじゃない」

しかし、誰も従わない

「なんだよ、剣の一本も持ってないじゃん。ねえあんた、上から来たんだろ？武器くらい持ってないのかよ？」

「い、いや、ないことはないけど」

キリトはいきなりの言葉で焦っている。その隙に俺は本題に入るとしよう

「あの……」

……何て呼べばいいのかわからない……。その考えを読み取ったのが女性は口を開いた

「あつ、すみません、名前も言わずに。私はサーシャです」

「俺はリン。こっちのやつがキリト。彼女はアスナだ」

「で、この子が、ユイです」

とアスナが割り込んできた

結果としてユイの親はわからなかった。俺としては当然だと思っていた。アスナはどこかほっとしたような表情をしていた。話題は、サーシャのことに移り、軍のことに移ろうとした。そしてタイミングよくといったら変になるが数人の子供たちが勢いよく入ってきた

「先生！サーシャ先生！大変だ！！」

「こら、お客様に失礼じゃないの！」

「それどころじゃないよ！！ギン兄ィたちが、軍のやつらに捕まっちゃったよ！！」

「場所は！？」

「東五区の道具屋裏の空き地。軍が十人くらいで通路をブロックしてる。コッタだけが逃げられたんだ」

「わかった、すぐ行くわ。……すみませんが……」
俺らのほうに向き直り軽く頭を下げようとした。が俺はそれを止める

「俺も行く」

「ですが……」

俺はキリトたちに目配せをするとキリトとアスナは大きくうなずいた

「私たちにもお手伝いさせてください。少しでも人数が多いほうがいいはずですよ」

「ありがとうございます、お気持ちに甘えさせていただきます。それじゃ、すみませんけど走ります！」

しばらく走ると細い路地を塞ぐ灰緑と黒鉄色のプレイヤーの団がいた。躊躇せずに走り込んだサーシャをみてにやりと笑った

「おっ、保母さんの登場だぜ」

「……子供たちを反してください」

「人聞きの悪いこと言うなって。すぐに返してやるよ、ちょっと社会常識つてもんを教えてやったらな」

「そうそう。市民には納税の義務があるからな」
わははは、と男たちが甲高い笑い声をあげる。

「ギン！ケイン！ミナ！！そこにいるの！？」

「先生！先生……助けて！」

「納税の義務……とか言っただか？」
今まで見守っていたが我慢できなくなったので俺は口を出した

「ん？おうそうだよ。市民の義務だよなあ」

「じゃあ、その金はちゃんと俺たち市民のために使われてるんだよな？」

「も、もちろん。当たり前だろ？ちゃんと攻略のために使ってるに決まってるんだろ」

「ふーん……じゃあ、市民の権利を使わせてもらおうかな……知る権利に基づいてその使用明細の開示をお願いしよう」

相手は対応を考えている。その隙に俺はキリトとアスナに口をあまり動かさず言った

「合図したら跳べ」

「了解」

「そ、そうだなあ……そういうことは本部に……」

「今！」

俺が合図をするとキリトとアスナが地面を蹴って跳躍した。トップクラスの筋力と敏捷力により軽々軍を飛び越えた。軍の連中は俺に意識を集中していたため反応ができなかった

「て……てめえ……何だお前は！！>>軍<<の任務を妨害すんのか！！」

「弱いやつから搾取するのが>>軍<<の任務か？落ちたものだな」

「てめえ……許さねえ……」

と俺に近い軍のメンバー五人ほどが剣を抜いた。全く使われていない剣の全く重みのない輝き

「お前たちは全く戦闘を経験してないだろ」

「……そんなわけないだろ」

間があつたな……

「剣に全く重みがない。足が甘い。……しょうがない。少し稽古をつけてやる」

といいつつ俺は腰から剣を二本抜き出す

「サーシャさん、ちょっと下がっててもらえますか？」

「はっ、はい」

二振りの剣を見て呆然としていたサーシャさんを下がらせる。そし

て同じく固まっていた軍のメンバーの方に向き直り

「ついてこいよ?」

剣を突き出した。双剣突撃技>>ダブルサーキュラー<<だ。もちろんここは街の中であり犯罪防止コード圏内なのでプレイヤー自身にダメージはない。だがソードスキルによるノックバックとコード発動時のシステムカラーの発光と衝撃は発生する。つまり……

「ぐあっ……やめっ」

二つの剣閃が煌めき一番近くにいた男性プレイヤーに直撃した瞬間、男はしりもちをつき恐怖に顔を引きつらせることになった

「双剣……ユニークスキル……ひっ」

後ろに控えていたプレイヤーからも悲鳴じみた声が漏れる……ってか有名になったもんだ……

「なっ、何ビビってんだ!相手は一人。こっちは五人だぞ!数で押せばユニークスキル使いだって……」

「そっ、そうだ!何ビビってんだか……よ、よし行くぞお前ら」

……面倒くさい……

「せっかく人がチャンスを上げたというのに……教訓一、引き際を考えないと……」

俺が一番最初に声を上げたプレイヤーの前に移動し

「痛い目を見ますよ?」

剣を振り下ろし、攻撃を開始した。初撃は四連続ソードスキル>>バーチカル・スクエア<<。四つとも見事に直撃した。倒れ戦闘不能になったので次のプレイヤーに向かった

「教訓二、一対多の場合は隣の人を常に視界にいれ、カバーし合うこと。あなたたちはバラバラになりすぎ。全くフォーメーションが組めていません」

次のプレイヤーを単発重攻撃>>ヴォーパル・ストライク<<を当てる。近くにいた別のプレイヤーを巻き込み吹き飛ばす。最後のプレイヤーはガタガタ震えて命乞いをしていたがかまわず剣をつきだした

「教訓三、どんなに弱くても、どんなに自分が優位であつても……」

最後の一撃、片手剣で最も早い技>>ムーン・ソルト<<

「決して油断するな」

下から上に走る剣閃が最後のプレイヤーを吹き飛ばした

はじまりの街と軍（後書き）

蕾姫「二週間でPV一万突破!!」

リン「それって多いのか？」

蕾姫「わからん……でも初心者の小説では多いんじゃない？」

リン「読者の皆さん。読んでくれてありがとう。そしてこれからもよろしくな」

蕾姫「最近忙しいから次、いつになるかわからないけど……目指せ一週間以内!!ではーノシ」

食事と新たに事件

数分後。軍の連中が逃げ去ったあと、俺はあたりを見回した。すると子供たちに抱きつかれているアスナとにやにや笑っているキリトがいた。その時

「みんなの……みんなの、こころが……」

みんなの……こころ？

「みんなのこころ……が……」

虚空に視線を向け、右手を伸ばしていた。明らかに普段とは様子がおかしい

「ユイ！どうしたんだ、ユイ！！」

キリトが叫ぶがユイはきょとんとしている

「ユイちゃん……何か、思い出したの！？」

アスナもあわてて駆け寄る

「……あたし……あたし……あたし、ここには……いなかった……。ずっと、ひとりで、くらいとこにいた……」

ユイが顔をしかめた次の瞬間

「うあ……あ……あああ！！」

ユイの体が激しく揺れる

「にい……ママ……!!」

こっちに向かって手を伸ばしてくるが俺はその手をつかもうとした。がつかめなかった。所詮システム。そう頭をよぎったからだ。その直後、アスナがユイを抱き上げ胸に抱き締めた

「なぜつかんであげなかったの？」

アスナは視線をこちらに向けて言うてきたが秘密にしていること……しかもユイについてのことなので答えることも視線を受けとめることができず、目を反らすことしかできなかった……しばらくするとその現象も収まりユイの体から力が抜けた

「何だよ……今の……」

キリトの呟きは、おそらく正しいであろう答えをもつ俺は言ってしまうて、ユイとキリト、アスナの関係がギクシャクしたものにならないか心配で答えることができなかった
次の日キリトはサーシャに尋ねた

「サーシャさん……」

「はい？」

「……軍のことなんです。俺が知ってる限りじゃ、あの連中は専横が過ぎることはあっても治安維持には熱心だった。でも昨日見た奴等はまるで犯罪者だった……。いつから、ああなんです？」

「方針が変更された感じがしたしたのは、半年くらい前ですね……。徴税と称して恐喝まがいの行為を始めた人と、それを逆に取り締まる人たちもいて。軍のメンバー同士で対立してる場面も何度も見ま

した。噂じゃ、上のほうで権利争いか何かあったみたいで……」

「内部分裂を起こした……まあ、あの人数ならしょうがないかもしれないな」

「でも昨日みたいなのが日常的に行われてるんだったら、放置はできないよな……」

キリトは俺の台詞を引き継いで言った。とその時、キリトは不意に顔をあげ入り口に目を向けた。俺は反射的に索敵スキルで扉の外をサーチする。すると

「誰か来るぞ。一人……」

「え……。またお客様かしら……」

次の瞬間、館内にノックの音が響いた

腰に短剣を吊したサーシャと付いていったキリトが連れてきたのは、
>>軍<<のユニフォームに身を包んだ長身の女性プレイヤーだった。一瞬、剣に手をかけるが、キリトが隣にいるということで、俺は剣から手を離れた。子供たちとアスナは一斉に黙るが「みんな、この方は大丈夫よ。食事を続けなさい」という鶴の一声でまた騒がしくなった

「ええと、この人はユリエールさん。どうやら俺たちに話があるらしい」

ユリエールは俺とアスナに視線を向け頭を下げて挨拶をした

「はじめまして、ユリエールです。ギルドALFに所属してます」

……ALF?いつの間にか軍は名前を変えたんだ?と思ったが>>軍<<は俗称であったと思い出す

「はじめまして。わたしはギルド血盟騎士団の……あ、いえ、今は一時脱退中なのですが、アスナと言います。この人はソロのリン。この子はユイ」

紹介されたので立って一礼。ユイは顔を上げるとユリエールを見つめる。首をかしげるが、ニコリと笑い再びフルーツジュースに視線を戻す

「KOB……。なるほど、道理で連中が軽くあしらわれるわけだ」

「……つまり、昨日の件で抗議に来た、ってことですか?」

「いやいや、とんでもない。その逆です、よくやってくれたとお礼を言いたいくらい」

「……」

事情が読めないアスナとキリトは沈黙するが、俺は口を開く

「ユリエールさんは恐喝連中とは別の派閥に所属していると考えていいよな？最近、恐喝が多くなっていることからおそらく勢力が弱くなってきた派閥に」

ユリエールは空色の瞳を大きく開き口を開いた

「……ご明察の通りです。実はそのことであなた方をお願いが来て来たのです」

「お、お願い……？」
頷くとユリエールは続けた

「はい。最初から、説明します。軍というのは、昔からそんな名前だったわけじゃないんです……。軍ことALFが今の名前になったのは、かつてのサブリーダーで現在の実質的支配者、キバオウという男が実権を握ってからのことです。最初はギルドMTDという名前前で……、聞いたこと、ありませんか？」

「>>MMOトウデイ<<の略だろう。SAO開始当時の、日本最大のネットゲーム総合情報サイトだ。ギルドを結成したのは、その管理者だったはずだ。たしか、名前は……」

「シンカー」

ユリエールが割り込みキリトの言葉を受け継いだ

「彼は……決して今のような、独善的な組織を作ろうとしたわけじ

やないんです。ただ、情報とか、食料とかの資源をなるべく多くのプレイヤーで均等に分かち合おうとしただけで……」

MMORPGの本質はプレイヤー同士競いあうものだ。ましてや、このSAOにとらわれた人の大半は熱狂的なプレイヤーだろう。それなのに分かち合おうなんて無理だろう

「そこに台頭してきたのがキバオウという男です。彼は、シンカーが放任主義なのをいいことに、同調する幹部プレイヤーたちと体制の強化を打ち出して、ギルドの名前をアインクラッド解放軍に変更させました。更に公認の方針として犯罪者狩りと効率のいいフィードの独占を推進したのです。それまで、一応は他のギルドとの友好も考え狩場のマナーは守ってきたのですが、数の力で長時間の独占を続けることでギルドの収入は激増し、キバオウ一派の権力はどんどん強力になっていきました。最近ではシンカーはほとんど飾り物状態で……。キバオウ派のプレイヤーたちは調子に乗って、街区圏内でも>>徴税<<と称して恐喝まがいの行為すら始めたのです。昨日、あなた方が痛い目に遭わせたのはそんな連中の急先鋒だった奴等です。でも、キバオウ派にも弱みはありました。それは、資材の蓄積だけにうつつを抜かして、ゲーム攻略をないがしろにし続けたことです。本末転倒だろう、という声が末端のプレイヤーの間で大きくなって……。その不満を抑えるため、最近キバオウは無茶な博打に出ました。配下の中で、最もハイレベルのプレイヤー十数人による攻略パーティーを組んで、最前線のボス攻略に送り出したんです」

コーバッツたちかな？

「いかにハイレベルと言っても、もともと我々は攻略組の皆さんに比べれば力不足は否めません。……結果、パーティーは敗退、隊長

は死亡という最悪な結果になり、キバオウはその無謀さを強く糾弾されたのです。もう少して彼を追放できるところまで行ったのですが……」

ユリエールはそこで一旦きると唇を噛んだ

「三日前、追い詰められたキバオウは、シンカーを罠に掛けるという強硬策にめました。出口をダンジョンの奥深くに設定してある回廊結晶を使って、逆にシンカーを放逐してしまつたのです。その時シンカーは、キバオウの「丸腰で話し合おう」という言葉を信じたせいで非武装で、とても一人っダンジョン再奥部のモンスター郡を突破して戻るのは不可能な状態でした。転移結晶も持っていなかつたようで……」

「お人好しだな。そんな男だとわかつていたはずなのに口車に乗せられてノコノコと……」

「……お人好しがすぎたんですシンカーは……」

「要するに、軍で強い俺たちがいるという噂を聞きつけ助けて欲しいと言いにきたってわけか」

ユリエールは唇を噛んでから言った

「お会いしたばかりで厚顔きわまるとお思いでしょうが、どうか、私と一緒にシンカーを救出に行ってくださいませんか」

ユリエール深々と頭を下げた

「心証としては力を貸してあげたいのは山々だが……」

「無理なお願いだってことは、私にも解っています……。でも、黒鉄宮>>生命の碑<<のシンカーの名前に、いつ横線が刻まれるかと思うとおかしくなりそうで……」

……これはPKの手段としてはメジャーな方法に酷似している。一人が街でプレイヤーを誘い、圏外で囲み殺す。よくある手だ。これに乗るのはよほどのお人好ししか……

「大丈夫だよ、ママ。その人、うそついてないよ」

「ユ……ユイちゃん、それをなこと、判るの……?」

「うん。うまく……言えないけど、わかる……」

キリトはユイの頭を撫でたそしてニヤリとわらい俺たちに言う

「疑って後悔するよりは信じて後悔しようぜ。行くっ、きつと何とかなるさ」

「相変わらずのんきな人ねえ」

アスナもユイの髪に手を伸ばした

「ごめんね、ユイちゃん。お友達探し、1日遅れちゃっけど許してね」

俺は呆れていう

「おまえらはなんてお人好しだよ……」

「と言いつつもリンもくるんだろ？」

「……まあな……」

「ありがとうございます……ありがとうございます……」

「それは、シンカーさんを救出してからにしましょう」

アスナはユリエールに笑いかける。俺は軽く苦笑いしながら心の痛みを隠そうとする。システムと人間の違いについて考えながら

食事と新たに事件（後書き）

最近忙しいです……

台風直撃のため学校休み。よって書けました。話があまり進まない……

死神と炎の大剣（前書き）

遅れました……

死神と炎の大剣

目的のダンジョンはなんとここ一層にあるという。行くメンバーは俺、アスナ、ユリエール、ユイ、ユイを背負ったキリトの計五人。ユイは行くといって聞かなかつたので転移結晶を握らせてある。…目的の洞窟にシステムの的なものがあるのだろうか？ダンジョンにはもうすでにキバオウを始めとする軍のメンバーが入ったらしいが、散々追い回されて命からがら転移脱出するためになったそうだ……ざまあみる。その話を聞いて、キリトが笑いだす。俺はもちろんポーカーフェイス

「リン君。顔がにやけてるよ」

なぬ……

ユリエールはすぐに表情を暗くして行った

「今は、そのことがシンカーの救出を難しくしています。キバオウが使った回廊結晶はモンスターから逃げ回りながら相当奥まで入り込んだところでマークしたもので、……シンカーがいるのはそのマーク地点の先なのです。レベル的には、一対一なら私でもどうにか倒せなくもないモンスターなんです、連戦はとて無理です。……失礼ですが、お三方は……」

聞けば六十層ぐらいの強さらしい。俺のレベルは95。キリトもアスナも90前後だろう。安全マジンは階層プラス十なのでレベル70ほど……つまり

「問題ない」

「ああ、まあ、六十層くらいなら……」

「何とかなると思えます」

「……それと、もう一つだけ気がかりなことがあるんです。先遣隊に参加していたプレイヤーから聞き出したんですが、ダンジョンの奥で……巨大なモンスター、ボス級の奴を見た……」

「……ボスも六十層くらいのやつなのかしら……。あそこのボスってどんなのだったっけ？」

「えーと、確か……石でできた鎧武者みたいな奴だろう」

「……弱すぎて記憶にない」

「あー、アレかぁ。……あんまり苦労はしなかったよね……」

「まあ、それも、なんとかなるでしょう」

「そうですね、良かったです！」

「そうかぁ……。お三方は、ずっとボス戦を経験してらしてるんですね……。すみません、貴重な時間を割いていただいて……」

「いえ、今は休暇中ですから」

「ソロだから関係ない」

そんな話をしながら地下水道を歩く

「ぬおおおおおー！りやああああ！」

などと叫びながらキリトは敵集団に突っ込み叩き潰すというバーサクモードになつていて俺たちは暇である。アスナと俺は「やれやれ」といった表情でユリエールは目と口を丸くしてキリトを眺めているそしてユイは「パーがんばれー」と気の抜けた声援を送っているため緊張感は皆無である。

「な……なんだか、すみません、任せっぱなしで……」

「いえ、あれはもう病気ですから……。やらせときゃいいんですよ」

「猪突猛進馬鹿ですから」

「なんだよ、ひどいなあ」

「なんだよ、ひどいなあ」

蹴散らして帰ってきたキリトが文句を言うが

「じゃあ、わたしと代わる？」

「そろそろ肩慣らしがしたいから変わるか？」

「……も、もうちょっと」

その場が笑いに包まれたのは言うまでもない

ダンジョンに入ってしばらくすると水中生物型だったモンスターたちはオバケ系統に変化した。アスナがオバケが苦手なことを知って

いる俺はアスナをからかいながらキリトがモンスターを蹴散らしたあとの通路を進んだ。しばらくすると暖かな光の洩れる通路が目に入った

「あつ、安全地帯よ！」

「奥にプレイヤーが一人いる。グリーンだ」

「シンカー！」

ユリエールは一声叫び走りだした。俺はユリエールに続きつつも索敵スキルで辺りを走査していた。すると安全地帯の少し前にある十字路。その左端に不気味にオレンジに光る点を見つけた。その点は少しの間静止していたが、ユリエールが十字路に近づくとしたがつて右に動き始めた。このままではユリエールと衝突する。この時俺はちよつと前にユリエールから聞いたことを思い出していた。そう、ボス級のモンスターを見たという軍の話……

「ユリエール！！！」

男が大声で叫んだ

「シンカー！！！！！」

ユリエールもそれに応えて叫ぶがそれにかぶせるようにシンカーが叫んだ

「来ちゃだめだー！！！！その通路は……っ！！！」

シンカーの絶叫。つまりこれが意味するのは……

「止まれ！ユリエール！！」

俺は叫ぶが、ユリエールはシンカーしか見えていない。このままで
は……

「チツ」

俺は舌打ちをして足に力を込めた。キリトも同じ動作をしており、
キリトのほうが早く弾丸のように飛び出した。俺もそれにつづく。
背後から右手をユリエール体の前にまわし、左手の剣を壁に突き刺
すキリト。俺は左手をキリトの体の前にまわし、右手の剣を突き刺
す。こうして十字路ギリギリのところまで止まった俺たちの目と鼻の
先を死の弾丸が通り過ぎた。黄色いカーソルは十メートルほどいつ
て止まった。またこちらに突進しようとしたので俺たちはその車線
から退避して、そいつの姿を見た。死神としか言い様のない姿だっ
た。武器は巨大な鎌。鎌というのは中距離の武器で、相手の盾に先
を引っかけ、体制を崩す事ができる。ただし懐に潜り込まれたら終
わりだし（今回の死神のように生身でも高い攻撃力を誇るものは体
当たりで突き飛ばせばいいのだが）遠距離攻撃にも鎌の重さでかわ
せないし、ガードもできないので弱い。常に相手との間合いを考え
る必要がある。……何現実逃避しているんだ俺は……。識別スキル
でデータが見えなかった。つまりこいつは間違いなく今まで会った
モンスターの中で最強！！

「アスナ、リン、今すぐ安全エリアの三人を連れて、クリスタルで
脱出しろ」

キリトも識別スキルで確認したらしく擦れた声で言った

「え……？？」

「こいつ、やばい。俺の識別スキルでもデータが見えない。強さ的には多分九十層クラスだ……」

「それですめばいいがな……裏ボス的なやつだろう……」
俺も声が擦れるのを抑えることができない。体は強ばり原始的な恐怖が俺の体を貫いている。濃厚な死の気配。まさに死神。そいつの名前は>>The Fatal-scythe<<意味は運命の鎌
その運命は果たして死か、生か……

「……!?!」

アスナも息を呑んで体を強ばらせる。そうしたやりとりの間にも死神が少しずつ近づいてきた。まさに死が忍び寄るかのように

「俺が時間を稼ぐから、早く逃げろ!!」

キリトは叫ぶ。だが、その体は震えている

「アスナ……さっさと逃げろ」

キリトの隣に並び、俺は言う。震えて、今にも剣を捨て、座り込みたかったが俺には守りたい人、親友がいる。だから、座り込むわけにはいかない

「リン……」

「キリト……たまには俺にもかっこつけさせろよ」

「ははっ……わかったよ。だが、死ぬなよ。約束だぜ」

「お前こそな」

憎まれ口の応酬。やがて死神は急にスピードを上げてキリトの方に突進してきた。俺はいつでもサポートできるようにキリトの後ろに立つ。キリトは二本の剣をクロスし迎撃体制に。するといきなり横から白い閃光、アスナが走り込み剣を合わせた。そこに死神の鎌が振り下ろされた。サポートをする暇もなかった。二人は吹き飛ばされ俺のちよつと横に叩き付けられた。これによりキリトとアスナのHPが半分を割り込んだ。さらに死神の追撃。狙いはキリトとアスナ！俺はキリト& a m p ;アスナと死神の間に割り込む。両手の剣を合わせ死神ね鎌の軌道にほぼ平行になるように合わせた。ちよつとでも軌道がずれると三人とも仲良くあの世いきだった。賭けには成功し、鎌の軌道をずらすことに成功。俺たちのわずか右の地面に突き刺さった。余波で俺たちは飛ばされた。HPを確認するとアスナとキリトはレッドゾーン。俺はまだ残っている。俺は前にでる。思惑は成功し、死神の狙いはおれ一人にしぼられた。再び高威力の鎌が横なぎに振られた。俺は懐に潜り込みかわす。そして単発重攻撃>>ヴォーパル・ストライク<<を放った。だが、まるで石でもたたいたような衝撃を受けて俺の体は硬直し剣を落としてしまった。死神が少し下がり、俺に向かって鎌を振り上げた。俺は硬直。キリトとアスナは動けない。これは死んだな……

「すまない……アスナ、キリト、約束は守れない」

俺は鎌を見つめた。後ろでキリトとアスナが叫んでるのが聞こえる。だが聞こえない。全てがスローモーションに見える

そのスローモーションは視界一杯に広がった黒いものが登場して突然終わった。その直後、大音響とともに音がよみがえった。同時に目の前に【Immortal Object】の文字が浮かび上がった。復活した頭で考える。そして、すぐに一つの答えを導きだす

「ユイ……お前……やっぱり……」

ユイは俺の言葉には答えず悲しそうに眉をひそめた。その直後突然、ユイの掌に炎が生まれ、凝縮し、一振りの大剣となった。服が焼け落ち最初に見たときに着ていたワンピース姿になる。そして、その大剣を死神に向かって振り下ろした。死神は鎌で受けるが、熱により鎌が徐々に溶け、最後には死神ごと叩き斬られた。その一撃により死神は爆散。その後に残ったのは痛いぐらいの沈黙だった

「ユイ……ちゃん……」

沈黙を破ったのはアスナ。細剣を支えにアスナはゆっくり立ち上がり、キリトとともにこちらに向かって数歩歩み寄った。ユイは微笑んではいたが、その瞳は涙で一杯だった

「パパ……ママ……にい……。ぜんぶ、思い出したよ……」

「ユイ……辛かったら俺が……」

俺の言葉にユイは左右に首を振る

「私が言わないと……いけないから……」

俺に微笑むユイはとても痛々しかった

説明とシステム（前書き）

これでユイ編は終わりです

説明とシステム

安全エリアには黒い石机が設置してあった。そこにユイは座り俺、キリト、アスナがそれを囲んでいる状態だった。なお、ユリエールとシンカーは先に脱出してもらったのでもうここにはいない

ユイはしばらくためらっていたがアスナが訊ねたことによって重い口を開いた

「はい……。全部、説明します……。キリトさん、アスナさん、リンさん。もっともリンさんはある程度推測できているとは思いますが……」

リンさんとよばれたことで何だか喪失感を感じる。何でだろうな……システムだっていうのに……知っていたのに……心が痛いんだが……

「>>ソードアート・オンライン<<という名のこの世界は、ひとつの巨大なシステムによって制御されています。システムの名前は>>カーディナル<<、それが、この世界のバランスを自らの判断に基づいて制御しているのです。カーディナルはもともと、人間のメンテナンスを必要としない存在として設計されました。二つのコアプログラムが相互にエラー訂正を行い、更に無数の下位プログラム群によって世界の全てを調整する……。モンスターやNPCのAI、アイテムや通貨の出現バランス、何もかもがカーディナル指揮下のプログラム群に操作されています。……しかし、ひとつだけ人間の手に委ねなければならぬものがありました。プレイヤーの精神性に由来するトラブル、それだけは同じ人間でないと解決できない……。そのために、数十人規模のスタッフが用意される、はずでした」

「GM……ユイ、つまり君はゲームマスターなのか……？アーガスのスタッフ……？」

「馬鹿か。ユイは”はずでした”と言ってるじゃないか。それにこんな歳のアーガスのスタッフが存在しているわけがない。残った選択肢はただひとつ」

ユイはひとつ頷くとまた口を開いた

「カーディナルの開発者たちは、プレイヤーのケアすらもシステムに委ねようと、あるプログラムを試作したのです。ナーヴギアの特性を利用してプレイヤーの感情を詳細にモニタリングし、問題を抱えたプレイヤーのもとを訪れて話を聞く……。>>メンタルヘルス・カウンセリングプログラム<<、MHC P試作一号、コードネーム>>Yuik<<。それがわたしです」

「プログラム……？AIだっというの……？」

ユイは悲しそう笑顔のまま頷いた

「プレイヤーに違和感を与えないように、わたしには感情模倣機能が与えられています。……偽物なんです、全部……この涙も……。ごめんなさい、アスナさん……」

アスナはユイを抱きしめようとしたが、ユイはそれを拒否するようになんて下がった。アスナは、抱きしめるのをやめ、さらに言葉を重ねる

「でも……でも、記憶がなかったのは……？AIにそんなこと起きるの……？」

「……二年前……。正式サービスが始まった日……。何が起きたのかはわたしにも詳しくは解らないのですが、カーディナルが予定になり命令をわたしに下したのです。プレイヤーに対する一切の干渉禁止……。具体的な接触が許されない状況で、わたしはやむなくプレイヤーのメンタル状態のモニタリングだけを続けました。状態は……最悪と言っていていいものでした……。ほとんど全てのプレイヤーは恐怖、絶望、怒りといった負の感情に常時支配され、時として狂気に陥る人すらいいました。わたしはそんな人たちの心をずっと見続けてきました。本来であればすぐにもそのプレイヤーのもとに赴き、話を聞き、問題を解決しなくてはならない……。しかしプレイヤーにこちらから接触することはできない……。義務だけがあり権利のない矛盾した状況のなか、わたしは徐々にエラーを蓄積させ、崩壊していきました……」

俺たちは何も言えない中ユイの独白が続く

「ある日、いつものようにモニターしていると、他のプレイヤーとは大きく異なるメンタルパラメーターを持つ三人のプレイヤーに気が付きました。喜び……。安らぎ……。でもそれだけじゃない……。この感情はなんだろう、そう思ってたわたしはその三人のモニターを続けました。会話や行動に触れるたび、わたしの中に不思議な欲求が生まれました。そんなルーチンはなかったはずなのですが……。あの三人のそばに行きたい……。直接、わたしと話をしてほしい……。すこしでも近くにいたくて、わたしは毎日、三人のうち二人の暮らすプレイヤーホームから一番近いシステムコンソールで実体化し、彷徨いました。その頃にはもうわたしはかなり壊れてしまっていたのだと思います」

「それが、あの二十二層の森なの……?」

「はい。キリトさん、アスナさん、リンさん……わたし、ずっと、お三方に……会いたかった……。森の中で、お三方の姿を見た時……すごく、嬉しかった……。おかしいですよ、そんなこと、思えるはずなのに……。わたし、ただの、プログラムなのに……」

「システムだ、人間だなんて関係ない……」
俺は口を開く、過去の後悔と反省を考えながら

「そうやって自分で考えて、行動できるならシステムだろうが関係ない。ユイは俺の立派な妹だ」

「そうだよ。ユイちゃん。ユイちゃんは……わたしたちは家族ですよ？」

「そつだぞ、ユイ」

俺たち三人の言葉でユイは目を丸くしていたが、しばらくすると嬉しそうに微笑んだが、それにはどこか寂しさが混じっていた

「リンさん……キリトさん……アスナさん……ありがとうございます……家族なんて言ってもらって……すごく嬉しいです」

俺たちはユイにつられて微笑むが次の言葉で困惑したような顔に変わる

「でも……もう……遅いんです」

「なんでだよ……遅いって……」

「わたしが記憶を取り戻したのは……あの石に接触したせいなんです」

ユイは部屋の中央にある黒い立方体を指差した

「さっきアスナさんがわたしをこの安全地帯に退避させてくれた時、わたしは偶然あの石に触れ、そして知りました。あれは、ただの装飾的オブジェクトじゃないんです……GMがシステムに緊急アクセスするために設置されたコンソールなんです」

ユイが言ったとたん黒い石の表面に青白いホロキーボードが浮かび上がった

「さっきのボスモンスターは、ここにプレイヤーを近付けないようにカーディナルの手によって配置されたものだと思います。わたしはこのコンソールからシステムにアクセスし、>>オブジェクトイレイサー<<を呼び出してモンスターを消去しました。その時にカーディナルのエラー訂正能力によって、破損した言語機能を復元できたのですが……それは同時に、今まで放置されていたわたしにプログラムが走査しています。すぐに異物という結論が出され、わたしは消去されてしまうでしょう。もう……あまり時間がありません……」

「そんな……そんなの……」

「ユイ……一つ聞きたい。ユイはどうしたい？可能性とかはどうでもいい……ユイはユイ自身はどう思っている？」

「わ……わたしは……」

「ユイちゃん!？」

消えそうに薄くなっていくユイに近づこうとするアスナを止めながらユイに先を促す

「わたしは……にいやパパやママと……一緒にいたい!！」

「わかった……助けるさ……いつだって……それが兄としての努めだ!！」

ユイは光に包まれ完全に消える。次の瞬間俺はキリトを抱えシステムコンソールに飛び付いた

「なっ、なんだ!？」

「今ならまだこのコンソールは使える。ユイのシステムをカーディナルから切り離すことができれば!!--手伝えキリト!!--」

あまり俺はコンピュータが使えない。だからキリトに協力を仰ぐ。俺の意図を汲み取ったキリトは凄まじい勢いでキーボードを叩きだした。そして……

破裂するような効果音とともに俺とキリトはコンソールから弾き飛ばされる

そしてキリトの手と俺の手にはしっかりと握られたクリスタルがあった。驚いて駆け寄ってきたアスナに向かって俺たちは笑みを浮かべてクリスタルを差し出した

「こ、これは……?」

「……………ユイが起動した管理者権限が切れる前に、ユイのプログラム本体をどうにかシステムから切り離して、オブジェクト化したんだ……………。ユイの心だよ、その中にある……………全く、リンが気付いてくれてよかったよ……………」

「ユイちゃん……………そこに、いるんだね……………。わたしの……………ユイちゃん……………」

アスナはそれだけ言うと泣き出した

「ね、キリト君とリン君」

「ん？」

「もしゲームがクリアされて、この世界がなくなったら、ユイちゃんはどうなるの?」

「ああ……。容量的にはギリギリだけどな。クライアントプログラムの環境データの一部として、俺のナーヴギアのローカルメモリに保存されるようになってる。向こうで、ユイとして展開させるのはちょっと大変だろうけど……。きつとなんとかなるさ」

「そっか」

アスナはキリトに抱きつく

「じゃあ、向こうでまたユイちゃんに会えるんだね。わたしたちの初めての子供に」

「ああ。きつと……。まあ、少しでか過ぎるが子供が今いるけどな」

「そっだね」

アスナは俺を抱きしめてくる。俺は抵抗しようとしたがやめた。アスナの目に光るものがあつたからだ。しばらくして泣き止んだアスナは顔をあげると

「リンちゃん……」

「リンちゃんはやめてくれ」

キリトの爆笑とアスナの涙と俺の苦笑いがとてもカオスだった

説明とシステム（後書き）

蕾姫「……………」

なのは「何でわたしのセリフがあるのかな？」

蕾姫「最後まで言ってないからいいじゃ……………」

魔王「おはなしする？」

蕾姫「すみませんでした！！！」

リン「おいおい、限定された人にしかわからないネタを使うなよ……………」

蕾姫「いや、いいセリフじゃん？使いたかったんだよ魔王様のセリフ」

魔王「魔王じゃないよ！……………スターライト……………」

蕾姫「……………へっ？」

魔王「ブレイカー！！！」

リン「この後書きは作者のノリと気分とパクリによって制作されています、これからもこの小説をよろしくお願いします！」

レッドとグリーン

あの後、キリトとアスナの家に招かれ夜遅くまでユイの話をした

実は俺がキリトとアスナの家に行ったのはついである。予想外の事件に時間を取られたが本来の目的は最前線で出会ったある人の依頼である。ここにプレイヤーホームがある木工職人プレイヤーのだが、ある日、木を採っていると複数のオレンジプレイヤーが一人のプレイヤーを囲んでいたという。そうして見ているとそのプレイヤーは殺されてしまった。さらに震えながら見ていると近くに洞穴の中に入って行ったという。このままでは安心して木を拾いに行けない。助けて欲しいという。俺がその依頼を受けたのは単純にキリトとアスナの生活を守りたいと思ったからだ……うん、親孝行者だと思ったやつ、君とはどうやら拳で語り合わないとダメみたいだ。そんなわけで俺はキリトとアスナに別れをつけ森の中に分け入った

しばらく歩くと例の木工職人プレイヤーの言っていた洞窟が見えたとりあえず近くの草むらに隠れる。ちなみに俺の隠密スキルはコンプリートしているのでよほどのことがなければばれることは無いだろう。と隠れ、索敵スキルで走査すると二つ向こうの草むらに五人組のパーティーが隠れているのがわかった。色は全員グリーン。男三人で女二人。十中八九俺と同じ依頼を受けた連中だ。ちなみに俺がああ男を見かけたのは五十層だった。装備のグレードから察するに実力は中の中ってところだろう。中層プレイヤーのポリウムゾーンのプレイヤーだな。考えていると洞窟の前に、オレンジプレイヤーが五人ほど集まってきた。だが索敵スキルによると洞窟のすぐ中に五人。あっち側の左の草むらに三人、右の草むらに二人、計十五人。どうやら俺の近くにいたパーティーはばれてるらしくそっちに向けてちらちらとオレンジプレイヤーが視線を向けている

「馬鹿か、獲物を釣る餌役だよ。こいつは」

「なっ……………」

驚いて目を丸くする女性

「で、お前何者だ？俺の素敵スキルで隠密を破れなかったんだが」

「獲物を選ぶときはしっかり戦力を見定めてからした方がいいですよ？」

俺はパーティーのメンバー全員を放り投げ、俺はジャンプで囲みを脱出する。するとメンバーのうち男は全員一目散に逃げ出した。女は俺を心配してか、残っていた

「ねえ……………さっさと逃げようよ」

「それが……………得策」

「俺は心配いらぬ。お二人さんはさっさと逃げな。正直、邪魔だ」

「足手まといつて……………」

「済まないな、君らのレベルは見たところあいつらよりも低い。だから逃げろって言ってるんだよ」

「低いって……………あなたの装備、金属のない黒い布製じゃない！片手剣なのに盾持ってないし……………」

「おいおい、こつちを無視してんじゃねえよ！」

「あゝ、ごめん忘れてた」

「てっ、てめえ……」

「まあ、気にするな。それよりおまえら全員牢獄に飛んでくれませんか？それとも放り込まれたいですか？」

「ふざけんじゃねえ！！！」

一人の犯罪者プレイヤーが剣を振りかぶって向かってくる。得物は太剣。もちろん勢いのついた太剣は片手剣では受けとめることはできない。現実ならば……

「なっ、なにい！？」

その声は俺が片手剣で太剣を受けとめたことによる驚きの声だ

「筋力補正に差がありすぎだな。さて実力の差がわかってもらえたところで牢獄に飛んでくれませんか？」

「だが……全員でかかれば……」

「戦闘時回復の回復をうわまることができればな。ちなみに俺のレベルは90を越えてるぞ？」

「なっ……」

「えっ……」

「こっ、攻略組だと!?!」

「黒い服に盾無しの片手剣……双剣使い>>黒の剣士<<だと!?!」

また間違えられた

「双剣使いはあってるが、俺はキリトじゃないから>>黒の剣士<<ではないな」

「くっ……」

「まあ、飛んでもらおうかな…コリドーオープン!」

手に持っていたクリスタルは砕けちり光の渦が現れる

「この世界で犯罪を犯して何が悪い!所詮ゲームだろ?VRMMOだろ?だったら権利の奪い合いじゃねえか!その過程で殺しても別にいいじゃねえか!」

「お前はこの世界をバーチャルワールドだと思ってるのか?いいや、そんなわけわない。バーチャルワールドだと思ってるならここまで生き残ってないからな……それでも殺す。それはただの殺人だ」

「その何が悪い。お前らグリーンと俺たちレッドは何が違うんだよ!お前らは生き残るためにモンスターを狩る、殺す。俺たちはプレイヤーを狩る、殺す。対象が違うだけじゃねえか!」

「確かにそうだな……だがお前らは殺人を楽しんでいる。ただの遊

びとして人を殺している。そんなことが許されると思っているのか？」

「ぐっ……」

「わかったなら……さっさと行け」

「ち……ちくしょう。何で攻略組が俺の依頼を受けたんだ……」

「この近くに親友の家があるんでな。そいつらも攻略組だが、安心して生活させてやりたくてな」

「運が悪かったわけだ……」

犯罪者たちは観念したかのように光の渦に入っていく。そして全員がいなくなり光の渦は消えた

「さて……何でまだ残ってるのかな？逃げろって言ったよね」

「心配で……まあ、する必要はなかったんですけどね」

「えっと、ありがとう……」

「どういたしまして。それじゃ、俺はこれで」

俺は踵を返す

「あの……お名前は？」

「リンだ」

「リンさんですね？わたしは……」

「いや……言わなくていい」

「え？」

「現実で会えたら聞くよ。だから、生き残れよ？」

「「はい」」

こんどこそ俺はその場を去る

……自分の吐いた台詞の臭さに悶えながら

レッドとグリーン（後書き）

蕾姫「最後ので台無しだよリン！」

リン「いやいや、恥ずかしすぎるから！ってか何で名前出さなかったんだ？」

蕾姫「出オチ& a m p・モブだから？」

リン「あれ、絶対フラグだったよね！？」

蕾姫「回収する気ナッシング」

リン「新しいヒロインっぽかったじゃん……」

蕾姫「オリキャラは一人。これは曲げたくない！！」

リン「可哀相に……」

蕾姫「出してやろうか？盾役として」

リン「あんた、黒いな……」

蕾姫「まあ、出ない予定だけどね。暗すぎるの嫌いだし」

リン「……そうか……」

蕾姫「この小説を読んでくれてありがとう。これからもよろしくお願ひします」

魚釣りと最後の休暇

二人と別れ俺は来た道を戻っていた。途中にあった湖で三十人ほどがわいわい騒いでいたので行ってみることにした

「こんにちは」

「おう、こんにちは」

わ、は、は、はと豪快に笑う爺さん……元気だな

「えっと、ここでは何をやっているんですか？」

「見ての通り釣りじゃよ。それで大会を開いておったんじゃ」

「へえ……おもしろそうですね……おっと、申し遅れました。俺はリンです」

「こりゃ、丁寧にどうも。ニシダというもんですわ」

わ、は、は、はとまた豪快に笑う……とその時、向こうからキリトと……生活に疲れたような人が来た。まあ、アスナだろう……人気者はつらいんだな。キリトたちは俺がいることに驚いたようだった

「なっ、何でいるんだ!？」

「たまたま、通りかかったただけ。昨日ぶり、キリトとその奥さん?」

まあ、気をつかってアスナの名前は出さなかった

「助かる」

キリトが囁いてくる

「ねえ……何でわかったの？」

アスナも囁いてくる

「キリトのそばにいる可能性のある女性でその身長はアスナだけさ……あとはもっと小さいし」

囁き返す俺……アスナがキリトに詰問してる

「おや、お知り合いですかな？」

「ええ……まあ」

言葉を濁すアスナ

「まあ、腐れ縁というやつです」

お茶を濁す俺

「まあ、いいです。それより晴れてよかったですなあ！」

「こんにちはニシダさん」

その後、全員に挨拶する。幸いというか、アスナの正体はばれなか

った

「え、それではいよいよ本日のメイン・イベントを執行します！」
周囲の連中が大いに沸いた。……何をするんだ？ニシダの手には長い竿と、太い糸それにぶらさがっている巨大なトカゲを見ながら思った

「何をするんだ？」

小声でキリトに尋ねる

「又シを釣るために竿のスイッチをするんだと。俺とニシダさんが」

「そうか……」

キリトの筋力パラメーターで釣れないわけがないが……オーバーサイズじゃね？口には出さないがそんなことを思っていると、釣りを見たこともやったこともない俺にでもわかるような見事なフォームで竿を振ると巨大なトカゲは飛んでいき、湖に沈んだ。しばらくするとピクピクと動く

「き、来ましたよニシダさん！！」

「何の、まだまだ！！」

ニシダがいつもよりもさらに爛々と輝かせ、竿の先をにらんでいる。その竿の先がいつそう深く沈み込んだ瞬間

「いまだっ」

ニシダが体を反らせ竿を引く。次の瞬間、キリトに手渡す

「掛かりました！！あとはお任せしますよ！！」

「うわっ！こ、これ、カ一杯引いても大丈夫ですか？」

「最高級品です！思い切ってやってください！」

その言葉を聞いたキリトは全力をだした。竿が中程から逆Uの字に大きくしなっている。こんなときになんだが、俺、アスナ、キリトの力関係を説明するとレベルは俺<キリト<アスナで筋力はキリト<俺=Aスナ。敏捷力は俺<アスナ<キリトである。技の好みはキリトは力での押しを得意とするが俺はどちらかというところと絡め手の技を得意とする。アスナは技術で勝負するタイプ。俺はアスナに近いがキリトとも似たところがある。つまり中間なんだ。二人の。そんなことを考えているとアスナが身を乗り出し、水中を指差した

「あつ！見えたよ！！」

俺は無駄な思考を停止し、湖面を注視する。キリトが一際強く竿をあげると、何やら巨大な魚のようなものが湖から外に飛び出した

「……………ふむ……………」

シーラカンスに似た六本足のやつが立っている。キリトの前に。俺は剣を出す。次の瞬間キリトの姿が後ろに消えた。そして、後ろでキリトが何やら抗議をしているが、その間に巨大魚？はこちらに走ってくる。俺は知的好奇心を掻き立てられながら後ろ向きに後退した

「主婦さん」

「何？」

「倒してもいいの？」

「一応確認をとる」

「いいけどわたしも行く」

すぐにいつもの姿に戻ったアスナが来た。手にはいつもの細剣

「もう、いいの？ばらして」

「あつ……」

天然すぎるだろアスナ！！

「まあ、いいか……先制よろしく」

俺の方が大技を繰り出すためアスナが先に行った方がいいのだ。後でニシダさんとかニシダさんとかキリトとかが騒いでるが全く気にしない。その間にもアスナが確実に巨大魚のHPを減らす。まるで舞でも舞っているかのように剣を叩きこんでいく

「スイッチ！」

アスナが叫んだとたん俺は二刀流重突進技、>>ダブル・サーキュラー<<を放った。この一撃でHPが0になったらしく魚？はポリゴンとなって砕け散った

「スイッチいらなかったよな？」

「まあ……ね。あのタイミングでスイッチするつもりだったんだけど、予想外にHPが減ってたから」

アスナは苦笑いで応じる。そして、二人でキリトのもとに戻る

「よ、お疲れ」

「わたしたちだけにやらせるなんてずるいよー。今度何かおこってもらうからね」

「もう財布も共通データじゃないか」

「残念。俺は違つぞ」

「げ。そうだった」

「それってわたしのところから出ることと同じだよな」

「あはは……」

フリーズしていた釣りメンバーのうちニシダがいち早く復活し口を開いた

「……いや、これは驚いた……。奥さん、リンさん、ず、ずいぶんお強いんですな。失礼ですがレベルはいかほど……？」

キリトとアスナは顔を見合わせた。君らが考えていることは予想が

つくがもつ手遅れだと思っぞ

「そ、そんなことよりホラ、今のお魚さんからアイテム出ましたよ」
アスナが白銀に輝く一本の釣り竿が出現した

「お、おお、これは!？」

ニシダは誤魔化せると思うが……

「あ……あなた、血盟騎士団のアスナさん……?」

一人の若いプレイヤーが前に出てくる。ほーらばれた

「そうだよ、やっぱりそうだ、俺写真持ってるもん!」

「う……」

「か、感激だなあ!アスナさんの戦闘をこんな間近で見られるなんて……。そうだ、サ、サインお願いしていいで……」

キリトとアスナの間で視線を往復させて数秒

「け……結婚、したんすか……」

しょうがないから助けをしてやる

「はいはい、この二人は夫婦だからアスナを狙ってた人は、諦めてね!。もし二人の中を引き裂くような真似をしたら……」

そこで、言葉を切りいい笑顔で（目は笑っていないが）

「その身を引き裂くよ？」

「「「「ひいつ！？」「」「」」

そこにいたニシダ、キリト、アスナ以外が悲鳴を上げる。笑顔に恐怖するとは失礼な。俺はただお願いしてるだけなのに

「それじゃ、ニシダさんはこれで」

「ああ……わかった」

キリトとアスナの腕を引いてキリトとアスナの家に戻る

「リン君の顔、凄く恐かったよ」

「74層のボスより恐かった……」

……失礼な……

「でも、ありがとう。助かったよ」

「おう、じゃあ俺はこれで帰るわ」

「泊まっていけばいいのに……」

「新婚の夫婦の間に入るつもりはないんでね」

「ああ、じゃあおやすみ」

俺は無言で手を振る。この時は知らなかったが、数時間後、また会うことになる

情報と会議と

次の日、前線のヒースクリフからメールが届いた。75層のボス戦をするから参加しろと。もちろんキリトとアスナにも来ていた。キリトはぶつぶつしていたがアスナがなだめていた。まあ、すでに死者が出ているって言われたらな……

二十二層の転移門広場ではニシダが俺たちを待っていた。昨日ニシダだけに出発時間を知らせたからだ

「ちょっとお話よろしいですか？」

そのニシダの言葉に頷いて、広場のベンチに腰掛ける

「……正直、今までは、上の階層でクリアを目指して戦っておられるプレイヤーの皆さんもいるということがどこか別世界の話のように思えておりました。……内心ではもうここからの脱出を諦めていたのかもしれませんが」

俺たちは無言でニシダの言葉を聞く

「ご存知でしょうが電気屋の世界も日進月歩でしてね、私も若い頃から相当いじってきたクチですから今まで何とか技術の進歩に食らいついて来ましたが、二年も現場から離れちゃもう無理ですわ。どうせ帰っても会社に戻れるか判らない、厄介払いされて惨めな思いをするくらいなら、ここでのんびり竿を振ってたほうがマシだ、と……」

「俺も、同じことを考えていました。ここには、抑圧してくる親も、

絶対にやらなければならないものはないですから……でも、俺は戻らないといけない。現実世界にやり残したことがあるし、何より会いたい人がいる」

……まあ、キリトのやつに気付かされたんですけどねとつぶやいてさらに言う

「この世界に来たことは後悔していません。キリトにもアスナにも……その他大勢のプレイヤーにも……もちろんニシダにも出会えた。こうやって、会話もできる。この世界で生きている。データが作り上げた、仮初めのものだとしても、この世界で経験したり感じたことは本物だと思うんです。だから、ニシダさんもこの世界で経験したり感じたりしたことは決して無駄ではないと思います」

俺の勝手な自己解決ですけどと苦笑まじりにつぶやいて口をつぐむ

「……そうですね、本当にそうだ……」

ニシダの眼鏡の奥で光るものがあつた。キリトは涙目。アスナは盛んにうなずいている

「今のリンさんのお話を聞けたことだって貴重な経験です。五メートルの超大物を釣ったことも、ですな。……人生、捨てたもんじゃない。捨てたもんじゃないです」

ニシダは立ち上がった

「や、すっかり時間を取らせてしまいましたな。……私は確信しましたよ。あなたたちのような人が上で戦っている限り、そう遠くないうちにもこの世界に戻れるだろうとね。私にできることは何もあ

りませんが、……がんばってください。がんばってください」

最後にニシダと握手をしてわかる

「また、戻ってきますよ。その時は付き合ってください」

「では、また」

そして俺たちは転移門の中に入り

「『転移……グランザム！』」

ボス戦の舞台へと転移した

「偵察隊が、全滅！？」

場所は血盟騎士団のギルド本部の会議室。ヒースクリフからの報告

を一言聞いたとたんキリトは叫んだ。キリトがそう叫ぶが無理もない。あくまで偵察なのだ。しかも偵察したのは、一握りのハイレベルプレイヤー。かく言う俺も驚きを隠せないのだ

「昨日のことだ。七十五層迷宮区のマッピング自体は、時間は掛かったがなんとか犠牲者を出さずに終了した。だがボス戦はかなりの苦戦が予想された」

今までのボスでもクォーターポイントごとに一つ飛び抜けた強さを誇っていたからだ

「……そこで、我々は五ギルド合同のパーティー二十人を偵察隊として送り込んだ」

二十人……破格の多さだな

「偵察は慎重を期して行われた。十人が後衛としてボス部屋入り口で待機し……最初の十人が部屋の中央に到達して、ボスが出現した瞬間、入り口の扉が閉じてしまったのだ。ここからさきは後衛の十人の報告になる。扉は五分以上開かなかった。鍵開けスキルや直接の打撃等何をしても無駄だったらしい。ようやく扉が開いた時……」

一瞬ヒースクリフは口と目を閉じて、言葉を続ける

「部屋の中には、何も無かったようだ。十人の姿も、ボスも消えていた。転移脱出した形跡も無かった。彼らは帰ってこなかった……。念の為、基部フロアの黒鉄宮までモニュメントの名簿を確認しに行かせたが……」

無言で首を振るヒースクリフ

「十……人も……。なんでそんなことに……」

「結晶無効化空間……それに開かない扉……か」

ヒースクリフは無言で首肯すると先を続けた

「そうとしか考えられない。アスナ君の報告では七十四層もそうだったということだから、おそらく今後全てのボス部屋が無効化空間と思っただろう」

「バカな……」

「たまたまだと信じたいけどな」

悲観論で考え楽観論で行動しろってな……どこで聞いたっけ？

「いよいよ本格的なデスゲームになってきたわけだ」

「だからと言って攻略を諦めることはできない」

ヒースクリフは目を閉じて、きっぱりとした口調で言った

「結晶による脱出が不可な上に、今回はボス出現と同時に背後の退路も絶たれてしまう構造らしい。ならば統制の取れる範囲で可能な限り大部隊をもって当たるしかない。新婚の君たちを召喚するのは本意ではなかったが、了解してくれ給え」

「俺の任せて新婚生活をエンジョイしてくれっただけでいいけど、絶対断るだろ」

「当たり前だろ？親友が死と隣合わせのところにいるのに楽しんでられるかよ」

「まあ、楽しんでいただけだな」

「うぐっ……」

ちよつとだけ空気が和む。ヒースクリフの纏う空気以外だが。キリトは気を取り直して言う

「協力はさせて貰いますよ。だが、俺にとってはアスナとリンの安全が最優先です。もし危険な状況になったら、パーティー全体よりも彼女を守ります」

ヒースクリフはかすかな笑みを浮かべた

「何かを守ろうとする人間は強いものだ。君の勇戦を期待するよ。攻略開始は三時間後。予定人数は君たちを入れて三十二人。七十五層コリア市ゲートに午後一時集合だ。では解散」

ヒースクリフ以下配下の男たちは一斉に立ち上がり出ていった

「なあ、キリトとアスナ」

「「うん？」」

「やつの、ヒースクリフについて何か変わったことはないか？」

「変わったことって……ねえ？」

「うーん……」

「いや、システムのあり得ないとか、おかしなセリフとかあったら知りたいんだ」

先ほどのヒースクリフの目が気になったのだ。十人が死んだと告げたとき、目を閉じる寸前に目に浮かんだ冷ややかな光が

「そういえば、この間のあいつとのデュエルで最後にあり得ない動きをしてたな……今まで見た誰よりもあの一瞬、速かった……で、これがどうかしたのか？」

「いや……それだけ聞ければ十分だ」

証拠はないが……

「そうか……」

「何か気になるの？」

ユイのときのようなことを想像しているのだろう。がやつに今戦線を抜けてもらっては困るので黙っておく

「何でもない。じゃあ、俺も行くわ。新婚のお二人さんは仲良く、装備の確認でもしておけよ？」

「なっ……」

おーおー真っ赤だねえアスナさん。その言葉を最後に俺はその場を

離れた

情報と会議と（後書き）

蕾姫「アリアだね」

黒雪姫「アリアだな」

リン「アリアかよ」

キリト「……うるさい……って言うか誰なんだ！？真っ黒で両手両足が剣の人？は！？」

蕾姫「特別ゲストの黒雪姫さんです。原作の作者の書いているもう一つの小説、アクセルワールドのメインヒロインです」

黒雪姫「ふむ、よろしく頼むぞ」

リン、キリト「よろしくお願ひします」

蕾姫「いやー、ついにアニメ化&ゲーム化するな、ソードアート・オンラインとアクセルワールド」

リン「俺の活躍はあるかな？」

蕾姫「あるわけないだろ……オリキャラなんだし……つか、ここにいる全員好きな人いるんだよな……リア？充爆発しろ……！」

キリト、リン、黒雪姫「……ほう？」「」「」

蕾姫「そつ、その右手を大きく後ろにひねるその構えは……奪命撃

>>ヴォーパル・ストライク<<じゃ……」

キリト、リン、黒雪姫「……はあっ……！」「」「」

蕾姫「ぎゃあああ！？」

リン「悪は滅びた………というわけでこれからこの小説をよろしく
お願いします！」

ボス戦と……（前書き）

遅くなりました

ボス戦と……

七十五層のコリニア市のゲート広場には、多数のプレイヤーがいた。その中にハゲた斧使いと刀を担いだ悪趣味なバンダナやろうを発見したので……バンダナの方だけ足払いをかました

「ぬおあ!?!」

期待通りに転んでくれたので俺はハゲた斧使い、エギルに話しかけた

「よう、おまえも参加するのか」

「おう、リン。久しぶりだな」

その時下からバンダナが起き上がってきた

「てめえ、リン!何しやがる!」

「足払い」

「……まあ、そうか……ってそういうことじゃねえよ!」

その時、再び門が光見知った顔が現れたのでバンダナの刀使い、クラインを無視してそっちに行った。クラインも諦めたらしく、俺の後ろをエギルとともに着いてきた

「よう、キリト」

「よう、リン。あれ?クラインやエギルも参加するのか」

「今回はえらい苦戦しそうだって言うから、商売を投げ出して加勢にきたんじゃねえか。この無私無欲の精神を理解できないたあ……」

「無私の精神はよく解った。じゃあお前は戦利品の分配からは除外していいのな」

「いや、そ、それはだなあ……」

笑いが起こる。ピンと張り詰めていた空気が少し和らいだ気がしたが、次の瞬間、ヒースクリフを筆頭とする血盟騎士団の精鋭が姿を現すと再び空気が張り詰めた。そして俺たちの前に歩を進めると口を開いた

「欠員はないようだな。よく集まってくれた。状況はすでに知っていると思う。厳しい戦いになるだろうが、諸君の力なら切り抜けられると信じている。……解放の日のために！」

おおーという声上がる

「キリト君、それにリン君、今日は頼りにしているよ。>>二刀流<<、存分にふるってくれたまえ」

その声には気負いも恐怖も感じられない。かなり不自然だと俺は思うが……

「では、出発しよう。目標のボスモンスタールーム直前の場所までコリドーを開く」

周囲のプレイヤーたちから驚きの声上がる。ヒースクリフが「コ

リドー・オープン」と呟くと転移門によくある揺らめく光の渦が出現した

「では皆、ついてきてくれたまえ」

ヒースクリフのあとに続き転移をした。転移するとそこはもうすでにボス部屋の前だった。重厚感溢れる門がそこに鎮座している。門の隙間からは重い冷気を含んだ風が吹いてくるような感じがして思わず身震いしてしまった

「……………なんか……………やな感じだね……………」

「ああ……………」

後ろでキリトとアスナが話しているが、それには俺も同感だ……………つと、装備の確認でもしておこうかな

「死ぬなよ」

「当たり前だろ」

キリトが肩を叩きそんなことを言うてきたので不敵に笑い返す。そつういうやり取りをしている間に、二人のプレイヤーが扉を開けた

「戦闘、開始！」

そう高々と言ったヒースクリフを先頭に全員が中へ走りだす

全員が中央につくと後ろの扉が音高くしまった。しかし、数秒間痛いほどの沈黙が続く。それに耐えられないといった感じで一人のプレイヤーが「おい……」と声を上げた次の瞬間

「上よ！」

アスナが鋭く叫ぶ。それに反応して素早く顔を上げると、骸骨の顔、巨大な一対の鎌、そして長い無数の足がある胴、名前は >>The Skullreaper<<……骸骨の刈り手が天井近くに張り付いていた。が、そうこうしているうちに全ての足を広げ、俺たちの方へ落ちてきた。大半はさすがの反応速度を見せ、落下地点からすぐに離れたが、落下地点の中央にいた三人のプレイヤーの反応が遅れた

「こつちだ!!」

キリトが叫び、その言葉に我に返った三人は走りだしたが、落ちてきた骸骨百足から発生した衝撃でたたらを踏んだ三人の背中に右腕が横薙ぎに振り下ろされた。三人はぶっ飛ばしたされ、空中で無数のポリゴンとなって霧散した

「……あり得ない……」

思わずつぶやいた。レベルが上がれば、HPの総量は増える。つま

り、死にくくなる。にもかかわらず、三人は一撃死した。そうこ
うしているうちに新たなターゲットを決めたくて骸骨百足が一つ
のプレイヤーの集団。俺から見れば右手のプレイヤー群に向かって
いった

「わああああ!!」

狙われたプレイヤーたちが恐怖の叫びを上げる。そして、そのプレ
イヤーたちに必殺の鎌が振り下ろされ……なかつた。ヒースクリフ
が鎌を迎撃。弾き返した。もう一つの鎌はキリトとアスナが完全に
シンクロした動きで対処している。ならば、俺たちのやるべきこと
は……

「皆、側面から攻撃だ!」

俺が声を張り上げると皆が「おうっ」と応えて骸骨百足の側面にそ
れぞれの武器を叩きつける。俺も一対の双剣を叩きつける。まず、
右手の剣で水平四連撃>>ホリゾントル・スクエア<<を放つ。右
腕を意識から外し、左腕に意識を集中させる感覚、俺の編み出した
システム外スキル>>スキルコネクト<<。左腕で放つ三連撃>>
バーチカル・スクエア<<。ここで意識をさらに左腕から外し、右
腕に移す。その時、骸骨百足の足がこちらに突きを放ってきたので、
右腕で>>ヴォーパル・ストライク<<を放ち迎撃。反動で後ろに
下がり、カウンター気味の双剣重突撃技>>ダブル・サーキュラー
<<を放つ

それから、あまり記憶になかった。無数に繰り出される足技をパ
リイで弾き、隙を見ては>>スキルコネクト<<で多段ソードスキ
ルでHPを削る。他の場所からは悲鳴、気合い、怒号、そして、ア
バターの破裂音。それらが響き渡る戦場でひたすら剣を振るい、骸
骨百足が爆散したとき、腰を下ろしてしまった。そして、お互いに
背中を預け座り込んでいる、キリトとアスナが目に残ったので、
ひとまず安堵し、そちらに這っていった

「……よかった……生きてたか」

「当たり前だろ……？死なないって行っただろ……？」

まさにいき絶え絶えといった感じでキリトがこたえる

「三人……生き残れたね……」

キリトの後ろでアスナが言った。俺も二人にもたれかかる。しばらくその状態で茫然としていた。すると、そばにいたクラインが訊ねてきた

「何人……やられた……？」

クラインの向こうで仰向けに寝ているエギルもこちらに目を向けてきた。キリトは手を振りマップを呼び出すとプレイヤーの光点を数えた

「……十四人、死んだ」

「……うそだろ……」

トッププレイヤー、三十人中十四人も死んだのだ。ダンジョンはあと二十五層。この上はこの七十五層ほど強いとは思えないが、かなりの強さだろう。そんなんでクリアできるのだろうか？

今、このフィールドで立っているのはヒースクリフただ一人だ。その視線は血盟騎士団のメンバーに向けられている。その視線は暖かいがまるで

実験動物を見ているような視線だった。この時、疑念は確信し変わった。ヒースクリフのHPはギリギリグリーン。その時、キリトが動いた。目から読み取れた言葉は”ごめん”だった。キリトは身をひねりながらヒースクリフに向かって駆け出した。片手剣の基本突進技>>レイジスパイク<<を発動していた。ヒースクリフが驚きに目を見開いて盾を使いガードしようとするがキリトの剣は途中で鋭角に動きを変え、ヒースクリフに直撃した。ヒースクリフとキリトの間に【Immortal Object】つまり不死存在の文字が浮かんだ

「キリト君、何を……」

その文字を見て声を上げたアスナを含む全員が言葉を失った。キリトは軽く後ろに跳んでヒースクリフとの間をとった。俺とアスナは立ち上がり、キリトの横に並ぶ

「システムの不死……？……って……どういうことですか……団長……？」

「見てわかるだろ、アスナ……システムの不死を持つことができるのはユイみたいなシステム……これはあり得ない。システムがボス戦に出続けるなんてな、もしくはGMを含むスタッフだけだ。けどスタッフはいない……ただ一人を除いて」

俺の言葉を引き継ぎキリトが言い放った

「>>他人のやってるRPGを傍から眺めるほど詰まらないことはない<<。……そうだろう、茅場晶彦」

「団長……本当……なんですか……？」

アスナが呆然と訊ねるがヒースクリフはそれをスルーし、俺たちに向かつて言葉を発した

「……なぜ気付いたのか参考までに教えてもらえるかな……？」

「……最初におかしいと思ったのは例のデュエルの時だ。最後の一瞬だけ、あんた余りにも早過ぎたよ」

「やはりそうか。あれは私にとっても痛恨事だった。君の動きに圧倒されてついシステムのオーバーアシストを使ってしまった」

苦笑の色を滲ませながら、君は？とこちらに目配せをする

「俺が疑いを持ったのは、あんたの目を見たときだ」

「目？」

「そう、目は口ほど物を言う。目を見た瞬間怪しいと思ったよ。まあ、ただの直感なんだが、キリトの例のデュエルの話聞いて怪しいは疑惑に変わった。そして、今のあんたの目。明らかに見下ろしているような目だったよ」

「君はなかなか鋭い目をしているね。まさか目で疑われるとは思わなかった」

そうしてヒースクリフはゆっくりとプレイヤーたちを見渡し堂々と宣言した

「確かに私は茅場晶彦だ。付け加えれば、最上層で君たちを待つはずだったこのゲームの最終ボスでもある」

アスナがよろめくがキリトが右手で支えた

「……趣味がいいとは言えないぜ。最強のプレイヤーが一転最悪のラスボスか」

「なかなかいいシナリオだろう？盛り上がったと思うが、まさかたかが四分の三地点で看破されてしまうとはな。……君たちはこの世界で最大の不確定因子だと思ってはいたが、ここまでとは」

不適な笑みを浮かべるヒースクリフ

「……最終的に私の前に立つのは君らだと予想していた。全十種存在するユニークスキルのうち、>>二刀流<<スキルは全てのプレイヤーの中で最大の反応速度を持つ者に与えられ、その者が魔王に

の強力なモンスター群に対抗しえる力として育ててきた血盟騎士団、そして攻略組プレイヤーの諸君を途中で放り出すのは不本意だが、何、君たちならきつと辿り着けるさ。だが……その前に……」

ヒースクリフは右手の剣を床に突き立てる

「キリト君とリン君、君たちには私の正体を看破した報奨を与えなくてはな。チャンスをあげよう。今この場で私と二対二……」

茅場が言い掛けたとき茅場の影がヒースクリフそっくりな形をとる

「……で戦うチャンス。無論不死属性は解除する。私たちに勝てばゲームはクリアされ全プレイヤーがこの世界からログアウトできる。……ちなみに、この影の名前は>>ドツペルマン<<。本来十九層にしかないモンスターなのだが、他のモンスターに化け同じステータスで動くことが可能だ。私はモンスター扱いなので、今のこのモンスターは私と同じだ。私と>>ドツペルマン<<が組み、キリト君とリン君が組む……どうかな？」

その言葉を聞いた途端、キリトの腕の中にいたアスナが首を振った

「だめよキリト君、リン君……！あなたたちを排除する気だわ……。今は……今は引きましょ……！」

確かにそれがベストだろう。だが……

「「ふざけるな……」」

こいつだけは許せない。育ててきただと？俺たちの命を何だと思っ
ていやがる。俺たちが命をかけて戦ってきたのを嘲笑うかのような

発言を俺は到底許すことなどできない

「いいだろう……」

「決着をつけよう……」

「キリト君っ、リン君っ……!!」

「ごめんな。ここで逃げるわけには……いかないんだ……」

「ああ……こいつだけは許せない」

アスナは涙を流していた

「死ぬつもりじゃ……ないんだよね……?」

「ああ……。必ず勝つ。勝つてこの世界を終わらせる」

「言っただろ?俺は死なないと」

「解った。信じてる」

キリトはアスナの体を床に横たえさせて立ち上がる。そして、俺の横に並ぶと両手で二本の剣を抜き放つ。俺もそれにならい、腰から二本の剣を抜く

「キリト!やめろ……っ!」

「リン……ッ!」

声を出したのはエギルとクライン

「エギル。今まで剣士クラスのサポート、サンキューな。知ってたぜ、お前が儲けのほとんど全部、中層ゾーンのプレイヤーの育成につきこんでたこと」

キリトがエギルに話しかけている間に俺はクラインに話しかける

「クライン。あの時は、世話になった。おまえがあの時俺を復活させてくれなかったら、俺はこの場に立っていることができなかった。……感謝してる」

クラインは両目からかなりの量の涙を出しながら叫んだ

「て……てめえ！リン！詫びいれてんじゃねえ！今詫びいれんじゃねえよ！！許さねえぞ！ちゃんと向こうで、メシのひとつもおごってからじゃねえと、絶対ゆるさねえからな！！」

現金なやつだと微笑み呟きながら俺は茅場に向き直る

「……悪いが、一つだけ頼みがある」

「何かな？」

「簡単に負けるつもりはないが、もし俺たちが死んだら……しばらくでいい、アスナが自殺できやいように計らってほしい」

「ついでに、アスナが快適に生活できるようにもして欲しい」

「良からう。彼女はセルムブルグから出られないように設定し、定

期的にコルを支給しよう」

「キリト君、リン君、だめだよーっ!!そんなの、そんなのないよーっ!!」

アスナの絶叫が響くが俺もキリトも、もう振り返らなかつた。茅場がウィンドウを操作すると、俺、キリト、茅場、モンスターのHPがレッド直前、強攻撃のクリーンヒット一発分のHPに調整された。ついでに、茅場の頭上に【changed into mortal object】：不死属性を解除したというシステムメッセージが表示される。茅場は操作を終えると長剣を抜き、十字盾の後ろに構えた。同時に>>ドツペルマン<<も茅場と同じ構えを見せた。キリトは茅場に俺は>>ドツペルマン<<。口には出していないが、目でその事を決め、それぞれ向かいあつた。そして……

「殺す……っ!!」

そのキリトの言葉とともに両者は動き始めた

ボス戦と……（後書き）

蕾姫「リンは忙しいので一人でお送りいたします。次でS A O編はラストになります。でリンの現実世界の話となつて、A L Oという流れになります。つきましてはリンのA L O内のキャラは次のどれがいいですか？」

- ・シルフ
- ・ウンディーネ
- ・ケットシー
- ・インプ
- ・スプリガン

蕾姫「投票お願いします」

最終決戦と未来へ……（前書き）

SAO編の最後です

最終決戦と未来へ……

短い呼気とともに飛び出した俺は、挨拶代わりの右手からの突きを放った。>>ドツペルマン<<は左手の盾でガードすると、右手の剣で袈裟斬りを仕掛けてくる。俺はそれを左手の剣で弾くと右手の剣を叩きつけようとした。それに反応した>>ドツペルマン<<は盾で弾こうとするが、当たる直前、右手の剣を引き二本の剣で斬りつけた。>>ドツペルマン<<は完全にはかわせなかったようで、ダメージが入ったが本当に少した。お返しとばかりに>>ドツペルマン<<は猛然とラッシュを仕掛けてきた。二本の剣で弾く。そして隙をみて反撃するが、全て弾かれる。どうやらユイのようなAIを持つているようで、先ほどのフェイントはもう効かない。それならば茅場の記憶も持っているだろう。全てのソードスキルは読まれると見ていい……たからこそ、勝機はある！

俺は右手の剣で水平四連撃>>バーチカル・スクエア<<を放った。>>ドツペルマン<<がにやりと笑った気がした。しかし、にやりと笑い返してやった。すると>>ドツペルマン<<は戸惑ったような表情を見せた。もちろん、この間も手は止まっていない。そして、>>バーチカル・スクエア<<の最後の一撃。それから意識を外し、左手に意識を集中させる。相手も動きだす。>>バーチカル・スクエア<<後の硬直時間を狙った完璧な一撃。普通のプレイヤーならば不可避だろう。普通ならば。必殺だった一撃は俺の右手の剣にあたり、右手の剣を砕いた。だが俺は止まらない。左手の剣で単発重攻撃>>ヴォーパル・ストライク<<をソードスキルを放って硬直中だった>>ドツペルマン<<に叩きこんだ。>>ドツペルマン<<は無数のポリゴンになり爆散したときには俺はもう駆け出していた。キリトはその時二刀流最上位剣技>>ジ・イクリプス<<を放っていた。連続二十七回攻撃だが……

「それはダメだ！」

剣技をデザインしたのは全てやつだ。ならばどこに来るのかも全て読める。読めるといふことは、防げるということだ。俺の言葉にキリトは、はっ、としたような表情をした。茅場は勝利の笑みを浮かべていた

「さらばだ……キリト君」

やつが放ったソードスキルは盾と剣の二連撃、神聖剣上位剣技>>ホーリー・ティアー<<。その時キリトと茅場の間に割り込む影……アスナか……全く、俺もアスナも損な役割だよな

「アスナ、リン……何で……」

簡単に言つと茅場の放ったソードスキルを俺とアスナが体で受けた。もちろん、HPは吹っ飛び、倒れこむ

「約束……守れなかった……すまない」

それを言つて、俺の意識は暗転した

.

.

再び、周囲が色づいて行く……あれ？俺は死んだはずじゃ？足元には分厚い水晶の板があった

「……リン」

「……リン君」

呼ばれたのでそちらを向くとキリトとアスナがいた

「ここはどこだ？死後の世界か？SSSに勧誘しに来たのか？」

滅多にしないボケをかましている時点でかなり混乱しているのはわかるだろう

「アインクラッド……」

キリトとアスナの視線の先にあったのは巨大浮遊城だった。それを見ているとアスナが抱きついてきた。キリトに目を向けると苦笑いだった

「あ……」

城が崩れ始めていた。赤い雲海に城の全てが崩れ、落ちてい。懐かしい場所や、死にかけた場所など、といった場所も差別なく崩れ落ちていく。アスナは、俺から離れキリトと俺の腕を脇に抱え無言で崩壊する様子を見始めた

「なかなか絶景だな」

傍らから声が出たので俺らは視線をそちらに向けると白衣姿の茅場晶彦がいた。怒りや憎しみは不思議と感じなかった。それはキリトとアスナも同じだったようで、茅場から視線を外すと再び巨城に目を向けた。やがてキリトが口を開いた

「あれは、どうなってるんだ？」

「比喩的表現……と言うべきかな。現在、アーガス本社地下五階に設置されたS A Oメインフレームの全記憶装置でデータの完全消去作業を行っている。あと十分ほどでこの世界の何もかもが消滅するだろう」

「あそこにいた人たちは……どうなったの？」

「心配には及ばない。先程……」

茅場はウィンドウを開き眺めて言った

「生き残った全プレイヤー、6147人のログアウトが完了した」

キリトは一度強く目をつむると、口を開いた。目には光るものがあった

「……死んだ連中は？一度死んだ俺たちがここにこうしているからには、今までに死んだ四千人だって元の世界に戻してやることできるんじゃないのか？」

「命は、そんなに軽々しく扱うべきものではないよ。彼らの意識は

帰ってこない。死者が消え去るのはどこの世界でも一緒さ。君たちとは、最後に少しだけ話をしたくて、この時間を作らせてもらった」それが四千人を殺した人間の台詞か？と思ったが、俺は別の質問をした

「なんで、こんなことをしたんだ？」

茅場は苦笑を洩らすとしばらく考えて言った

「なぜ……、か。私も長い間忘れていたよ。なぜだろうな。フルダイブ環境システムの開発を知った時……いやその遙か以前から、私のはあの城を、現実世界のあらゆる枠や法則を超越した世界を創り出すことだけを欲して生きてきた。そして私は……私の世界の法則をも越えるものを見ることができた……」

某全身剣さんが聞いたら、それは心意だと言いそうだ……某全身剣さんって誰だろう？

「子供は次から次へといろいろな夢想をするだろう。空に浮かぶ鉄の城の空想に私が取りつかれたのは何歳の頃だったかな……。その情景だけは、いつまで経っても私の中から去ろうとしなかった。年を経るごとにどんどんリアルに、大きく広がっていった。この地上から飛び立って、あの城に行きたい……。長い、長い間、それが私の唯一の欲求だった。私はね、キリト君、リン君。まだ信じているのだよ……。どこか別の世界には、本当にあの城が存在するのだと……」

「ああ……。そうだといいな」

アスナに続いて、俺もうなずく。あの城は俺にとっての自由の象徴。

あの城は俺を変えてくれた……

「……言い忘れていたな。ゲームクリアおめでとう、キリト君、アスナ君、リン君」

茅場は穏やかな表情で俺たちを見下ろす

「……さて、私はそろそろ行くよ」

その言葉を残し、茅場は消えていった

「……お別れだな」

そう言ったキリトの頭をはたく。キリトは、え？って顔をしている。アスナは小さく首を振った

「ううん、お別れじゃないよ。私たちは一つになって消えていく。だから、いつまでも一緒」

「さて……俺は一人寂しく……」

キリトとアスナに頭をはたかれた

「何言ってるんだ。リンも一緒だろ？」

「新婚気分の夫婦の間に入る勇氣はねえよ……まあ、それも悪くない」

俺たちはほほえみあう

「ね、最後に名前を教えて。キリト君とリン君の、本当の名前」

キリトが思い出そうとしているので、それに苦笑しつつ口を開いた

「鈴木燐。それが俺の本当の名前だ。多分今は十七歳」

「桐ヶ谷……桐ヶ谷和人。多分先月で十六歳」

「すすき……りん君ときりがや……かずと君……」

口調がゆっくりになった。まるで魂にでも刻み付けているように

「キリト君、年下だったのか……。わたしはね、結城……明日奈。十七歳です」

……結城？聞いたことあるがどこだったか……。そんな思考をしていると明日奈が俺とキリトに抱きついてきた

「わたし、幸せだった。和人君と会えて、燐君と会えて……。ありが

とう……和人君……愛してます……。燐君……大好きだよ……」

俺には明日奈に返す言葉が見つけれなかった

俺たちは抱き合ったまま光の粒子となり消えていく……

目が覚めるとそこは病院だった。俺は死んだはずじゃ……と思ったが、次の時には、そうか、茅場は生かしてくれたか……に変わった。俺が生きているということは、キリトもアスナも生きているということだ。長い間寝たきりだった影響か、体に全く力が入らなかった。それでも、一步を踏み出そう。新たに始める人生。全てを取り戻し、夢に向かって歩きだすために。その時、病室の扉が開き、黒髪の眼鏡の女の子が目には涙をためながら飛び込んできた

最終決戦と未来へ……（後書き）

蕾姫「完結！！とは行きません。次は日常編です」

リン「生き残れたんだな……」

蕾姫「番外編をやるのかな？」

リン「えっ……」

蕾姫「一つ前のあとがきのアンケートに答えてねー。よろしくお願
いします！」

現実と看護（前書き）

父親うぜーとか思いながらお読みください。シノンのキャラが崩壊しております

現実と看護

現実世界に戻って最初に見た顔、それは黒髪に眼鏡、そして目に涙を溜めた少女、朝田 詩乃だった。今は抱きつかれているが、正直寝たきりだった俺にはつらい

「……生きてて……よかった……」

「詩乃……ただいま」

「おかえりなさい……」

詩乃はそう言って放してくれた。久しぶりに見る詩乃の笑顔は可愛かった。そんなことを思っていると、突然背筋が凍ったような気がした。懐かしい感覚。アインクラッドで何度も感じた冷たい感覚……そう、殺気を

「……どうしたの？」

俺の様子を不審に思ったのか詩乃が訊ねてきた

「……いや、何でもない」

詩乃を心配させないように俺は笑顔を作りながら周囲をうかがった

「……………そうか」

詩乃の話を知ると、俺の両親は今日本に居るらしい……………そろそろ来るころかなと思つたところで扉が開き、二人の人間が入つてきた……………しまつた、フラグだつたか。とにかく、俺の両親が入つてきた

「……………よくもぬけぬけと生きて帰つてきたものだな」

「そんな言い方はっ!!」

「いや、良いんだ詩乃」

「でも!!」

俺が首を振ると詩乃は黙り込んだ。俺の父親は、詩乃を見ると呟いた

「ふん。殺人者が……………」

「貴様……………その台詞を撤回しろ」

「なぜ撤回しなければならぬ？事実を述べただけだろう？」

「貴様は、詩乃の気持ちを考えたことがあるのか!!」

「そんなこと……………どうでもいい。とにかく、お前はすぐにその殺人者との関係を断て。わかつたな」

「……断る……」

「何？」

「断るって言ったんだ。詩乃は俺の支えになってくれた。貴様が奪ったもの……安らぎをくれた。だから、何と言われようと詩乃は放さない！」

……後から考えると、これって告白じゃね？

俺のことはいいが詩乃のことを悪く言うのは、許さない。うつむく詩乃。俺の服の袖を強くつかんでいる。そしてやつは再び俺の方を向き口を開いた

「口のきき方に気をつける。……どうやら、教育が足りなかったようだな……いや、ゲームの中で忘れてしまったのか？まあいい。退院したら、自由はないと思え。私の後継者となるにふさわしい人物にしてやる」

そう言っつて父親は出て行った。そして、残ったのは母親だった

「生きてて、よかった……」

「は？」

……おかしい。俺の母親は俺に厳しく、縛り付けてきていたはずだ。そんな人から心配の言葉が出るなんて……

「あなたがゲームから出てこれなくなったとき、私はあなたにつら

くあたってしまったことをとても後悔したわ……」

……分からない……何で今さら親の顔をしてるんだよ

「出ていけ……出ていけよ！」

「すぐにはわかってもらえないかもしれないけど……」

そう言って母親は出ていった。正直、どうしていいのかわからなかった。だから、剣呑に追い出してしまった

「燐……」

詩乃が心配そうにつぶやく

「大丈夫だ。とりあえず、体を動かせるようにしないとな」

「うん……そうだね。とりあえず、体を拭かないと」

「あの……それは看護師さんにまかせればいいのでは……？」

「……嫌なの？」

「嫌ではない、むしろ嬉しいけど……」

「じゃあ、いいよね」

そういつて詩乃は俺の体を拭き始める。まわりの目が生暖かいんだが……。その後も詩乃は俺の世話をやりたがり……看護師たちの間で、俺と詩乃は有名になった。母親が持って来てくれたパソコンを使い、極めて不本意だが父親の会社の権限を利用し、キリトたちの

リアルの住所、携帯番号などを調べあげた。まだ、連絡とかはしてないが、まあ落ち着いたらしようと思う。今は詩乃についてもらってリハビリ中である。多少は歩けるようになったが、体力の低下はどうしようもないな……。詩乃は甲斐甲斐しく世話をしてくれるが……。これがまた恥ずかしい……。あーん、とかやってくるんだぜ？……。今、リア充とか言ったやつ。今度剣で語り合う必要があるみたいだ

「朝田さん。今日の面会時間は終わりですよ」

詩乃は面会時間ギリギリまで俺の病室にいる。看護師たちともすっかり顔馴染みになり、看護師たちもこちらを見て微笑んでいる。今日は婦長さんが、若いっていいわねって言ってました。……。羞恥プレイか？

「はい、わかりました。じゃあ、また明日ね、燐」

「ああ、また明日」

明日は月曜日。学校に行くらしい。……。虐められてなければいいがな

さらに、一週間後。すっかり、体は元に戻り（多少筋力は落ちたが）俺は、かなりの羞恥に対する耐性を得て退院した。母親が父親を説

得し、数週間の猶予をもらっただけ。退院したとき、病院の入り口で詩乃は待っていてくれた

「退院おめでとう」

「ありがとう……詩乃のおかげだよ」

「どういたしまして……ねえ」

顔を真っ赤にして何かを言おうとする詩乃

「明日さ、暇だったら遊園地に行かない？」

俺は鈍感ではないので、顔を真っ赤にした女の子がどこかに誘おうとする意味はわかる。つまり……詩乃は俺のことが好き？……ってことかな。そんな思考をしつつ、とりあえず聞いてみる

「それって、デートのお誘い？」

「……っ！！」

ボンと音が聞こえてきそうなほど顔を真っ赤にする詩乃……やっぱりそうなんだな……すげえ嬉しいんだが

「私のこと嫌い？」

「嫌いなやつは隣の側になんかいないよ。明日だな？何時にどこ集合だ？」

頭をぼんぼんとたたく。以前は何かあるたびに、殺人者だから……って言っていたのでそのたびに一時間ほど説教してやったものだ……

懐かしい

「じゃあ、明日の朝10時。近くの駅前で……どっ？」

「じゃあ、それで。今日はどっする？」

「えっと……今日は……って体はいいの？」

「おかげさまで」

「じゃあ、買い物に付き合ってくれる？」

上目遣いでチラチラ見てくる詩乃

「了解。じゃあ、一旦家に帰ってからな。場所は、駅前でもいいな？」

「うん！」

楽しそうに歩く詩乃とわかれ一人家路についた。粘つくような殺気を感じながら……

現実と看護（後書き）

蕾姫「恋愛とか……無理」

リン「恋愛したことないからな、お前」

蕾姫「ほっとけよ」

リン「デート編とか、書けるのか？」

蕾姫「他の小説を参考に書いてみるよ……それよりも」

リン「うわっ……何？」

蕾姫「検定作ってみました。<http://kantei.am/385858/>」

リン「宣伝かい……」

蕾姫「こんな作者が書く小説ですが、これからもよろしくお願いしますー！」

買い物と壁男

あの後、一旦家に帰り（両親はいなかった）俺は駅前に行った。すると、詩乃はすでに来ていた。というわけで観察することにする。

詩乃は持っている文庫本を読みつつ、しきりに時計に目をやる。服装は……作者が服のことは全く分からないので勘弁してくれ……まあ、行くか

「やあ、詩乃。待ったか？」

後ろから近づき肩を叩くと、驚いた様子で文庫本を閉じ、ついで嬉しそうに笑顔を見せ、最後に恥ずかしそうに顔を赤らめた

「ううん。私も今来たところ。じゃあ、行く」

詩乃は顔を見られたくないのか、俺の手を握ってずんずん歩いていく

「……………」

「……………」

電車内では、話題がないのでどちらとも沈黙していた。これではいけないと思つて、とりあえず話しかけようとする

「「ねえ」「」

……ギャルゲのイベントだろうか？見事に重なつた

「詩乃からでいいよ」

「うん……………」

気合いを入れるためか、一度うなずくと詩乃は口を開いた

「あの時……………燐の言葉つて……………どついう意味？」

あの時……………父に向かつて言つた言葉だよな……………

「それについては、明日まで待つてくれ」

すると詩乃は期待と不安の入り交じつた顔をした

「もう一つ聞きたいんだけど……………」

詩乃は何かを言い掛けるがためらつような素振りを見せた

「SAOについてならいいぞ。でも、何で？」

凶星だったらしく、顔を俯ける

「あの世界で何をしてたか、隣のこともっと知りたいから……」

「……わかった。まず、閉じ込められたときに思ったのは、解放感だったよ。これで、親の重圧から逃れられるってね」

「あんな人だからね……」

詩乃は苦笑まじりに言った

「しばらくは、そんな気持ちのまま戦ってたんだが、ある日あった
プレイヤーと話しててな。まあ、その時初めて現実に帰りたいと思
ったな」

……詩乃のことが心残りだったからな、と続けると顔を真っ赤にした

そんなことを話しているとどうやら目的の駅についたようだ

詩乃の希望で服屋へ。選んで欲しいらしいが、俺は服についてはわ
からんからな……

「これはどし？」

というわけで詩乃が選んで俺が評価するという形をとった

「いいんじゃないかな」

どんな服かって？……まあ、似合ってたよ

服の説明なんて俺には無理！by作者

「じゃあ、これを買おうかな……」

レジに持っていこうとした詩乃からその服を取り上げ、俺が持つていく。俺が財布を取り出すと

「私のだから、お金は私が……」

「詩乃は家計がヤバんじゃないのか？」

少なくとも最後に会ったときはそうだった

「そうだけど……」

「看護のお礼だと思って、今日、明日は俺に奢らせてくれ。そうじゃなくて、女性に払わせるようなことはできないしな」

「……ありがとう」

赤面……可愛いな……軽く変態になってないか、俺？

「次はどこに行きたい？どこでもいいぞ？」

しばらく、考え込む詩乃。やがてニヤニヤしながら口を開いた

「じゃあ、ラン……」

「却下」

「……どこでもいって言ったじゃん」

二文字目で内容を察し、却下する。わかるだろ？男子諸君。ラブコメで有りがちなあそこだよ

「あそこは男は入れない場所だ」

「……じゃあ、喫茶店でも」

「了解。ならいい場所がある」

ちよっとむくれている詩乃を馴染みの喫茶店に連れて行った

以前小さい時、両親に反抗して家を飛び出したとき偶然見つけた喫茶店に入る。もちろん、その家出のときは入らなかつた。中学生になつてから、改めて行ってそれから常連になつただけである。カランカランと扉に付けられた鐘が鳴る

「いらつしゃい」

……あれ？マスターが変わってるし、見間違いかな……エギルがいるように見えるんだが……というわけで一旦外に出る

「どうしたの？」

「知り合いがいたような気がしたんだが……」

「常連ならマスターとは知り合いなんじゃないの？」

「いや……マスターが変わってた。のにも関わらず……」

言い掛けたその時、扉が開いた

「よう、リン。久しぶりだなあ」

ハゲの頭。巨大な体躯。SAO内となんら変わらないその顔は間違いないなくエギルだった

「よう、エギル。久しぶりだな」

……笑顔でこたえる俺

「笑顔、引きつつてるぞ」

「当たり前だろ？いきなり会いたくないやつに会ったんだから」

「……相変わらずだな、リン……」

ちよつと肩を落とすエギル

「えっと、この人は？燐」

詩乃が訊ねてくるが……顔が引きつつてるぞ詩乃

「……The 壁」

「おいおい、俺は壁かよ！？俺にはアンドリュー・ギルバート・ミルズって言うママにもらった名前が……」

「それは、俺に言つなよ……」

「おっと、そうだった。アンドリュー・ギルバート・ミルズです。以後お見知りおきを」

「そういえば、俺も名乗ってなかったな……鈴木 燐だ。はじめまして、エギル。んで、こっちは朝田 詩乃だ」

「朝田 詩乃です。よろしくお願いします」

はじめましてって何か変だな……リアルで会うのは初めてだからあながち間違いではないが

「燐よ……彼女はコレか？」

エギルは俺の肩に腕を回すと反対側の手の小指を上げて聞いてきた

「友達以上、彼女未満つてところかな……」

「お前にも春が来たか……いや、めでたい。今日は客として来たのか？」

「ああ……」

「じゃあ、ゆっくりしていつてくれや」

エギルはカウンターに戻る。俺らはカウンターのスツールに並んで座る

「エギル、俺はブラックで。詩乃はどうする？」

「私もブラックで」

「あいよ」

エギルがコーヒーを淹れてくれる

「そついや、燐。おまえの連絡先を教えてくださいんか？」

「了解」

携帯の番号を交換する。コーヒーを飲みおわり

「し馳走さま。いくらだ？」

「ここは、俺の奢りにしといてやるよ」

詩乃を見てニヤリと笑うエギル

「サンキュー……じゃあな」

「おう」

手を振ると詩乃を連れて店を出る

「何か……顔と言葉のギャップが……」

「それはわかる……」

外に出ると空が赤く染まっていた

「じゃあ、また明日な」

「うん、楽しみにしてる」

今日はおつそろそろ帰らないと行けないので、帰ることに……。明日が楽しみだ

デートと遊園地

次の日の午前10時五分前に駅前についたが詩乃はまだ来ていなかった。ネットで接続しVRMMOについて調べていた。今、人気なのはALOなのか……。と考えつつ各キャラの特徴等を見てみると肩をたたかれた。顔をあげるとそこには詩乃がいた

「お待たせ……何してたの？」

「いや、何でも」

「ふーん……」

この話題を引つ張られるとまずいと思ったので話題を変えようとした

「その服、似合ってるね」

昨日俺が買ったやつだった

「ありがとう……」

恥ずかしそうに目をそらす詩乃

「じゃ、行くつか」

「うん……」

顔を赤らめながらも腕に抱きついてくる。さすがに突然だったのであせる。それに……。当たるんだが……。まあ、言っつてほど野暮で

はないが

電車の中は割愛するとして俺たちは遊園地の中に入った。VRMMOが流行っており遊園地の人気は多少衰えたものなおも根強い人気を誇っている

「まずは、どこに行くの？」

詩乃の言葉で現実に引き戻された。最近、思考の泥沼に入り込むことが多いなと苦笑しつつ口を開く

「まずは、ジェットコースターでもどうだ？」

どうでもいいことだが、俺は絶叫系が大好きだ。スピードホリックとまでは行かないが風を感じられるから絶叫系にはよく乗っていた。過去系なのは、両親に束縛されていたのであって……

「……ん君……燐君！」

「……ん、何？」

また思考の泥沼に……

「また、ぼーっとしてる……つまらないの?」

「いや……また現実で詩乃と一緒に歩けるのが嬉しくて感慨に浸ってただけだよ」

嘘も方便って言うだろ? そう思っていたのは本当だが

「なっ……そ、そう……」

不意打ち気味に言ったから、詩乃は真っ赤になってうつむいた

「では、どうぞ」

ジェットコースターの順番が来たので俺らも乗り込む坂を登っていくにつれて、怖くなってきたのか詩乃は、俺の服の袖を掴んできた……そして

「きゃあああ!」

「……………」

詩乃が盛大な悲鳴を上げる。俺? 終始無言でした。この程度のスピードではまだまだだと考えながら

「怖かったね」

「そうだな」

詩乃がそう話しかけてきたから話を合わせる。時間が大体昼過ぎに

なつたので、飯にするか……

「昼ご飯、どうする？」

「ねえ……」

手を組んでもじもじとしている詩乃

「どうしたんだ？」

「弁当作ってきたんだけど……」

……遊園地は飲食物持ち込み禁止なのを詩乃は知らなかったのだろ
うか？……さて困ったぞ

「じゃあ、とりあえず場所を探そうか」

……言えるわけないだろ？期待と不安の入り交じった顔をしていた
詩乃に

何というか、最近の遊園地は飲食物持ち込みいいんだな……持ち込
み可って書いてある看板がたっていたレストランがあったのでそこ

に入って飯を食べる……正直言うと恥ずかしかった。だって、人前にも関わらず、あーんとかしてくるんだぜ？何？描写が無いって？そんな作者に言ってくれ

俺には書けません by 作者

その後も、いろいろなところを回った。お化け屋敷とかジェットコースターとかジェットコースターとか。お化け屋敷では、詩乃は元々怖くないみたいで、全く怖がらなかった。俺はソードアート・オンライン内で化け物をなぎ倒してきたから当然怖くなかった。ともあれ、時間はもうすぐ閉園。昔はパレードとかあったみたいだが、最近では無くなった

「詩乃、最後はどこに乗りたい？」

「じゃあ、観覧車かな？」

……テンプレだな

「わかった。じゃあ行くこうか」

観覧車に乗り込んだ俺たちはしばらく無言だった。しばらくして詩乃が口を開いた

「今日は楽しかった？」

「ああ……もちろんだ」

「私ね。燐が>>ソードアート・オンライン<<に閉じ込められたときにね。とても後悔したんだ……」

「後悔？」

「そう。私が殺人を犯したと知っていて、話しかけてくれたり、一緒にいてくれたのは燐が初めてなんだ……。燐と話すと心が暖かかった。一人でいるとき、ふと気が付くと燐のことを考えているんだ。で、気付いた。私は燐が好きなんだって」

「詩乃……」

俺が話しかけようとする時詩乃は手で制して先を続ける

「燐は……ほら、望んでいなくても大企業の一人息子。>>ソードアート・オンライン<<で多少つまずいたかもしれないけど、将来の幸せは約束されている。なのに私みたいな殺人者が好きになっちゃいけないってずっと思っていて、気持ちを打ち明けられなかった。ずっと側で見ていられるだけで幸せだったから……でも、いなくなるかもしれない状況になったとき、この気持ちを抑えられなくなりました」

詩乃苦笑混じりにそう言う時一旦言葉を切り、目を閉じた。そして、また目を開けると続けて言った

「ずっと、好きでした。付き合ってください」

「俺は……」

答えは決まっていた。もちろんYES。それを伝えようと口を開くが、止められた

「今は、答えを言わないで。YESでもNOでも泣いちゃいそうだから……でも……」

その時、俺たちの乗っているのが丁度観覧車の頂点についた。唇に感じた柔らかい感触。それが詩乃の唇だとすぐには気づけなかった

観覧車の残り半分の間、俺たちは無言だった。俺は、唇の感触に浸っていて……柔らかかったな……って何考えてんだ！？詩乃は恥ずかしそうに下を向いていた

「じゃあ……またね。答えは……いつまでも待つから……」

門を出ると詩乃はそう言った走って行った

俺は帰り始めたがその時、携帯が鳴った。ディスプレイにはエギルと表示されていた。それは新たな世界の始まりを告げる電話だった

デートと遊園地（後書き）

蕾姫「俺には恋愛は無理だ……」

燐「……」

詩乃「……」

蕾姫「……見つめあったまま真っ赤になってるし……主人公のアバターが決まっています。一票で三つが並んでいます。まだ投票してない人は、シルフ、スプリガン、インプ、ウンディーネ、ケットシーの中から投票してください。お願いします」

番外編? : 時を越えた邂逅(前書き)

一応五万PV突破記念です

アクセル・ワールド10巻でアクセル・ワールドxソードアート・
オンラインのコラボやるみたいですね!楽しみです

番外編? : 時を越えた邂逅

蕾姫「というわけで、バトってもらいます」

リン「どういう繋がりからというわけ、なんだ？」

烏「あははは……」

蓮「ふむ……面白いじゃないか」

キリト「……いいのか？」

アスナ「どうせ、やらないって言っても……ねえ」

蕾姫「もちろん。当たり前！」

シノン「……はあ……」

杭「まあ、いいんじゃないかな？」

鈴「気になってるんだけどさ。何であたしたち>>ネガ・ビュラス<<のメンバーの名前は漢字一文字なのかな？」

蕾姫「おまえら……名前長いからな。わからない人のために、説明！ アクセル・ワールドより、? ブラック・ロータス、以後蓮。手足が剣。近接型だが、遠距離型としても優秀。オールラウンダーだが、今回はフロントアタッカー? シルバー・クロウ、以後烏。極近接型。羽があり飛べる。空中からの攻撃を得意とする。フロントアツカ―? シアン・パイル、以後杭。アバターは近接型ながら遠距離の武

器を持つ。オールラウンダーだがセンターガード？ライム・ベル、以後鈴。時を戻す能力持ち。ポジションはフルバック。次に、ソードアーツ・オンライン側。？リン。武器は双剣。超近接型。フロントアタッカー。？アスナ。武器は杖時々細剣。オールラウンダー。杖の時はフルバック。細剣の時はセンターガード。？シノン。武器は狙撃銃または弓。超遠距離型。武器がどちらの時でもガードウイング……まあ、こんな感じ。ポジションの名称はなのはから持ってきました」

黒雪姫「ルールは何だ？」

蕾姫「時系列はどちらも最新巻。場所はALO内。SAO陣は飛行禁止。スタート地点は、SAO陣がシルフ領の>>風の塔<<。アクセル・ワールド陣がサランダー領のシルフ領に一番近い端。時間は無制限。どちらも助っ人はありなので……誰が来るかは楽しみで。では、行ってらっしゃい」

回廊結晶を二つ発動させ、チームを飛ばす

くアクセル・ワールドSideく

蓮「ふむ……」

烏「どうしました？先輩」

目の前の森を見て腕を組むロータスにクロウは話しかけた

蓮「この世界も興味深いと思ってな……とりあえず作戦を決めよう」

鈴「作戦なしで突っ込んだじゃえば？」

その時、空間が光りだす

蓮「敵かつ!!」

光の中から現われたのは……

蕾姫「俺っ、参上!!」

ただのアホ（作者）だった

蓮「……作戦を決めるぞ」

蕾姫「ちよっ、ウェイ、ウェイ、ウェイ！無視するなよ」

蓮「……チツ。何しに来た」

蕾姫「今、舌打ちしたよね!?!……まあ、いいや。わからないことがないか、聞きにきたのと、ルールの追加について」

蓮「聞きたいことは特にないが……」

釘「ルールの追加とは？」

蕾姫「俺も戦いたいんだ!!だから、鬼役として俺も出る!!」

鈴「うわー……子供っぽい……」

蕾姫「ほっとけ……俺は、いろいろなアニメの技を使っぜ!助っ人は、一人呼べるし」

釘「いわゆる、チートというやつですね」

蓮「……正々堂々やらないか!!」

蕾姫「俺を倒せば、無条件で勝利になるぞ？威力は、下げるし」

ドラゴンボールとかチートすぎんだろ

蓮「まあ……」

烏「それなら……」

蕾姫「じゃあ、決まり。SAO陣にも伝えてくるから……ノシ」

〈ソードアート・オンライン陣〉

アスナ「キリト君、リン君。作戦は？」

キリト「リン……」

リン「ああ……」

キリト・リン「真っ正面から行ってたたき斬る!!」

シノン「あなたたちバカでしょ」

シノンに冷静なツッコミを受けて撃沈する二人

アスナ「あははは……」

笑っていたアスナだがとりあえずフォローしないと話が進まないの
で間に入る

アスナ「とりあえず、シノンさんは後方支援でいいんだよね？」

シノン「そう……っ!？」

その時、目の前に光の渦が現れる。彼女らには見慣れた光景。つま
り転移だ。出てくるのはもちろん……

蕾姫「俺っ!!参ぶるああ!？」

途中で止められた。誰かを見極めた瞬間シノンが放った銃弾によって

神は言っているここで死ぬ(r y

蕾姫「なぜ、撃った!？」

シノン「そこに蕾姫がいるから」

蕾姫「どこの登山家!？理不尽にも程があるから!？」

リン「まあ……作者だし……」

キリト「……確かに……」

蕾姫「泣いていい!？泣くよ俺!？」

アスナ「えーと……大丈夫？その……」

蕾姫「アスナ……君だけだよ……俺を心配してくれるのは」

アスナ「……頭」

蕾姫「……もういいや……」

リン「で、何か用か？」

蕾姫「ルールの追加で、俺がバトルに参加することになりました……」

キリト「そうか……わかったから、帰りな？」

蕾姫「……はぁ……」

（森上空）

そこには作者が拡声器を手につかんでいた。ちなみにゼロ魔のレベル
レーションで浮いているのである

蕾姫「では始めます！スタート！！」

そう言って戦いは始まった

番外編? : 時を越えた邂逅(後書き)

蕾姫「俺の扱い酷い……」

シリカ「……ドンマイ……」

蕾姫「はあ……気を取り直して、助っ人は誰がいいですか?俺が知らないキャラは使えませんが……基本的にどんなアニメのキャラでもかまいません。あと、主人公の親、須郷、恭二、の処遇はあなたならどうしますか?募集しますので、コメントお願いします!」

番外編? : 時を越えた邂逅

蕾姫「では始めます!」

その声はシルフ、サラマンダー領中に響き渡った。といつても、プレイヤーは蕾姫も含めて9人しかいないのだが

〈ソードアート・オンラインside〉

キリト「よし、行こうか」

リン「そうだな。地の利はこちらにあるし、索敵をしながら注意して行こう」

アスナ「私は二人の後ろ。シノンさんは、後方から姿を隠しながらね」

シノン「了解……。リン、ちなみにどっちを狙うの?」

つまりシノンが言いたいのは蕾姫を狙うのか、アクセル・ワールド陣を狙うのかということだ

リン「決まってる。蕾姫だ。あの腐れ作者は潰さないと気が済まない」

だよな、とキリトも同意する

アスナ「でも……。絶対強いよね?」

リン「まあ……勝てるだろ……」

何とも楽観的なセリフである。説得力の欠片もなかった

（アクセル・ワールドSide）

烏「ここ凄い自然ですね」

当たり前だ。クロウことハルユキは東京在住。しかも科学がさらに発展した東京。自然なんて、鉢かコンクリートで囲われた木や花しか見たことがないのだろう。彼らが戦う加速世界は、リアルと同じ形状なので空想の世界でも見ることはない

蓮「確かにすごいな……」

釘「……マスター。とりあえず目の前の戦いに集中しないと……」

蓮「そうだな。私とクロウが前に出る。パイルは援護。ベルは後ろから補助だ。ダメージを受けたらすぐに後退。回復しろ」

鈴「で、どっちを攻めるの？」

蓮「無論、蕾姫だ」

どうやら作者は嫌われものようです。この時SAO陣も同じ選択をしたことに全く気づいていない

烏「でも、なんですか、先輩？」

蓮「漢字一文字で表現したこと。なにより、名前がかぶってるのが

気に入らない！」

完全なる私怨である。黒雪姫は本名ではないはずだが？9巻にもな
って、本名が出てきていないメインヒロイン。憐れである

烏「あははは……」

釘「あははは……」

鈴「あははは……」

三人は湯いた笑い声をあげる。そして、作者に心の中で合掌する

蓮「では、行くぞ」

そう言ったロータスを先頭に森の中へ歩き出した

……数時間後

〈ソードアート・オンラインSide〉

リン「あそこにいるのは……」

リンが見たのはロータスとクロウ。そして、その後ろのパイルであ
る。まだこちらに気づいていない

リン「キリト……」

キリトはわかっているというようにうなずいた

リン・キリト「はあ!!」

リンとキリトは二刀流突撃技>>ダブル・サーキュラー<<で不意討ちの攻撃をした。ロータスは流石の反応力で、両手の剣で受け止めるが吹き飛ばされる。それをリンは追撃していく。クロウは、反応仕切れず腕を斬り付けられるがメタルカラーなので切り落とされはしなかった。パイルがクロウを助けにいこうと前にでるが、足元にシノンの銃弾が着弾した。そして、その隙に細剣を手にしたアスナが間に割り込む。自然とリンVSロータス、キリトVSクロウ、アスナVSパイルの状況になる

〈アスナVSパイル〉

アスナ「いやあ!!」

アスナの鋭い気合いとともに、細剣がパイルの体を貫く。その速さに剣道部の部員であるパイルは感心せざるを得なかった

杭「（強い。速くて正確。でも……）負けるわけにはいかない！」

パイルはそう叫んで、杭を振り回す。アスナはそれにより後退せざるを得なかった。その隙に

杭「>>シアン・ブレード<<!!」

心意技を発動した。杭は砕け散り、中から青い刃を持つ刀が現れる

杭「まだまだ、これからです」

パイルは不敵に笑う。アスナは微笑むと細剣を構える。対してパイ

ルは大上段に構える。アスナは己の真骨頂である、スピードのある剣舞を。パイルは、ごまかしなしの一撃を狙う

アスナ「やあっ!!」

まず動いたのはアスナ。敏捷補正全快でパイルに突っ込む。パイルは完璧なタイミングで振り下ろした。当たる……はずだった

杭「なっ!?!」

なぜなら、アスナが細剣でパイルの刀を弾き軌道を変えたからだ

アスナ「えいつ!」

アスナの真骨頂である高速の連撃。それがまとめてパイルにたたきこまれる。パイルは下がり、体制を立て直そうとするがアスナはそれを許さない。パイルにピタリと張りつき追撃する。パイルはダメージを無視し刀を振り下ろした。とっさにアスナは反転。下がるが、完全には交わしきれず切っ先がアスナにとっては不運なことに右腕を切り裂いた

アスナ「くっ……」

苦悶の表情を見せるアスナ。右腕は部位欠損により、数分間は無いままだ。必然的に左手で剣を持たなければならず、利き腕でないため力がでない

杭「僕の……勝ちです!」

パイルの剣閃はアスナを斬った。アスナのHPは吹き飛び、青い光がそこに残る。ふうと息を吐いたパイルは下がってベルの回復を受けようとして背を向けたその時、一発の銃弾がパイルをつらぬいた。

それによりパイルのHPは0に、最後に振り向いたパイルの目には自分を狙う銃口とシノンの鋭い目だった

シノン & ベル Side

シノンはベルに銃口を向けている。サポートを潰せば、ほぼ勝ちだからだ。だから不用意に出てきたベルを一発、撃った。それはたまたま持っていた巨大な鈴に当たり全損は免れた

鈴「……危な!？」

そう叫んでベルは飛んできた銃弾の方向からは死角となる木の後ろに隠れる。自分に>>シトロン・コール<<を使うと一息つく

鈴「……どうしよう……」

仲間を回復に行きたいが木の陰から出れば銃弾につらぬかれ、全損するのは目に見えているのでベルはその場で待機するしかなかった

シノン「……惜しい……」

ベルのいる場所から約五百メートルの崖の上にシノンはいた

シノン「どうしようかな」

シノンは動かないで考える。スナイパーは場所を知られたらアウトなのだが、他のメンバーが足止めをしてくれているからこそ落ち着いて狙撃できる。ベルは、木の陰から動かない。こちらから回り込めばいいという意見もあるが、ここは森。障害物がありすぎて狙撃には向いていない。たまたまここに絶好の狙撃ポイントがあるが、

他にいい場所があるのかを知らないシノンも動くことができない。シノンのいるところから見えるプレイヤーは五人。ベル、パイル、アスナ、リン、ロータスだ。パイルとアスナは高速戦の真つ最中。撃てば、アスナに当たる確率が高い。一方、リンとロータスはならみ合いをしている。簡単に撃てるのだが、自身の恋人の性格を考えるとそれもできない

「（俺だけにやらせてくれってね）」

クスツと笑うシノン。もちろん、視線はベルから離していない。アスナとパイルの戦いは佳境をむかえていた。アスナが右腕を斬られ行動不能に。ふう……とシノンはいきをつくるとベルを目の端にとらえながらパイルに照準を定める。そして、アスナを倒し気を抜いたパイルに必殺の銃弾を放った。こちらを見たパイルの目に驚きと称賛が込められている気がした。一度否定された、優しい世界が戻って来たような気がしてシノンの口角は知らず知らずのうちに上がっていた

番外編? : 時を越えた邂逅(後書き)

追加設定 : 倒された場合、その場に光が残る。そこで観戦。その戦いが終わったら復活します

……リンの種族についてのアンケート、答えていただけるとありがたいです。現在、インプが二票で一位。スプリガン、シルフ、ケツトシーが一票で同立四位、無票がウインデーネです。同立多いなw

番外編? : 時を越えた邂逅

キリトVSクロウSide)

キリト「一応自己紹介かな?俺はキリトだ」

クロウ「シルバー・クロウです。よろしくお願いします」

呑気に挨拶をする二人

キリト「じゃあ……始めますか」

そう言つてキリトは右手の剣の先を地面すれすれまで下げ、構える。対してクロウは、翼を広げファイティングポーズをとる。……できないが

キリト・烏「ッ!!」

動いたのは同時。お互いにトップクラスの反応速度を持つ二人。剣と拳が交錯する寸前、クロウは反転後ろに下がる。キリトの剣は空を斬る。それによりキリトの体制が少し崩れるがクロウは飛び込めない。なぜなら、キリトは二刀流。一本目は躲せてもまだ二本目がある

烏「(……一撃が遠い……)」

再び、にらみ合いになる。クロウは力ではなく策略で勝つ参謀タイプだ。空が飛べるというアドバンテージはあるが、キリトには通用しない。キリトの世界、ALOでは全員が飛べるのだ。当然、地上

においての対空中戦の方法は心得ている

烏「(なら……遠距離技で!)」

キリト「(下がるタイミング、判断力、それを実現する技術……凄いな。武器は拳。なら……押し切るまで!)」

二人の方針は決まった。二人の間に風が吹いた……気がした。次の瞬間、キリトはクロウに向かって走りだす。同時に、クロウは右手をひねって後ろに引き絞る

「ッ!?!」

キリトは背中に寒いものが走った。SAOで培った勘。それがキリトを横に飛ばせた。それと同時に……

烏「>>光線槍<<!!」

真っ直ぐ突き出されたクロウの手から光線が飛び出す。それは、キリトの服をかすり後方の木々をつらぬいた

烏「なっ……!?!」

自身の大技を躲されたからか、驚いて動きを一瞬止めてしまう。その隙にキリトはクロウに肉薄していた

キリト「はっ!!」

キリトの気合いと共に放たれる威力とスピードのある連撃。それをクロウは羽を震わせ、空中で小刻みに複雑に移動して躲していく。

が、完全に躲しきれないで小さなダメージが蓄積されていく

烏「(このままじゃ、ギリ貧だ。だったら……一撃でも!!)」

烏「はっ!」

キリト「なっ……」

クロウはキリトの剣を掴んでキリトごと投げた。クロウが斬撃に強いメタルカラーだったからできた芸当だ

烏「はあ!」

今度はクロウの連続攻撃がキリトに襲い掛かる。さっきまでとは立場が逆転。クロウがキリトを追い詰める。だが、ダメージを受けているのはクロウだ。クロウの拳と足をキリトは剣で弾いているため、仕方ないのだが

キリト「はっ!」

烏「>>光線剣<<!」

キリトは、>>ヴォーパル・ストライク<<を強引に放つ。烏も同時にレーザー・ソードを放った。似通ったモーションを経て放たれた、必殺の一撃が交錯する……ということにはならないで直接ぶつかり合う。反動で二人の間に数メートル空いた

キリト「次で……」

烏「勝負です」

パンという音（シノンがパイルを撃った音）を合図に二人は駆け出した。キリトは体をひねり、右手の剣でクロウを切り裂こうと振る。クロウがそれを許すわけもなく、拳で剣の平らな部分をたたき軌道を変える。その一撃は、キリトの後ろに流れていった

キリト「てえ!!」

一撃目を躲しても双剣のキリトには二撃目が残っている。それがクロウにたたき込まれる。その直前、全力でクロウは羽を震わせ後ろに飛ぶ。その結果、キリトの斬撃はクロウの胸に一筋の傷をつけるにとどまった。クロウはすぐに反転。キリトに向かっていく。体制を崩したキリトに反撃の一撃を打ち込む。キリトにかわすすべはなく、キリトのクリティカルポイントに直撃する

キリト「ぐっ……」

キリトのHPはイエローゾーンに突入する。そして……

キリト・鳥「……へっ?」

キリトと鳥は、さっきの攻防で場所を移動していた。崖の上に……
つまり

鳥「くっ……!!」

落ちるわけだが、クロウには羽がある。それを使い、飛ぼうとするが

キリト「一人だけずるいだろ?」

振り返ったクロウが見たのは、笑顔を浮かべながら羽をつかむキリトと迫ってくる地面だった

烏「うわっ、放してください!」

キリト「断る!」

そして、二人は漫画のように地面に人型のあとを作るのだった。もちろん二人とも高所落下ダメージで、死亡したが

↳リンVSロータス

リン「あのバカ(蕾姫)をぶっ飛ばさなきゃならないが……」

蓮「それについては、こちらも同じ気持ちだ」

二人は苦笑いを漏らす

蓮「会ってしまったからには仕方ない……手合せ願おうか」

リン「了解した」

ロータスは両手を広げ、自然体に。リンは、左手の剣を担ぐように構え、右手の剣は自分の前に突き出す

蓮「……はっ!」

ロータスが動きだす。地面を滑るように移動する。そして、ロータスはリンをクロスに斬り付ける。それに対して、リンは右手の剣ですくい上げるようにし、ロータスの右手を迎撃。左手の剣は、逆に

上から斜めに振り下ろし、ロータスの左手の軌道を強引に変える。体制を崩したロータスに追撃をする余裕はなかった。予想外に重い斬撃を受けとめたことで、動きが鈍る。ロータスは体制を立て直し、後ろに下がった

蓮「……上手いな。今の攻撃には自信があつたんだが……」

リン「それは光栄だ。しかし、あんたの斬撃も重いな」

好敵手を見つけた二人の顔はほころんでいた

リン「じゃあ、行くぞ！」

リンは二刀流突撃技>>ダブル・サーキュラー<<で突っ込む。対してロータスは迎撃の体制に。時間差で放たれる二つの斬撃をからめとるようにしてかわす。リンは、ロータスの腕を強引に弾き後ろにさがる

リン「（絡め手……力だけで打ち込めば終わりだな）」

その時、銃声が響き渡った。言うまでもなくシノンの銃弾である

蓮「（……銃はやっかいだな。まず、潰さなければ）」

リン「ふっ……！」

リンは再び斬り込む。今度は、絡みこまれないように軽い斬撃を多く繰り返し出す。ロータスは手を振り回しガードするが、躲しきれない

蓮「はっ……！」

リン「何!?!」

蓮はバック転をしながら右腕で蹴りを放つ。リンは慌て胸をそらす
が軽く当たってしまう。そして追撃に備え足に力を入れる

蓮「>>奪命撃<<!?!」

ロータスはヴォーパル・ストライクを放った。狙いはリンではなく
シノン。いきなりのものでシノンが躲せるわけがなく、シノンのH
Pは吹き飛んだ

リン「……人の彼女に手を出すとはいい度胸だな……」

そのことを確認したリンから黒いオーラが発生する

蓮「(……過度光?もしかして私は開けてはいけない箱を開けてし
まったのか?)」

冷や汗を流すロータス。そんなロータスに突っ込むリン。リンは基
本突撃技>>レイジ・スパイク<<を左手の剣で発動。ロータスは
左手で弾く。さらにリンは、意識を右手に切り替え右手で水平四連
撃技>>ホリゾンタル・スクエア<<を放つ

蓮「くっ……」

ソード・スキルを使っているため、威力が先程とは桁違いだ。絡め
とろうとしてもその動きはシステムによって固定されているためそ
れはできない

リン「でやあ!?!」

さらにリンは八連撃>>ハウリング・オクターブ<<に繋げる五連突き、斬り上げ、さらに上段斬りがロータスの体に吸い込まれる。さらに三連撃重攻撃>>サベージ・フルクラム<<を右手で発動、ロータスの両手を砕く。さらに防ぐことができないロータスに向けて左手で四連撃>>バーチカル・スクエア<<を放つ。ここまでの合計十七連撃で、ロータスのHPは一割を切っていた

リン「止め!!」

>>バーチカル・スクエア<<を放った手から意識を切り替え、単発重攻撃>>ヴォーパル・ストライク<<を放った。それは、ロータスの体の中心に突き刺さりロータスのHPを吹き飛ばした

（ベルSide）

時間は巻き戻る。ベルはリンとロータスの戦いを見ていた

ベル「（うわ……凄いハイレベルな戦い……）」

リンが撃てばロータスが絡めとりカウンターを撃つ。しかし、リンはそれをかわし、また五分に戻す。ロータスが撃てばリンは迎撃。そして反撃をする。トリッキーな手やフェイントを織り交ぜたレベルの高い攻防を繰り返す二人を呆然と見つめた

ベル「（えっ!?!）」

戦いの途中、ロータスから放たれた>>奪命撃<<がシノンに直撃

したのだ。シノンのHPが0になったのを確認したベルはロータスを回復しに行くことにした

（リンSide）

リン「強かった……負けるかと思った。他のメンバーは大丈夫か？」

ロータスを倒し、とりあえず一息つく。マップを呼び出すと、灰色に沈んでいる点が6。明るい色の点が自分を含めて2。そしてその点はこちらに向かってきている。そちらの方向を見ると、その方向にある草むららがさがさと揺れた

リン「……はー……そこにいるやつ、出てこい

（ベル& amp; リン）

ベル「……やばっ。先輩負けるじゃん。咄嗟に草むららに飛び込んだけど、ばれてないよね？」

そう思っていたベル

リン「……はー……そこにいるやつ、出てこい」

ベル「……ばれてるし」

おとなしく出てくるベル

リン「確か……ライム・ベルだったか？回復役だったな……戦う？」

回復役は基本戦えないが、アスナの例があるため一応警戒するリンベル「無理ね……先輩と対等に戦えるような人と戦ったらぷちっと潰されちゃうのが落ち。降参するわよ」

ベルが降参したので、リンをはじめとするSAO陣の目の前に”You are win”の文字、ロータスをはじめとするアクセル・ワールド陣の目の前には”You are lose”の文字が出ると思われたが出てきたのは”WARNING”の文字だった

番外編? : 時を越えた邂逅(後書き)

リンのALOでの種族アンケートに答えてください。ご協力お願いします!

・スプリガン

・シルフ

・ケットシー

・ウンディーネ

・インプ

から一つ選んでください!

番外編FINAL：時を越えた邂逅（前書き）

バトルはありません

無理矢理感バリバリですがやってみたかったです。すみません

番外編FINAL：時を越えた邂逅

リン「WORNING?何だこれ？」

キリト「大丈夫か、リン!？」

向こうから戦っていた復活したメンバーが集まってくる

烏「昔、カプコンから出てたゲームでこんな文字が出てきたな……
たしか、乱入の合図だっけ？」

ちなみに作者は双剣使いです

蓮「乱入……何が乱入してきたというのだ？」

そこにいたメンバーが全員首を傾げる

次の瞬間目の前に青い光が現れた

キリト「何か来るぞ!!！」

全員が一步下がりがり戦闘体制をとる。現れたのは………蕾姫だった

蕾姫「やつほー。待たせたな！」

段ボールを片手に抱えた蕾姫が現れた

リン「ここに来たということは、潰されに来たのか？」

蕾姫「何で君らはもつと……もういいや」

蓮「で、何をしにきた？」

蕾姫「いや……勝利チームを表彰しに来たんだが……」

手に持った段ボールから表彰状を六枚出しヒラヒラと揺らす

リン「戦う前、俺もやるとか言ってたか？」

蕾姫「それをやるというんなところから苦情が来そうだから……」

リン「まあ、パクリ魔だからな」

蕾姫「うぐっ……」

蕾姫の精神に1000のダメージ

蓮「更新も遅い」

蕾姫「それ……メタ発言だから……」

キリト「……まあ、頑張れ」

蕾姫「……逆に今のが一番痛い……」

リン「というか早く本編を執筆しろ」

蕾姫「次からALO編です。何か、ここ後書きみたいになってしまっただけ……」

キリト「雑談みたいにできるならいいじゃねえか」

鈴「あたしたちは当分出れないね……」

蕾姫「読者からの意見があったらまた出すかも？あと王様ゲームを試してみたい」

キリト「面白そうだな」

蓮「何だその王様ゲームというのは？」

アクセル・ワールド陣は知らないようだ

蕾姫「王様ゲームっていうのは、くじ引きで王様と数字を決めて、王様が数字を指定してその数字に命令できる。そして、王様の命令はあ〜」

SAO陣+蕾姫「「「「絶対!」「」「」」

蓮「面白い……やってみようではないか」

蕾姫「では、始めよう」

蕾姫は手を広げた。するとそこには1〜8と書かれた札と王様と書かれた札があった

蕾姫「せーの」

全員「王様だ〜れだ!〜!」

シノン「私か……」

蕾姫「最初はシノンか……」

リン「で、命令は？」

シノン「一番が三番に踵落とし」

蕾姫「……一番って誰？」 三番

リン「俺だ。三番は？」

蕾姫「……俺です……暴力はダメだよな？」

リン「王様の命令は絶対なんだ。……すまない」

蕾姫「とか言いながら顔がにやついている……ぐはっ!？」

リンは蕾姫に全力で踵落としをした。蕾姫は痛みで悶えている

リン「じゃあ、次行くぞ」

妙に元気になったリンが声を上げる

リン「せーの」

全員「王様だくれだ!！」

烏「僕？」

蓮「ふむ……命令を出したまえ」

烏「じゃあ、五番は二番に告白してください」

鈴「何言ってるのよ!？」

蕾姫「五番は俺んだけど二番って誰？」

シノン「私」

シノンは嫌そうな顔をしながら答える

蕾姫「ずっと好きでした。付き合ってください!！」

シノン「無理、あり得ない」

即刻断るシノン。orzになる蕾姫

蕾姫「わかってたけど、心が痛い……」

肩を叩かれたので蕾姫が顔を上げるととてもいい笑顔をしたリンがいた

リン「人の彼女を何口説いてるのかな?かな?」

蕾姫「こっ、これはゲームだから、仕方ないことだったんだよ……?」

リン「問答無用!」

リンは、二刀流最上位技>>ジ・イクリップス<<を放つ

蕾姫「ぎゃあああ!!」

リン「悪は滅びた。じゃあ、次行くぞ!せーの」

全員「王様だくれだ!!」

蕾姫「きた!俺が王様だ!じゃあ、1〜8番はこれから俺の意見に絶対服従な?王様の命令は絶対何だろう?」

そこに居た全員が武器をとる

蕾姫「えっと……何で武器を構えるのかな?」

蕾姫以外「……当たり前だろ!!」「」「」「」

蕾姫は逃げ出した

リン「……次回から本編に移ります。あんな作者ですがこの小説をよろしく願います」

手がかりと新たな始まり(前書き)

A L O 編開始です

手がかりと新たな始まり

エギルにメールで彼のやっている喫茶店兼バー >> Dicey C
afe << に向かう

「待たせたな」

表札にはCLOSEと書いてあったが、かまわず入る。するとそこにはハゲで巨漢のバーテンダー、エギルともう一人、キリトがいた

「リン……なのか!？」

どうやらエギルにもう一人くるとだけ聞かされていたようだ

「久しぶり……か? はじめましてって言った方がいいのか？」

「まあ……現実でははじめまして、だな」

苦笑するキリト

「で、話って何だ？」

「これについてだ」

エギルは一枚の写真を差し出してくる。そこには、鳥かごの中にいる一人の女性が写っていた

「……キリト」

俺が声をかけるとわかってるというようにつなずいて口を開く

「ああ、アスナに似てる。実はアスナをはじめとする数百人のプレイヤーがまだ目覚めてないんだ」

「なっ……………」

あり得ない。茅場は全てのプレイヤーを現実に戻すと言った。彼の性格からするとそれを破ることはまずない

「見たところ、ゲーム内のスクリーンショットのようだが…………タイトルは？」

するとエギルはカウンターの下からゲームソフトを二つ取り出すと俺とキリトに手渡してきた。タイトルは>>A L f h e i m O n
l i n e<<

「聞いたことないハードだな……………」

キリトがそう言ったので右上に印刷された文字をみる。そこには>
>A m u S p h e r e<<と書かれている

「>>アミュスファイア<<。オレたちが向こう側にいる間に発売されたんだ。ナーヴギアの後継機だよ、そいつは」

「よく出せたな…………SAOで危険性がわかったというのに……………」

「市場のニーズを止めることができなかつたんだろっよ」

皮肉にもなとエギルはつぶやく

「じゃあ、これもVRMMOなのか」

「アルヴヘイム、妖精の国っていう意味だとさ」

「妖精……。なんかほのぼのしてるな。まったり系のMMOなのか」

「それが、そうでもなさそつだぜ。ある意味えらいハードだ」

そうキリトが言うとエギルはニヤリと笑う

「ハードって、どんなふうにだ？」

「どスキル制。プレイヤースキル重視。PK推奨」

「ど……」

絶句するキリトを尻目にエギルは続ける

「いわゆる>>レベル<<は存在しないらしいな。各種スキルが反復使用で上昇するだけで、育ってもヒットポイントは大して上がらないそうだ。戦闘もプレイヤーの運動能力依存で、剣技なし、魔法ありのSAOつてとこだな。グラフィックや動きの精度もSAOに迫るスペックらしいぜ」

「へえ……そりゃ凄いな」

「プレイヤースキル重視か。俺たちにとっては好都合だ」

「え、何で？」

わからないといったかんじで首を傾げるキリト

「アスナの可能性が少しでもあるならば行くだろ？ やらないで後悔するより、やって後悔しようぜ。それに俺たちが、死の無い世界で育ったようなもやしプレイヤーなんかには負けるかよ」

「ああ!」

俺はキリトの返事を聞き満足してうなずいた

「ところで、PK推奨ってのは？」

「プレイヤーはキャラメイクでいろんな妖精の種族を選ぶわけだが、違う種族間ならキル有りなんだとさ」

「そりゃ確かにハードだ。でも、いくらハイスペックでも人気出ないだろ、そんなマニア向けな仕様じゃ」

するとエギルは再び笑う

「そう思ったんだけどな、今大人気なんだと。理由は>>飛べる<<からだそうだ」

「飛べる……?」

「妖精だから羽根がある。フライト・エンジンとやらを搭載してて、慣れるとコントローラなしで自由に飛び回れる」

キリトがへえつと声を上げる。飛行か……それがこのゲームのミソ

つてとこか

「飛べるってのは凄いな。羽根はどう制御するんだ？」

「さあな。だが相当難しいらしい。初心者は、スティック型のコントローラを片手で操るんだとさ」

「片手をとられるのはきついな……でも、行かないとな。そのスクリーンショットを見せて、さらにアルヴヘイム・オンラインを見せてきたってことは、その中のスクリーンショットなんだろう？」

エギルはパツケージを取ると裏返す。そこに描かれている巨大な樹を指差すと言った

「世界樹と言ったとき。プレイヤーの当面の目標は、この樹の上の方にある城に他の種族に先駆けて到着することなんだそうだ」

「到着って、飛んでいけばいいじゃないか」

「そんなに簡単にできたらクエストにならんだろうが」

呆れた声を出す俺

「なんでも滞空時間ってのがあって、無限には飛べないらしい。この樹の一番下の枝にたどり着けない。でもどこにも馬鹿なことを考えるやつがいるもんで、体格順に五人が肩車して、多弾ロケット方式で樹の枝を目指した」

「ははは、なるほどね。馬鹿だけど頭いいな」

「それ矛盾してないか？」

「うむ。目論見は成功して、枝にかなり肉薄した。ギリギリで到着はできなかったそうだが、五人目が到達高度の証拠にしようと写真を何枚も撮った。その一枚に、奇妙なものが写り込んでたらしい。枝からぶら下がる、巨大な鳥かごがな」

「鳥かご……」

「そいつをギリギリまで引き伸ばしたのが、その写真ってわけだ」

「よし……場所も目的地もわかったところで……な」

「ああ……エギル、このソフト、もらっていいか」

「一瞬気遣わしげな顔をしたが、次の瞬間それは和らいだ」

「おまえらのことだ。とめても無駄だろ？」

「ああ、この眼で確かめる」

「死んでもいいゲームなんて又ルイ。死地から何度も抜け出してきた力を見せてやるよ。そうと決まればゲーム機を買いにいこうぜ」

「ナーヴギアで動くぞ。アミュスフィアは、単なるアレのセキュリティ強化版でしかないからな」

「そりゃ助かる」

エギルはにやりと笑うと言った

「ま、もう一度アレを被る度胸があるなら、だけどな」

「もう何度もかぶってるさ」

「ふっ……」

キリトが目配せしてくるので俺はうなずいた

「じゃあ、俺は帰るよ。ご馳走様、また情報があつたら頼む」

「情報代はつけといてやる。アスナを助けだせよ。そうしなきゃ俺たちのあの事件はおわらねえ」

「もちろん助けるさ。アスナにはいろんなことを教えてもらったしな」

「親孝行な息子さんだこと」

くっくとキリトが笑いながらちやかす

「うるせえよ。旦那さま？」

「そついえば隣のやつ。うちに女の子を連れてきやがったぜ？」

俺たちの軽口の応酬に笑っていたエギルがニヤニヤしながら言った

「ほう……おまえも隅に置けないな」

キリトもニヤニヤしながら追い討ちをかける

「詩乃とはそういう関係じゃ……」

「そうか、詩乃っていうのか。名前で呼びあってるし……どうなんでしょうね、キリトさん」

「いやー、恋人ないしは、かなり親密な関係にあると見ていいと思いますよ」

「……」

燐は顔を真っ赤にしている。これでは、好きだと語っているも同然である

「……とりあえず、アスナを助けだしてから紹介する」

「わかった。楽しみにしてるぜ」

「ああ。いつかここでオフをやるう。その時にでも、な」

三人で拳を合わせ、俺たちは外に出た

「さて、今から行くか？」

「いや、明日にしよう。実は明日から親が一週間ぐらいいないんだ」

「禁止されてんのか……そういえば、束縛されてたって言ってたな。大丈夫なのか？」

「ああ……まあ、何とかなるさ。明日、お前の家に行くから、一緒に行こうぜ。グローバルIPが一緒になるからいけるはず」

「おし……じゃあ、また明日な」

「ちょっとまで。アスナの現実の体を見舞いに行ってからALLOにダイブしたいんだが」

「わかった。じゃあ明日八時に駅前だな」

「了解。また明日な」

「おう」

そう言って俺たちは別れた。これが新たな冒険の始まりだった

手がかりと新たな始まり（後書き）

蕾姫「始まりました！ALO編」

リン「わかったから落ち着け」

蕾姫「……はい……」

リン「で、俺の種族は何なんだ？」

蕾姫「アンケートの結果、闇妖精インプが三票、風妖精シルフが二票、猫妖精ケットシーが一票です。よってインプに決定します！投票してくれた人たち、ありがとうございます！」

リン「闇妖精か……暗闇で飛べるんだっけ？」

蕾姫「そう、絶剣がこの種族だね」

リン「……絶剣？」

蕾姫「それはスルーして。では次回もよろしくお願いします！」

ALLOと少女との邂逅（前書き）

短いです。まだゲームに入れませんでしたorz

A L Oと少女との邂逅

俺は次の日、両親が出ていくのを確認した俺は、隠しておいた>> ナーヴギア<<を手に取った。所々色が落ちているのがわかる。あの世界で俺と一緒に戦った戦友……といったら変だが、枷ではあつたがあの世界に飛ばしてくれそれを維持してくれていたのだから、あながち間違いではないだろう。俺はその>>ナーヴギア<<を鞆に入れ玄関から外に出た。軽く気分が高揚している。アスナのこともあるが、新たな世界で親友とまた戦えるのだ。気分の高揚を抑えることは無理な相談だろう。そんなことを思っていると駅前に着いた。現在時刻七時五十分。昨日同じ場所で、詩乃と待ち合わせしたんだよな……キスのことを思い出して顔を赤くする燐。そんな燐に一人の男が声をかけた

「よう、燐。待たせたか？……何顔を赤くしてんだよ」

「何でもない。よう、キリ……和人」

キリトと言い掛けるとキリトは苦笑いを漏らした

「よし行くつぜ」

キリトはバイクのヘルメットを投げ渡してくる。今どき珍しいバイクだった。俺はヘルメットをキャッチすると言った

「珍しいな。もうすぐ使えなくなるが……」

キリトは苦笑いで応える

「エギルのやるつに騙されたんだよ。それより乗れよ」

「了解」

バイクの後ろに乗る。ニケツってアウトじゃなかったっけ？

俺たちはかなり大きい病院に到着する。通行パスを発行してもらい、エレベータに入る

「何階？」

「最上階。その突き当たりだ」

最上階で降り突き当たりまで進む。突き当たりの部屋の札に結城明日奈と書かれているのを確認し、中に入る

「アスナ……」

中であつたカーテンを開けるとそこにはS A O時代と何らかわりない……と言つと変だが……アスナがいた

「アスナ。お前は俺たちが助けだす。だから待っていてくれ」

聞こえないとはわかっていてもそう声をかけざるを得なかった。しばらく二人でアスナを見つめた

「…………そろそろ行こうか」

三十分ぐらいそうしていただろうか。俺はそう声をかけた

「ああ…………行こう。助けにな」

拳を軽くキリトの拳と合わせキリトの家に向かう

キリトの家に着くと一人の少女がマフィンを頬張っていた。そしてこちらに気付くと

「ぶぐつ!?」

喉にマフィンをつまらせたようだ。キリトが慌てて駆け寄りジュースをその少女の口に突っ込んでことなきをえた

「ぶはっ!し…………死ぬかと思った…………」

「そそっかしい奴だなあ。もっと落ち着いて食え」

「うっ」

肩を落とす少女。そのやりとりを俺は微笑みながら見守っていた

「えっと、どなたですか？」

「鈴木 燐といいます。今後ともよろしくお願いします」

「堅いなあ、燐。こっちは俺の妹の直葉だ」

少女の名前は直葉だそうだ

「和人の妹の直葉です。先程は見苦しいところをお見せして……」

その言葉を手で制して、俺は口を開いた

「まあ、失敗は誰にでもあるから。とりあえずお邪魔します」

そういつて俺とキリトはキリトの部屋に向かった

「じゃあ、行くか」

「そうだな」

ナーヴギアをかぶって準備完了

「リンク・スタート！」

そう叫んだとたんに光が消える。重力が消え、音が消える。この感覚も久しぶりだなと思いつつ待っていると初期設定をする場所へと入った。名前はもちろん>>R i n k<<。性別は男。容姿はランダムらしい。まあどうでもいいが。選べるキャラクターは九種類。火妖精サラマンダー、風妖精シルフ、土妖精ノーム、水妖精ウンデイーネ、猫妖精ケットシー、影妖精スプリガン、闇妖精インプ、鍛冶妖精レプラコーンらしい。初期装備の色からインプかスプリガンで悩んだが前情報がある程度持っていたので、俺はインプを選ぶ。全ての設定が終了し、ゲームが始まるのを待つ。しかし、突如としてノイズが走り、落下が始まる。俺は恐怖の変わりに感じていたのは、心配だった

「（いきなりバグかよ……）」

そう思いつつ落ちていった

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3188w/>

ソードアート・オンライン～二人目の双剣使い～

2011年10月28日08時17分発行